

富山県南砺市  
**徳成Ⅱ遺跡**

— 県営ほ場整備事業(担い手育成型)北山田南部地区に伴う  
埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(7) —

2006年2月  
南砺市教育委員会

富山県南砺市

# 徳成Ⅱ遺跡

－県営ほ場整備事業(担い手育成型)北山田南部地区に伴う  
埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(7)－

2006年2月  
南砺市教育委員会

## 序

南砺市中央部に位置する北山田南部地区は、山田川左岸の河岸段丘上に位置します。県営ほ場整備事業に伴い調査が行われ、縄文時代から中世まで様々な遺跡が発見され、多くの歴史遺産が埋蔵されていることがわかりました。

今回の調査は、県営ほ場整備事業（担い手育成型）の実施に伴う徳成Ⅱ遺跡の発掘調査です。当地区におけるほ場整備事業関連の遺跡発掘調査は、平成10年度の試掘調査から始まりました。遺跡の大半は盛土により保存し、用排水路用地及び一部の水田削平部分について本調査を実施してきました。

今年度調査では、中世の掘立柱建物、竪穴状土坑、土坑、井戸、溝などの遺構を確認しました。また、縄文土器、中世土師器、珠洲、下駄などの木製品、砥石、包丁などの縄文、中世期の遺物が出土しました。本書は、その調査結果をまとめたものです。郷土の歴史解明や学術研究等に活用していただければ幸いです。

この調査の実施にあたり、富山県農林水産部・ほ場整備事業北山田南部地区委員会・南砺市シルバー人材センター・株式会社中部日本鉱業研究所をはじめ、地元住民の方々に多大なご協力を賜りましたことに対し、深く感謝するものであります。

平成18年2月

南砺市教育委員会

教育長 梧桐 角也

## 例 言

- 1 本書は、県営は場整備事業（担い手育成型）北山田南部地区に伴う富山県南砺市徳成Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。調査は平成17年5月27日から同年9月22日まで行った。調査面積は2,838m<sup>2</sup>である。
- 2 調査は富山県農林水産部の委託を受け、南砺市教育委員会が実施した。現地調査および報告書作成については、南砺市教育委員会の監理の下、株式会社中部日本鉱業研究所が実施した。
- 3 現地調査は南砺市教育委員会文化課文化財保護主事佐藤聖子の監督の下、株式会社中部日本鉱業研究所藤田慎一が担当した。報告書の執筆においては、Ⅱ-1を佐藤聖子が、これ以外を藤田慎一が行った。
- 4 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の諸氏の協力、助言を頂いた。記して謝意を表する。  
赤澤徳明 五十嵐心一 越前慎子 久々忠義 町田賢一 松山充宏 光谷拓実 森隆 渡辺暁央
- 5 自然科学分析について、木製品の年輪年代測定を光谷拓実氏（奈良文化財研究所）、古銭の成分分析を五十嵐心一氏、渡辺暁央氏（金沢大学工学部）、竹内勝信（株式会社中部日本鉱業研究所）に依頼した。また、石製品の石材同定については、小幡真弓（株式会社中部日本鉱業研究所）の協力を得た。
- 6 調査参加者は次の通りである。（五十音順 敬称略）

(現地調査)

厚村裕子 荒井とよ 上島勝枝 鵜野綾子 大門ソト 大島笑子 鍛冶本正夫 片田行儀 木下実 坂井松枝  
祖谷淳一郎 高下久義 竹川明子 立野嘉久 棚田俊雄 中井静子 中田睦子 林長敏 細木八重子 堀とよ  
水口健 水口善嗣 溝口外雄 萩口和弘 宮川玉枝 宮東伝吉 森 豪 森田由美子 山崎信宗 山田一雄  
山田和子 山田きみ子 山田賢庄 山畠義治 山道文子 山村美喜子 吉田信子

(整理作業)

厚村裕子 北川泰子 真田恭子 高橋英吏子 橋真理子 畑シノブ 萩口和弘 森田由美子 渡辺賀世子

## 凡 例

- 1 本書で使用した方位は真北である。また、標高は海拔高である。
- 2 座標は国土座標（世界測地系）を基に、X60540、Y22790をそれぞれX 0、Y 0の基準点とし、ここから2mを一区画としてグリッドを設定した。
- 3 遺構の表記には次の記号を用いた。  
S B : 挖立柱建物 S D : 溝 S E : 井戸 S K : 土坑 S X : 壇穴状土坑 P : ピット・小穴
- 4 土色、土器胎土色の観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』(2002年版)による。
- 5 遺構図面の縮尺については掘立柱建物、壇穴状土坑は1/60、井戸は1/40、その他の遺構については原則として1/40とした。また、遺物実測図については原則として土器、陶磁器、石製品、金属製品を1/3、木製品を1/4、錢貨を1/1とした、これ以外の縮尺のものについてはその都度、縮尺率を示した。
- 6 出土した中世土師器皿と珠洲について、土師器皿の分類、編年観は、富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所刊行の『梅原胡摩堂遺跡（遺物編）』(1996)を、珠洲は、吉岡康暢氏の珠洲編年（『中世須恵器の研究』吉川弘文館1994）を基にしている。

# 目 次

序	第16図 SK 5・12・14・48・49・51平面図・断面図 (1/40) ···· 39
例言・凡例	第17図 S E 1・2・3 平面図・断面図 (1/40) ···· 40
目次	第18図 S E 4・5・6・7 平面図・断面図 (1/40) ···· 41
I 位置と環境 ······ 1	第19図 溝状遺構集中区平面図 (1/160) ·断面図 (1/60) ···· 42
第1図 位置と周辺の遺跡 (1/25,000) ······ 2	第20図 壁穴状土坑 (S X) 出土土器・陶磁器 ······ 43
II 調査に至る経緯と経過 ······ 3	第21図 壁穴状土坑 (S X) ・土坑 (SK) 出土土器・陶磁器 ···· 44
1 調査に至る経緯 ······ 3	第22図 井戸 (S E) 出土土器・陶磁器 ······ 45
2 調査の経過 ······ 4	第23図 穴 (P) 出土遺物 ······ 46
3 日誌抄録 ······ 4	第24図 遺構外出土遺物 ······ 47
III 調査の概要 ······ 5	第25図 壁穴状土坑 (S X) ・井戸 (S E) 出土木製品 ···· 48
1 8地区の概要 ······ 5	第26図 井戸 (S E) 出土木製品 1 ······ 49
2 基本層序 ······ 5	第27図 井戸 (S E) 出土木製品 2 ······ 50
第2図 基本層序概念図 ······ 5	第28図 出土石製品 ······ 51
第3図 調査区位置図 (1/5,000) ······ 6	第29図 出土金属製品 (錢貨・鉄製品) ······ 52
3 遺構 ······ 7	観察表 ······ 53
4 遺物 ······ 13	遺構観察表 ······ 53
表1 德成II遺跡 (8地区) 遺構年代 ······ 17	遺物観察表 ······ 65
IV まとめ ······ 18	図版1 調査区全景
参考文献 ······ 19	図版2 8地区検出遺構(1)
V 自然科学分析 ······ 20	図版3 8地区検出遺構(2)
徳成II遺跡出土の錢貨についての分析 (竹内・藤田) ··· 20	図版4 8地区検出遺構(3)
出土木製品の年輪年代 (光谷) ······ 25	図版5 8地区検出遺構(4)
第4図 德成II遺跡8地区遺構配置図 ······ 26・27	図版6 8地区検出遺構(5)
第5図 S B 1 平面図・断面図 (1/80) ······ 28	図版7 8地区検出遺構(6)
第6図 S B 2 平面図・断面図 (1/80) ······ 29	図版8 8地区検出遺構(7)
第7図 S B 3・4 平面図・断面図 (1/60) ······ 30	図版9 8地区検出遺構(8)
第8図 S B 5・6 平面図・断面図 (1/60) ······ 31	図版10 8地区出土遺物(1)
第9図 S X 1 平面図・断面図 (1/60) ······ 32	図版11 8地区出土遺物(2)
第10図 S X 2 平面図・断面図 (1/60) ······ 33	図版12 8地区出土遺物(3)
第11図 S X 4・5 平面図・断面図 (1/60) ······ 34	図版13 8地区出土遺物(4)
第12図 S X 6・9 平面図・断面図 (1/60) ······ 35	図版14 8地区出土遺物(5)
第13図 S X 10・21平面図・断面図 (1/60) ······ 36	図版15 8地区出土遺物(6)
第14図 S X 13平面図・断面図 (1/60) ······ 37	図版16 8地区出土遺物(7)
第15図 S X 19・20・22・25・27平面図・断面図 (1/60) ··· 38	報告書抄録

# I 位置と環境

徳成Ⅱ遺跡は小矢部川の支流である山田川左岸の河岸段丘上に立地し、標高は海拔高90m前後をはかる。遺跡の範囲は東西約260m、南北約450mであり、現在までの発掘調査で縄文時代中期から晩期、古墳時代、古代、中世、近世の遺構、遺物が確認されている。また、周辺の遺跡でも同時期の遺構や遺物が出土しており、徳成Ⅱ遺跡との関係がうかがえる。

縄文時代の周辺遺跡は、隣接する徳成遺跡や東殿遺跡のほか、遺跡の東側、山田川の対岸に位置する井口遺跡や遺跡の西側に所在する竹林Ⅰ遺跡などがある。徳成遺跡は中期から後期にかけての土器、磨製石斧、打製石斧、石棒などが出土している。東殿遺跡では早期と考えられる石槍が採集されている。井口遺跡は後期井口式の標識遺跡であり、また、金沢市チカモリ遺跡や能登町真脇遺跡で見られる環状木柱列遺構を検出している。竹林Ⅰ遺跡は中期の竪穴住居跡、貯蔵穴や土坑墓と考えられる土坑が検出され、土器をはじめ、石鏃、石錘、石斧、凹石、土偶などが出土地する。

弥生時代、古墳時代の遺跡は、南砺市内全域でも遺跡数が少ない。弥生時代は、梅原胡摩堂遺跡で土器や管玉などが若干見られる程度である。古墳時代については、徳成Ⅱ遺跡で前期の土器が見つかっており、梅原胡摩堂遺跡、久戸遺跡、神成遺跡などでも遺構や遺物が確認されている。

古代について、この地域は、『和名抄』や『越中国官倉納穀交替帳』に記載されている川上郷や川上里にあたり、砺波郡の官倉が置かれていたと考えられる。梅原安丸V遺跡では、船着場遺構が確認され、官倉との関係をうかがうことが出来る。このほか、梅原胡摩堂遺跡、梅原落戸遺跡、在房遺跡などでも古代の遺構、遺物が検出されている。徳成Ⅱ遺跡では、8世紀～9世紀代の掘立柱建物や遺物等が出土しており、在地豪族である利波臣や畿内の寺社による開発の一端をうかがうことが出来る。

中世については、文献史料によると11世紀後半には後三条天皇の御願寺である円宗寺領として石黒庄が成立し、平安時代末期までには、石黒上郷・同中郷・同下郷の三郷のほか、弘瀬郷、山田郷、吉江郷、太海郷、院林郷、直海郷、大光寺郷の十郷が成立していたと考えられ、徳成Ⅱ遺跡は、山田郷の範囲内に含まれる。

山田郷は、本家は円宗寺、領家は仁和寺菩提院であり、旧福光町北東部から旧城端町西部の山田川西岸一帯がその領域である。この範囲には、徳成Ⅱ遺跡のほか、宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡、梅原胡摩堂遺跡、梅原安丸遺跡などが立地している。宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡は、『三州志』に、永正年間中（1504～21）上杉房義の家臣、小林壱岐守が居城したと伝えられており、現在でも土塁が部分的に残っている。また、周辺から五輪塔や珠洲、和鏡等が出土していることから墓地や経塚等の施設があったと考えられる。梅原胡摩堂遺跡は、中世から近世にかけての集落遺跡であり、多くの掘立柱建物や竪穴状土坑が検出されている。遺構は、12世紀～14世紀代のものが遺跡の北側に、15世紀～17世紀代のものが南側に集中している。南側について、久々忠義氏は、瑞泉寺5代賢心の兄、賢勝とその子である賢春が梅原の地に居住していたことから、「梅原坊」を中心とした寺内町が形成されていたと考察している。（福光町教育委員会1997）梅原安丸遺跡では船付場遺構が検出されており、倉庫と考えられる掘立柱建物群も含め、莊園内の年貢等を集積し、莊園領主の元へと輸送する場と考えられている。

（藤田慎一）



第1図 位置と周辺の遺跡 (1/25,000)

- 1…徳成Ⅱ遺跡 2…徳成遺跡 3…東殿Ⅱ遺跡 4…東殿Ⅲ遺跡 5…東殿Ⅳ遺跡 6…梅原出村Ⅲ遺跡 7…梅原出村Ⅱ遺跡
- 9…梅原上村遺跡 10…うずら山遺跡 11…梅原落戸遺跡 12…梅原胡摩堂遺跡 13…宗守遺跡 14…神成遺跡 15…宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡
- 16…久戸東遺跡 17…鍛冶三十三塚 18…THJ-15遺跡 19…THJ-16遺跡 20…梅原出村南遺跡 21…竹林Ⅱ遺跡 22…王塚
- 23…田屋川原古戦場 24…古戦場南遺跡 25…江田南遺跡 26…森清遺跡 27…宮後北遺跡 28…池尻遺跡 29…久保・池田No2遺跡
- 30…久保・池田No3遺跡 31…宮後キンケン塚 32…宮後遺跡 33…井口城跡 34…井口遺跡 35…井口南遺跡 36…井口A遺跡 37…蛇喰A遺跡
- 38…長樂寺B遺跡 39…久保・池田No6遺跡 40…蛇喰正覚寺遺跡 41…蛇喰C遺跡 42…川上中遺跡 43…川上中土居の宮遺跡 44…次郎丸A遺跡
- 45…吉松A遺跡 46…長樂寺A遺跡 47…THJ-19遺跡 48…信末A遺跡

## II 調査に至る経緯と経過

### 1 調査に至る経緯

平成8年（1996）、徳成・東殿・利波河（とのご）の3地区を含む北山田南部地区において、県営ほ場整備事業（担い手育成型）実施の計画が策定された。この事業は、北山田南部地区95haを対象とし、平成9年度より14年度を事業実施年とあてていた。しかし、対象地内には周知の遺跡として縄文時代中・後期の徳成遺跡、縄文時代の石槍が出土している東殿遺跡が存在していたこと、同じく河岸段丘上に位置する北側の梅原地区では、縄文時代から中世まで多数の遺跡が確認されていたことから、対象地区内にも遺跡が存在することが予想された。このことから、福光町教育委員会（当時：以下、町教委）では、県埋蔵文化財センターより調査員の派遣を受け、平成8年12月に分布調査を実施したところ、遺物の散布を確認し、対象地区内に新たに4つの遺跡が存在することがわかった。

町教委では、遺物の散布が認められた部分において、平成10年から国庫補助金をうけて試掘調査を実施した。バッカフォウによって田に何箇所か筋堀をし、地山が検出できるまで掘り下げ、遺物包含層及び遺構の有無、遺跡の遺存高を標高で確認するといった作業を行ったところ、遺跡の遺存状況が良好な箇所が多く確認された。このことから、遺跡の保護措置について、県農地林務部・県教育委員会・地元土地改良区と協議し、遺跡が存在する箇所については、ほ場整備工事施工に際しては盛土を行う事で水田下に保存し、一部の面工事、農道建設、用排水路着工部分について本調査を実施する事となった。また事業の進捗状況をかんがみ、平成16年度より調査の一部を南砺市教育委員会監理の下に委託し、本年度は株式会社中部日本鉱業研究所に委託した。調査は田面調整箇所である。なお、本年度をもって本事業に伴う本調査を終了することとなった。これまでの調査面積、遺跡の内容は次のとおりである。

（佐藤聖子）

年度	試掘調査面積	調査対象遺跡	本調査面積	調査対象遺跡	備考
10	3.69ha	徳成Ⅱ	—	—	
11	21.45ha	徳成・徳成Ⅱ・東殿Ⅲ・東殿Ⅳ	—	—	
12	2.00ha	徳成	1,000m <sup>2</sup>	徳成Ⅱ	
13	14.19ha	東殿・東殿Ⅱ・東殿Ⅳ	900m <sup>2</sup>	徳成・徳成Ⅱ	
14	3.00ha	東殿Ⅱ・東殿Ⅲ	1,515m <sup>2</sup>	徳成Ⅱ	
15	—	—	2,860m <sup>2</sup>	徳成Ⅱ・東殿Ⅲ・東殿Ⅳ	
16	—	—	3,542m <sup>2</sup>	徳成・東殿・東殿Ⅲ	内、2,940m <sup>2</sup> を（株）イビソクに委託
17	—	—	3,846m <sup>2</sup>	東殿・徳成Ⅱ	内、2,838m <sup>2</sup> を（株）中部日本鉱業研究所に委託

遺跡名	帰属時代	検出遺構	出土遺物
徳成	縄文中期～後期・古代・中世・近世以降	土坑・溝・ピット	縄文土器・須恵器・中世土師器・陶磁器
徳成Ⅱ	縄文後期後半・古墳前期・古代・中世・近世以降	土坑（住居？）・溝・ピット	土師器・須恵器・中世土師器・青磁・越前・陶磁器
東殿	縄文・中世	土坑・溝・ピット	珠洲・中世土師器・瀬戸
東殿Ⅱ	古代・中世・近代	土坑・溝・ピット	土師器・須恵器・中世土師器・珠洲
東殿Ⅲ	縄文後期後半・古代・中世・近世以降	炉跡・焼土塊・土坑・溝・ピット	縄文土器・土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・越前・陶磁器
東殿Ⅳ	古代・中世・近代	土坑・溝・ピット	土師器・須恵器・中世土師器・銅貨

## 2 調査の経過

現地調査は平成17年5月27日～同年17年9月22日まで実施し、整理作業を平成18年2月28日まで行った。

表土掘削前に南砺市教育委員会との事前の打合せおよび境界測量、調査区域の草木伐採をまず行った。そして、6月10日より、バックフォーによる表土掘削を6日間行い、残土は調査区域外に仮置きした。その後、国土座標を基にグリット杭を株式会社中部日本鉱業研究所発掘監理課において10m間隔で打設し、2m間隔を単位とするグリットも設定した。包含層掘削は6月22日より、社団法人南砺市シルバー人材センター会員が、調査に参加して行った。包含層掘削の後、調査区を任意で3ブロックに分け、遺構確認作業と、遺構掘削および遺構図面作成、写真撮影を並行して9月14日まで行った。遺構確認作業の後、1/200で概略図を作成し、遺構番号をつけ、掘削作業を開始した。遺構の状況に応じて、断面図、平面図、遺物の出土状況を調査員と調査補助員が図化し、遺構の記録写真等については調査員がすべて撮影した。航空測量は株式会社エイ・テックが実施し、ラジコンヘリによる撮影は9月15日に終了した。その翌日より、現地説明会の設営準備を行い、9月17日に説明会を開催し、約120名の見学者があった。その撤去作業後、掘立柱建物の確認作業等、若干の補足作業を行い。9月22日に南砺市教育委員会文化課の現地調査終了の確認を受けて、現地調査は終了した。出土遺物は中世の土器・陶磁器・木製品を中心にコンテナ55箱分が出土した。

報告書作成に関わる整理作業については、洗浄、注記等の作業および木製品の実測作業を9月から現地調査と並行して行った。現地調査終了後は、株式会社中部日本鉱業研究所文化財調査課整理室で行った。出土遺物の洗浄、注記、接合の後、実測、トレースを行った。自然科学分析については、錢貨の成分分析と木製品の年輪年代測定を依頼し、分析結果を頂いた。12月より、版下作成および、原稿執筆を行い、翌年1月27日に入稿し、南砺市教育委員会との校正作業を経て、2月28日に成果品とともに報告書を納品した

## 3 日誌抄録

6月7日（火）	調査区内の現況測量と草刈り	8月12日（金）～17日（水）	盆休み
6月8日（水）	現場事務所設置場所の造成	8月18日（木）	調査区北側の遺構半裁作業開始
6月9日（木）	現場事務所設置	8月24日（木）	調査区北側の遺構断面の撮影、 実測図作成開始
6月10日（金）～17（金）	表土掘削	9月6日（火）～7日（水）	
6月20日（月）	現状地盤高の測量、グリット設定	9月12日（月）～14日（水）	調査区の清掃
6月21日（火）	発掘資材等の搬入	9月15日（木）	ラジコンヘリによる撮影
6月22日（水）～7月8日（金）		9月16日（金）	現地説明会の設営準備
	人力による包含層掘削開始	9月17日（土）	現地説明会、参加者約120名
7月11日（月）	調査区南側の遺構半裁作業開始	9月19日（月）	現地説明会の後片付け
7月21日（木）	調査区南側の遺構断面の撮影、 実測図作成開始	9月20日（火）～21日（水）	
7月27日（水）	SX5で下駄等が出土、状況を撮影	9月22日（木）	掘立柱建物、竪穴状土坑の完掘状況の撮影 南砺市教育委員会による、現地調査終了の 確認検査、現地調査終了となる。
8月1日（月）	調査区中央部の遺構半裁作業開始		
8月4日（木）	調査区中央部の遺構断面の撮影、 実測図作成開始		

### III 調査の概要

#### 1 8 地区の概要

調査区は、遺跡範囲の北西部に位置しており、前年度調査が行われた7地区に隣接する。調査区の規模は、東西約56m、南北約80m、面積2,838m<sup>2</sup>であり、平面形状は階段状を呈している。

徳成Ⅱ遺跡の調査は今回で8度目を数えるため、本調査区は8地区と冠している。これまでの調査では、古代、中世を中心とした遺構、遺物が見つかっている。今回の調査では、掘立柱建物6棟、竪穴状土坑15基、土坑63基、井戸7基、溝7条、ピット977基と総数1000基を超える遺構が確認されている。多くの遺構は調査区の南側に集中し、時期は中世段階のものである。

#### 2 基本層序（第2図）

調査区の掘削前の標高は89.0m前後を数える。層序は凡そ7層に分けられる。平成16年度の調査区とほぼ同じ層序を成している。I層は表土および、7地区調査の際の排土である。

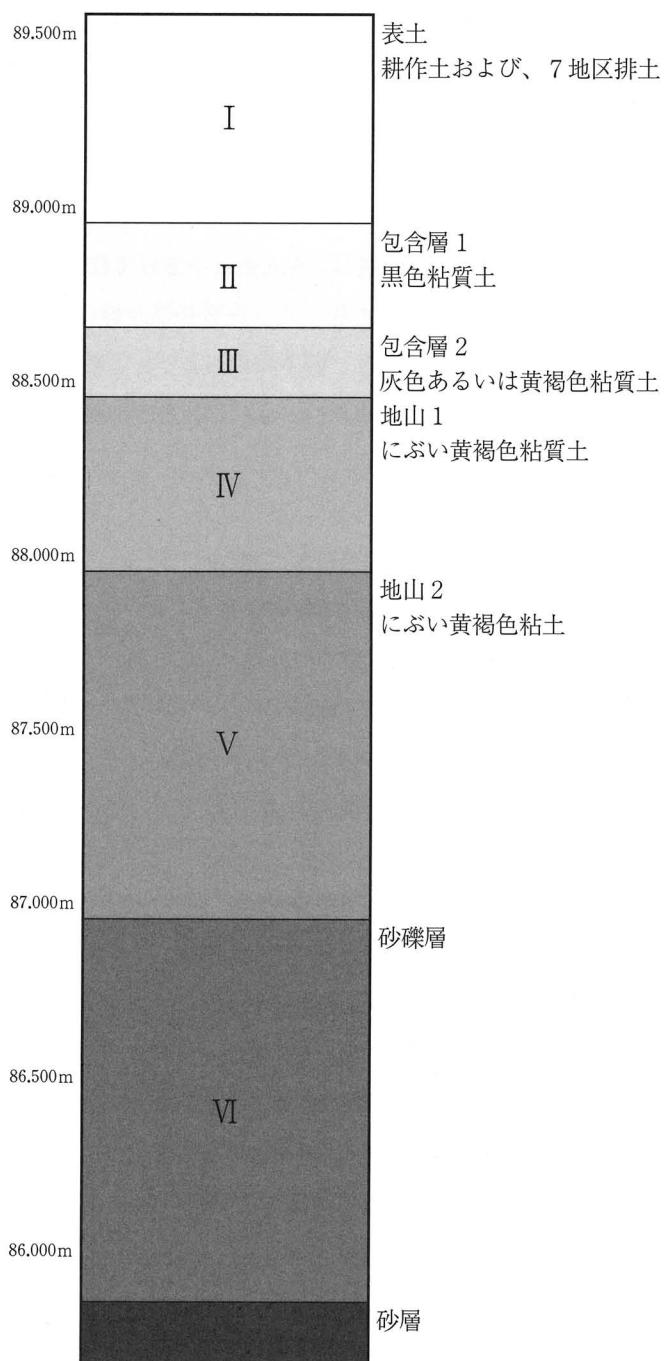
II層は30cm前後の包含層で黒色粘質土をベースとしている。掘削時には、縄文土器、中世土師器、珠洲、陶磁器が出土している。

III層は10cm前後の浅い層で灰色粘質土あるいは、黄褐色粘質土をベースとし、黒褐色土が混じるものである。この面でも、遺構検出面となる場合があり、平成16年度の調査では上面の遺構面として報告している。この層の形成については、中世の間、山田川の氾濫等で堆積した層と考え、包含層と解釈したい。

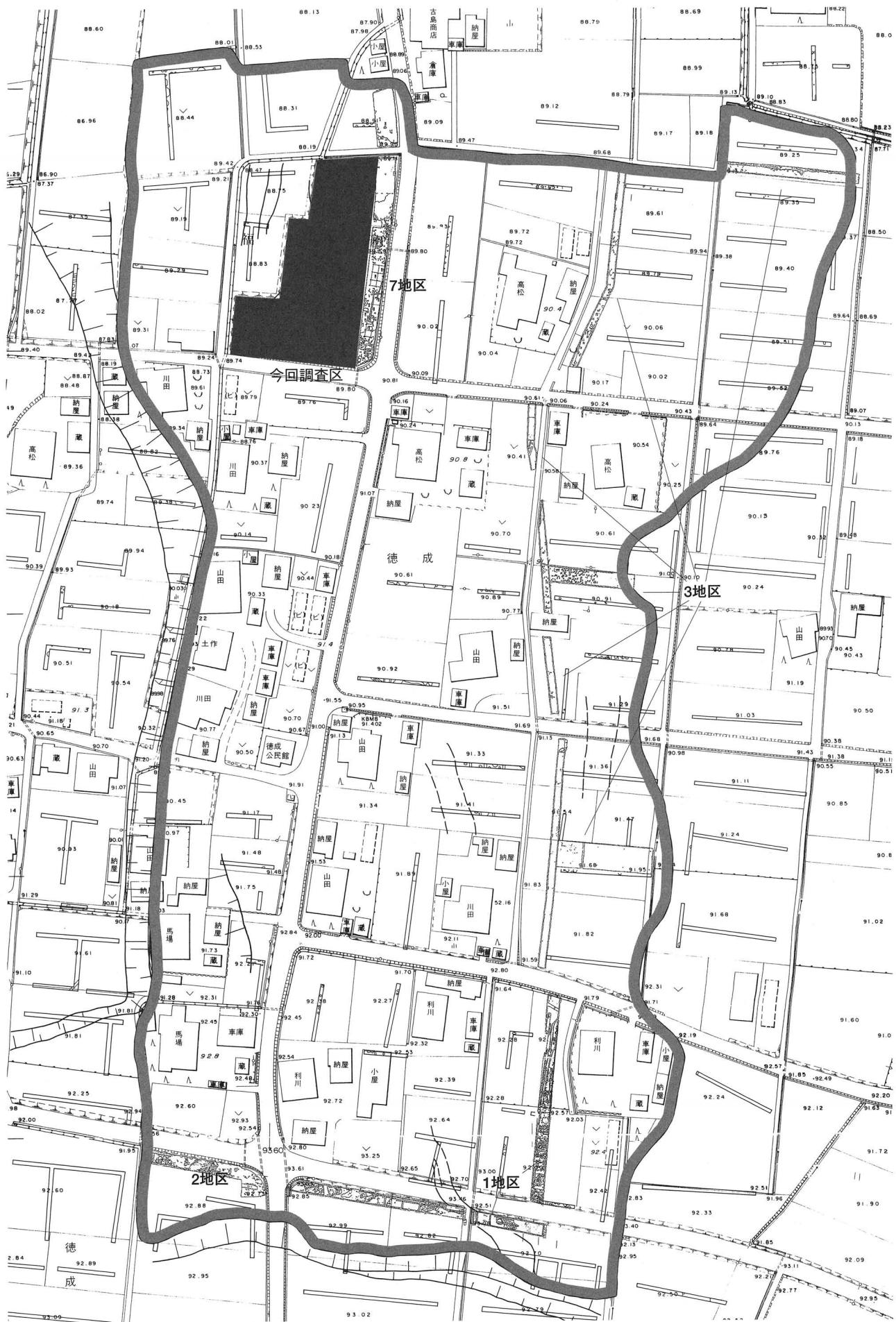
IV層からは地山となる。にぶい黄褐色粘質土がベースである。IV層の上面が遺構検出面となり、中世の遺構が確認されている。堆積は30~50cmである。

V層は、黄褐色粘土がベースで色調はIV層より混じりがないものである。堆積は1m前後である。

VI層は、いわゆる砂礫層であり、青灰色粘土などを含んでいる。この堆積が1mほどあり、今回の調査で検出された井戸は、この層を掘り抜いて、下の砂層より湧水を得ている。



第2図 8地区基本層序概念図



第3図 調査区位置図 (1/5,000)

### 3 遺構

#### 掘立柱建物

今回の調査では6棟の掘立柱建物を検出した。調査区の北側で確認したSB5を除いて、南側に集中している。

##### SB1（第5図・図版2-①）

調査区の中央より、やや南西に位置し、桁行4間×梁間3間の総柱建物である。床面積は73.5m<sup>2</sup>をはかる。主軸は真北より、約8°東へふれる。柱間は東西列が1.4~2.0m、南北列が1.5~2.2mである。柱穴の平面は、ほとんどが円形である。直径が約30~40cm、深さは約25~50cmと大きさではバラつきがみられる。埋土は地山土が若干まじった黄灰色粘質土が主体である。柱穴からは遺物が出土せず、時期を特定することは出来ないが、豊穴状土坑SX10やSX21に切られているため、13世紀後半以前と考えられる。

##### SB2（第6図・図版2-②）

調査区の中央より、やや北東に位置し、桁行4間×梁間2間の総柱建物である。床面積は34.8m<sup>2</sup>をはかる。主軸は真北より、約10°東へふれる。柱間は東西列が1.7~2.5m、南北列が2.1~2.9mである。柱穴の平面は、ほとんどが円形である。直径が約25~50cm、深さは約30~60cmと大きさではバラつきがみられる。埋土は地山土が若干まじった黒褐色粘質土や黒色粘質土が主体である。柱穴P595からは、古墳時代前期の小型壺の破片が1点出土しているが混入と考えられる。また、隣接するSB3とは床部分で重複しているが、柱穴の切り合いがないため新旧関係は不明である。

##### SB3（第7図・図版3-①）

調査区の中央より、やや北東に位置し、桁行2間×梁間2間の総柱建物である。床面積は28.3m<sup>2</sup>をはかる。主軸は真北より、約18°東へふれる。柱間は東西列が2.7~2.9m、南北列が2.2~2.5mである。柱穴の平面は、ほとんどが円形あるいは楕円形である。直径が約20~50cm、深さは約20~55cmと大きさではバラつきがみられる。埋土は地山土が若干まじった灰オリーブ色粘質土、黒灰色粘質土が主体である。柱穴からは遺物が出土せず、また、隣接するSB2とは床部分で重複しているが、柱穴の切り合いがなく新旧関係は不明である。

##### SB4（第7図・図版3-①）

調査区の中央より、やや北東に位置し、SB2やSB3に近接する。桁行1間×梁間1間の建物である。床面積は4.0m<sup>2</sup>をはかる。主軸は真北より、約6°東へふれる。柱間は東西列が1.8m、南北列が2.2mである。柱穴の平面は、ほとんどが不整円形である。直径が約30~40cm、深さは約20~55cmと大きさではバラつきがみられる。埋土は地山土が若干混じった黒色土あるいはオリーブ黒色粘質土が主体である。柱穴からは遺物が出土せず、時期を特定することは出来ないが、SB2や平成16年度調査区で検出された掘立柱建物と軸方向が近いため、12世紀~13世紀代と考えられる。また、規模が小さいため、納屋などに使われていたと考えられる。

##### SB5（第8図・図版3-②）

調査区の北東隅に位置し、平成16年度調査区で検出された柱穴を含め、桁行2間×梁間1間となる側柱建物である。床面積は13.5m<sup>2</sup>をはかる。主軸は真北より、約10°東へふれる。柱間は東西列が2.2~2.3m、南北列が3.0~3.1mである。柱穴の平面は、ほとんどが円形である。直径が約35~40cm、深さは約30~40cmと大きさではバラつきが少ない。埋土は地山土が若干まじった黒色土粘質土が主体である。柱穴からは遺物が出土せず、時期を特定することは出来ない。SB4と同じく納屋などに使われていたものと考えられる。また、平成16年度調査区で検出された掘立柱建物や、他の掘立柱建物とは距離を隔てて単独で存在しており、集落の北側への拡がりをうかがえる。

##### SB6（第8図）

調査区の中央より、やや南東に位置し、桁行2間×梁間2間の総柱建物と考えられる。西側南北列の2つ柱穴がS

X22・27に切られているため、推定の床面積は11.2m<sup>2</sup>をはかる。主軸は真北より、約15° 東へふれる。柱間は東西列が1.6～1.7m、南北列1.6～1.7mである。柱穴の平面は、ほとんどが円形あるいは楕円形である。直径が約25～30cm、深さは約35～45cmと大きさではバラつきが少ない。埋土は地山土が若干まじった黒褐色土が主体である。柱穴からは遺物が出土しなかったため時期を特定することは出来ないが、竪穴状土坑S X 4、22、27に柱穴が切られていることから13世紀～14世紀後半以前のものと考えられる。

#### 掘立柱建物のまとめ

今回の調査では、6棟を検出した。平成16年度の調査で4棟が検出され、その主軸は真北より約9～10° 東へふつており、今回検出されたS B 1・2・4・5と近似している。しかし、平成16年度の調査でも掘立柱建物からの遺物が出土していないため、時期は不明である。ただ、周辺より出土した遺物や切り合い関係から13世紀後半以前のものと推測したい。

#### 竪穴状土坑

今回の調査区では15基を検出し、特に調査区の南側で集中していた。これらは通常の土坑より規模が大きく、堆積状況やテラス等の付属施設の有無が確認できた。

##### S X 1 (第9図・図版6-①)

調査区の南西隅に位置し、平面形状は不定形である。規模は長軸6.9m、短軸4.8m、深さは最深で約70cmである。堆積状況から4回ほどの掘削の跡が確認出来るため、複数の土坑の切りあいによって生じたものか、土取りによるものと考えられる。遺物は、中世土師器皿、珠洲が出土している。時期は中世土師器皿から15世紀後半～16世紀前半と考えられる。

##### S X 2 (第10図・図版6-②)

調査区の南西隅に位置し、平面形状は不定形である。規模は長軸9.8m、短軸4.5m、深さは最深で約55cmである。複数のくぼみがあり、複数の土坑の切りあいによって生じたものか、土取りによるものと考えられる。また、西側のくぼみからは錢貨が12枚まとまって出土している。祭祀的な埋納の可能性があるが、詳細は不明である。他の出土遺物は、中世土師器皿、珠洲、錢貨がある。遺構の時期は、出土した中世土師器皿と、錢貨で最新のものが「永楽通宝」であることから、15世紀後半～16世紀前半と考えられる。

##### S X 4 (第11図・図版6-③)

調査区の南側に位置し、平面形状は不定形である。規模は長軸4.0m、短軸2.8m、深さ約80cmである。埋土は灰色粘質土や暗灰色粘質土が主体として堆積している。遺物は中世土師器皿、染付碗、輪羽口、下駄、砥石が出土している。時期は16世紀～17世紀と考えられる。

##### S X 5 (第11図・図版4-①、6-④、⑤)

調査区の南側に位置し、平面形状は方形を呈し、掘り方も箱状に深く掘り下げている。規模は長軸4.5m、短軸3.5m、深さは約90cmから1.0mである。埋土は上層が灰色粘質土、中層がオリーブ黒色粘質土、下層は暗灰色粘質土が堆積している。遺物は第2層で完形に近い中世土師器皿が、最下層の4層からは中世土師器皿、瀬戸、下駄、折敷、漆器椀等が出土している。時期は最下層より出土した遺物から15世紀後半～16世紀前半と考えられる。

##### S X 6 (第12図・図版6-⑥、⑦)

調査区の南側に位置する。北側は試掘調査により削平を受けているが、残存部分から復元して長軸3.9m、短軸3.4mの方形であったと考えられる。ほとんどが20cm程度の浅いものであるが、一部さらに20cmほど掘り下げてから黄褐色粘質土で埋めて整地した部分が見られる。遺物は出土していないため、時期は不明である。

#### S X 9 (第12図・図版 4-②、6-⑧、7-①)

調査区の南側に位置し、方形を呈する。規模は長軸4.3m、短軸3.1m、深さ約80cmである。南側には地山を成形した階段状の付属施設が構築されている。埋土は上層が灰オリーブ色、オリーブ灰色粘質土、下層は青灰色粘土が堆積している。床面は礫が散布し、階段部分も下部はかなり不定形であるため、下層の粘土層は、整地のために敷かれたものと考えられる。遺物は下層の粘土層から古瀬戸の瓶子、珠洲が出土している。時期は13世紀～14世紀と考えられる。

#### S X 10 (第13図・図版 5-①、7-②)

調査区の南側に位置し、方形を呈する。北側で井戸 S E 3 を、南側では S X 21を切っている。規模は長軸4.9m、短軸3.9m、深さ約50～70cmである。東側には地山を成形したテラスや階段状の付属施設が構築されている。また、南側には、周囲より20cmほど掘り下げたくぼみが見られる。これについては S X 10構築以前から掘られていた可能性も考えられる。遺物は中世土師器皿、石臼が出土している。遺構の年代は、出土した中世土師器の年代は13世紀後半～14世紀前半であり、北側に位置する井戸 S E 3 から年輪年代で1268年と示された折敷が出土していることから、14世紀前半を前後する時期と考えられる。

#### S X 13 (第14図・図版 5-②、7-③)

調査区の南側に位置する。平面形状はやや扇形を成す不定形のものである。規模は長軸8.4m、短軸4.8m、深さ約40～60cmであり、今回の調査では最大の竪穴状土坑である。遺構全体を約20cm掘り下げ、地山ブロックを含んだ、暗灰黄色、灰オリーブ色の粘質土で整地して貼床としている。また、貼床部分を掘削した直径30～40cm程度の穴も見つかっている。遺物は中世土師器皿、珠洲が出土しており、土師器皿は15世紀後半と考えられる。また、周辺からは鉄滓等も出土しており、野鍛冶等の作業場として使われていた可能性がうかがえる。

#### S X 19 (第15図・図版 7-④)

調査区の南東側に位置し、方形を呈する。規模は長軸2.2m、短軸1.8m、深さ約50cmである。堆積は人為的なもので、上層は黒褐色粘質土、下層はオリーブ黒色あるいは、灰色粘質土である。遺物は土師器皿が出土しており、その年代から15世紀後半～16世紀前半の遺構と考えられる

#### S X 20 (第15図)

調査区の南側に位置し、円形を呈する。規模は長軸2.4m、短軸1.8m、深さ約25cmである。断面は浅い皿状であり、埋土は单層で、黄灰色粘質土が堆積している。遺物は中世土師器皿が出土しているが、詳細な時期は不明である。

#### S X 21 (第13図・図版 7-⑤)

調査区の南側に位置し、方形を呈する。北側は S X 10に切られている。また、床面には S B 1 を構成する柱穴 P 1358が検出されている。規模は長軸2.8m、短軸2.4m、深さ約40cmである。遺構の南側、東側には、幅約40cmのテラスが付属する。埋土は上層が黒褐色粘質土で、下層は黄灰色、暗灰色粘質土である。遺物は土師器皿が出土しているが時期は不明である。

#### S X 22 (第15図・図版 7-⑥)

調査区の南側に位置し、長方形を呈する。規模は長軸3.0m、短軸1.8m、深さ約40cmである。断面は皿状である。堆積は人為的であると考えられ、上層は黄灰色粘質土、下層は褐灰色粘質土の堆積である。遺物は、出土しておらず、時期は不明である。

#### S X 25 (第15図・図版 7-⑦)

調査区の南側に位置し、方形を呈する。規模は長軸2.3m、短軸1.8m、深さ約35cmである。断面は浅い皿状である。埋土は上層が黄灰色粘質土、下層は灰色粘質土の人為的堆積である。遺物は、珠州、青白磁の小皿が出土している。

時期は13世紀後半～14世紀前半である。

#### S X27 (第15図・図版 7-⑧)

調査区の南側に位置し、方形にちかい形状を呈する。規模は長軸2.7m、短軸2.3m、深さ約30cmである。北側をS X22に切られている。断面は浅い皿状である。埋土は、上層が黄灰色粘質土、下層は灰色粘質土の自然堆積である。遺物は中世土師器皿が出土しているが、詳細な時期は不明である。

#### 豊穴状土坑のまとめ

今回検出の豊穴状土坑について、概ね3タイプに分けられ、それぞれA・B・Cとした。Aタイプは、S X5・9・10・19・21で、半地下式の倉庫的な機能をもっていたと考えられるものである。断面が方形あるいは台形の深く掘られたものが多く、テラスや階段状の施設を伴っているものもある。Bタイプは、S X13のように貼床を伴う規模の大きなもので、工房的な機能を備えていたものと考えられる。こうしたタイプは、梅原胡摩堂遺跡のほか、小矢部市臼谷岡ノ城北遺跡や富山市南中田D遺跡などでも見られるものである。Cタイプは、詳細が不明のものであり、土取り穴あるいは、それ以外の機能であったと考えられる。浅い皿状で、規模は大小様々である。以上のようにごく単純な分類を行った。AタイプやBタイプをもつ中世遺跡について、南砺市内では梅原胡摩堂遺跡でしか確認されていない。徳成II遺跡は大規模な集落ではないが、物流の拠点的な要素も備えていたと考えられる。

#### 土坑

今回の調査区では61基検出しており、調査区全体に分布している。遺物を伴うものは少ない。

#### S K5 (第16図)

調査区の南東側に位置し、不定形である。規模は長軸0.58m短軸0.41m、深さ約55cmである。埋土は、単層で黒褐色粘質土が堆積している。遺物は石臼が出土している。遺構の時期は不明である。

#### S K12 (第16図)

調査区の南東側に位置し、円形を呈する。規模は長軸1.18m短軸1.12m、深さ約90cmである。断面は、底面に向かってすぼまっていく形状である。堆積は、自然堆積である。遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。

#### S K14 (第16図)

調査区の南東側に位置し、円形を呈する。規模は長軸1.46m短軸1.42m、深さ約40cmである。断面は、台形で底面の中央がやや盛り上がる。堆積は、自然堆積である。遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。

#### S K48 (第16図・図版 9-①)

調査区の南側に位置し、不定形である。規模は長軸2.28m短軸1.88m、深さ約25cmである。南側の土坑S K49を切っている。断面は、浅い皿状である。遺構内には礫が多く、人為的に集められた感がある。検出の状況から祭祀や墓などの特定の性格を示すものは無く、出土遺物も無いことから、ここでは単に集石遺構としたい。遺構の時期は不明である。

#### S K49 (第16図)

調査区の南側に位置し、不定形である。北側をS K48に切られ、南側は、試掘トレンチによって削平を受けている。規模は残存部分で長軸1.08m短軸0.80m、深さ約16cmである。遺構内には礫が多く、人為的に集められた感がある。祭祀や墓などの特定の性格を示すものは無く、S K48と同じく、単に集石遺構としたい。遺物は珠洲が出土しているが、底部破片であるため、遺構の時期は不明である。

#### S K51 (第16図)

調査区の南側に位置し、円形を呈する。規模は長軸1.04m短軸1.00m、深さ約40cmである。断面は台形に近い形である。堆積は、自然堆積である。遺物は出土しておらず、遺構の詳細な時期は不明である。

## 井戸

今回の調査区では7基検出しており、調査区南側に集中している。全て素掘りものである。遺物から13世紀後半～14世紀代と15世紀代の2時期が確認出来る。

### S E 1 (第17図・図版8-①)

調査区の南西側に位置し、方形を呈する。規模は長軸0.96m、短軸0.90m、深さ2.75mである。素掘りで、礫層を掘り抜いて湧水を得ている。埋土は上層が黄灰粘質土で下層は、黒褐色あるいは黒色粘質土が底面まで堆積する。遺物は下層から漆器椀、箸状木製品、包丁等が出土しており、とくに木製品の出土が他の井戸より著しい。漆器椀の時期から14世紀～15世紀と考えられる。

### S E 2 (第17図・図版8-②)

調査区の南西側に位置し、円形を呈する。規模は長軸1.14m、短軸1.10m、深さ2.70mである。素掘りで、礫層を掘り抜いて湧水を得ている。埋土は上層が褐灰色あるいは黄灰色粘質土で下層は緑灰色、黒色の粘質土が底面まで堆積している。下層の埋土からは珠洲大甕1個体分が出土しており、人為的に埋められたものと考えられる。遺物には珠洲、円形板がある。円形板については、年輪年代によって1446年と示されている。遺構の時期については、15世紀中葉以降と考えられる。

### S E 3 (第17図・図版8-③、④)

調査区の南西側に位置し、円形を呈する。南側を試掘トレンチとS X 10に切られている。規模は残存している部分で、長軸1.86m、短軸1.52m、深さ2.60mである。素掘りのもので、礫層を掘り抜いて湧水を得ている。埋土は黒褐色粘質土が底面まで堆積し、その埋土中に礫が多く詰められており、井戸を埋める際に用いたものと考えられる。遺物は、折敷が出土している。折敷は、年輪年代によって1268年と示されている。遺構の時期は、年輪年代とS X 10との切りあいから13世紀後半～14世紀前半と考えられる。

### S E 4 (第18図)

調査区の南側に位置し、円形を呈する。北側をS X 9に南側をS X 4に切られている。規模は残存している部分で、長軸1.12m、短軸0.84m、深さ2.75mである。素掘りで、礫層を掘り抜いて湧水を得ている。埋土は黒色粘質土が底面まで堆積していた。遺物は下層から珠洲、曲物が出土している。曲物は、底板の年輪年代によって、1357年と示されている。遺構の時期は、珠洲と曲物の年輪年代から14世紀後半と考えられる。

### S E 5 (第18図・図版8-⑤)

調査区の南西側に位置し、円形を呈する。規模は長軸0.84m、短軸0.78m、深さ2.58mである。素掘りで、礫層を掘り抜いて湧水を得ている。埋土は上層が灰色系の粘質土、下層は、オリーブ黒色粘質土が底面まで堆積する。遺物は珠洲が出土している。遺構の時期については、珠洲から15世紀前半と考えられる。

### S E 6 (第18図・図版8-⑥)

調査区の南西側に位置し、円形を呈する。規模は長軸1.00m、短軸0.94m、深さ2.80mである。素掘りで、礫層を掘り抜いて湧水を得ている。埋土は上層が灰色系の粘質土、下層は礫のかなりまじった暗灰色粘質土が底面まで堆積する。遺物は白磁、珠洲が出土している。遺構の時期は、珠洲から14世紀後半～15世紀前半と考えられる。

### S E 7 (第18図・図版8-⑦、⑧)

調査区の南西側に位置し、円形を呈する。規模は長軸0.92m、短軸0.90m、深さ2.82mである。素掘りで、礫層を掘り抜いて湧水を得ている。埋土は上層が礫まじりの灰褐色土、下層はオリーブ黒色粘質土が底面まで堆積する。遺物は円形板が出土している。遺構の時期は円形板が年輪年代によって、1454年と示されていることから15世紀後半と

考えられる。

#### **溝集中地区（第19図）**

7条検出している。SD 9を除いて、南側に集中している。とくに、SD 5、7、8は、竪穴状土坑が集中する部分に接しており、区画溝の可能性がある。

#### **SD 5（第19図）**

調査区の南端付近で東西方向に伸びる。西側をSK 35に東側をSX 4に切られ、南側でSX 5を切っている。断面は浅い皿状で灰色粘質土の単層である。遺物は中世土師器皿、磁器、珠洲が出土している。遺構の時期は、中世土師器皿から15世紀後半～16世紀前半と考えられる。

#### **SD 7（第19図・図版9-②、③）**

調査区の南側で東西方向に伸びる。東端はやや鉤の手状に曲がっている。断面は半円形に近く、自然堆積と考えられ、上層は黄灰色粘質土、下層は灰色粘質土である。遺物は灰釉碗、珠洲が出土している。詳細な時期は不明であるが、中世後半であると考えられる。

#### **SD 8（第19図）**

調査区の南端付近で東西方向に伸びる。東端はやや鉤の手状に曲がっている。断面は半円形に近く、自然堆積と考えられ、埋土は灰色粘質土である。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

#### **その他の遺構について**

今回の調査では1000弱のピットを検出しており、一部は掘立柱建物を構成する柱穴となっている。柱根が確認されたのはP 1297のみで、その他は土層から存在を確認したものが若干あった。分布は調査区全体にわたり、遺物を含むものや掘立柱建物の柱穴となるものは南側に集中している。埋土は、全体的に黒褐色粘質土や褐灰色粘質土のものが多い。また、隣接する平成16年度調査区で確認されたピットについても黒褐色、黒色の埋土が多い。遺物は縄文土器、土師器、中世土師器皿、土錘などが出土している。時期はほとんどが中世と考えられる。

#### 4 遺物

縄文土器、土師器、中世土師器皿、珠洲、陶磁器、木製品、石製品、錢貨等が出土しており、その多くは中世のものである。

##### S B 2 (第23図-48・図版13-②)

S B 2 を構成する柱穴 P 595より、土師器の小型壺が出土している。底部は欠損しているが丸底のものと考えられる。口縁部は直立し、短く立ち上がる形状で、調整は外面全体にナデを施す。時期は古墳時代前期に属する。

##### S X 1 (第20図-1~3・図版10-①)

中世土師器皿、珠洲等が出土している。1~3は中世土師器皿である。1、2は梅原胡摩堂遺跡のNG類にあたる。平底の底部より、垂直気味に短く立ち上がる。調整は口縁部と内底面にヨコナデを施す。時期は13世紀後半~14世紀前半と考えられる。3はロクロ成形のRG類にあたる。底部と体部との境に強いナデを施し、体部を外反させ、口縁端部を摘み先細りさせるものである。時期は15世紀後半~16世紀前半と考えられる。

##### S X 2 (第20図-4~6、第29図-105~116・図版10-①、図)

中世土師器皿、珠洲、錢貨が出土している。4、5は中世土師器皿である。4はND類にあたる。体部に一段ナデを施したものである。年代は15世紀と考えられる。5はNJ類にあたる。体部に一段ナデを施し、口縁部が直線的に開くものである。年代は15世紀後半~16世紀前半と考えられる。6は珠洲の壺Tの底部である。錢貨はすべて中国からの渡来錢で、105~111が北宋錢、112、113は南宋錢、114~116は明錢である。105は天禧通宝で、初鑄年は1017年である。106は天聖元宝で、書体は篆書体である。初鑄年は1023年である。107は皇宋通宝で、初鑄年は1039年である。108は熙寧元宝で、初鑄年は1068年である。109は文字が不鮮明であるが篆書体の熙寧元宝と考えられる。中央の穴の位置がずれており、鋳型の段階からの失敗と考えられる。110は元豐通宝で、初鑄年は1078年である。111は元祐通宝で、初鑄年は1086年である。112は慶元通宝で、背面には「六」が鋳込まれている。初鑄年は1195年である。113は嘉定通宝で、背面には「十一」が鋳込まれている。初鑄年は1208年である。114~116は永樂通宝で、初鑄年は1408年である。錢貨は全てまとめて出土しており、同じ時期に使われていたことを示している。最新の錢貨である永樂通宝から15世紀以降の年代が与えられる。

##### S X 4 (第20図-7~12、第25図-75、第28図-102・図版10-①、②、図版14-②)

中世土師器皿、陶器、轆羽口、下駄、砥石が出土している。7、8は土師器皿である。7はロクロ成形のRG類にあたる。底部と体部との境に強いナデを施し、体部を外反させ、口縁端部を摘み先細りさせるものである。SX 1より出土した3に比べると口縁部分がより外反している。時期は同じく15世紀後半~16世紀前半と考えられる。8はND類にあたる。体部にヨコナデを施し、底面よりやや内湾気味に立ち上がるものである。時期は15世紀代と考えられる。9は陶器碗で長石釉がかけられている。10は唐津産陶胎染付の碗である。9、10ともに近世のものと考えられる。11は瀬戸の卸皿である。底部は糸切り痕が残り、見込みには3~5mmの間隔で格子状に卸目が付けられている。口縁部が残存していないため、時期は不明である。12は轆羽口である。75は下駄である。台と歯を一本でつくる連歯下駄であり、小判形を成すものである。102は砥石である。凝灰岩系の製品で、中砥あるいは、仕上砥として使われていたと考えられる。

##### S X 5 (第20図-13~17、第25図-76、77・図版10-①、②、図版11-①、図版14-③)

中世土師器皿、陶器、珠洲、下駄、漆器椀等が出土している。13~15は中世土師器皿で、13、14は下層、15は第2層より出土した。13、14はロクロ成形のRF類にあたる。底部と体部の境に強いナデを施し、体部を外反させ、口縁端部を摘み先細りさせるものである。時期は15世紀後半~16世紀前半と考えられる。15はNC類にあたる。器壁が厚く、丸底で、口縁部に一段ナデを施す。時期は14世紀代である。16は盤の口縁部である。灰釉が施され、水平口縁の

中央がくぼみ、端部を丸く納めている。時期は古瀬戸後期段階（15世紀前後）と考えられる。17は珠洲の擂鉢である。口縁は、幅広で端面が長三角頭である。加飾は、櫛目波状文を施す。珠洲V期～VI期（15世紀代）に比定される。76は下駄である。台と歯を一本でつくる連歯下駄であり、小判形を成すものである。77は漆器椀である。漆膜の残存はわずかで、高台も欠損しているため詳細は不明である。

**S X 9** (第20図-18、19・図版11-②)

陶器、珠洲が出土している。18は瓶子の底部である。時期は古瀬戸後期段階と考えられる。19は珠洲の擂鉢である。内面には1単位10目の御目が巡らされている。珠洲III期（13世紀後葉）に比定される。

**S X 10** (第20図-20～22、第28図-100、第29図-117・図版10-①、図版16-③)

土師器、中世土師器皿、石臼、錢貨が出土している。20は土師器である。器台の受部で皿状を呈し、内面にはハケメ調整が残る。古墳時代前期後半に比定される。21、22は中世土師器皿である。21、22ともにNG類にあたる。21は平底の底部より、垂直気味に短く立ち上がる。22は平底の底部より、やや外反気味に開く。時期は13世紀後半～14世紀前半と考えられる。100は石臼で、材質は凝灰岩である。下臼の部分であり、上面には放射状に溝が刻まれている。117は錢貨で、3枚が合わさっている状態で出土した。錢文については不明である。

**S X 13** (第21図-23、24・図版10-①、図版11-④)

23は中世土師器皿で、RF類にあたる。底部と体部の境に強いナデを施し、体部をわずかに外反させ、口縁端部を摘み先細りさせるものである。また、底部にはロクロ削りが顕著に残る。時期は15世紀後半と考えられる。24は珠洲の擂鉢である。口縁は、幅広で端面が丸みをもった長三角頭である。加飾は、櫛目波状文を施す。珠洲V期～VI期（15世紀代）に比定される。

**S X 19** (第21図-25・図版10-②)

25は中世土師器皿で、NJ類にあたる。体部に一段ナデを施し、体部を外反させ、口縁部が直線的に開くものである。年代は15世紀後半～16世紀前半と考えられる。

**S X 25** (第21図-26・図版10-②)

26は青白磁の小皿である。見込み部分には花文を刻み、外面には連弁を線彫りで刻んでいる。13世紀後半～14世紀前半と考えられる。

**S K 2** (第21図-27・図版10-②)

27は中世土師器皿でNJ類にあたる。体部に一段ナデを施し、口縁部がやや外反して開く。年代は15世紀後半～16世紀前半と考えられる。

**S K 5** (第28図-101・図版16-②)

101は石臼で、材質は凝灰岩である。100と同じ下臼の部分であり、上面には放射状に溝が刻まれている。S X 10から出土した100と同じく医王山等で採取される角礫を含む凝灰岩ではないため、山田川以東の山側で採取されたものと考えられる。

**S K 7** (第21図-28・図版10-②)

28は中世土師器皿でNJ類にあたる。体部に一段ナデを施し、口縁部がやや外反して開くものである。年代は15世紀後半～16世紀前半と考えられる。

**S K 10** (第28図-103・図版10-②)

103は砥石で安山岩系の製品である。中砥あるいは、仕上砥として使われていたと考えられる。

**S K 35** (第21図-29～31・図版11-④)

珠洲が出土している。29は甕である。口縁端部が方頭で、短いくの字口縁となる。肩はあまり張らず緩やかで、外

面には叩目を施す。珠洲IV～V期（14世紀後半～15世紀前半）と考えられる。30は甕の底部、31は甕ないし、壺T類の底部である。外面には叩目が施されている。

**S K 49** (第21図-32・図版11-④)

珠洲が出土している。32は甕ないし、壺T類の底部と考えられる。外面には叩目が施されている。底部のみのため、時期は判然としない。

**S E 1** (第25図-78～90、第26図-91～94、第29図-118・図版15-④、⑤)

漆器椀、箸状木製品をはじめとする木製品、竹、刀子が出土している。78は漆器椀である。梅原胡摩堂遺跡の分類のC類あるいはD類にあたり、坏または、皿状の形態をなす。四柳嘉章氏の編年（四柳 1997）中世Ⅷ期～Ⅸ期（14世紀～15世紀）と考えられる。79は本地椀である。底部付近にはロクロ引きの痕跡が見られる。80～87は箸状木製品である。欠損しているものを除き、先端を両側とも細く削り出す両口箸の型式である。断面は方形あるいは扁平な六角形状である。88は上部が欠損した先端のみを削った木片である。杭材の可能性がうかがえる。89は板状木製品の一部である。一長辺の一部を抉る加工が施されている。90は棒状木製品で先端を杭のように削り尖らせたものである。91は竹で、先端に削りが見られる。92～94は板状木製品である。欠損等が見られるが元来は同じような大きさであったと考えられる。若干、反りが見られ、93のようにヨコ方向の擦痕も見られることから、桶の部材であった可能性もうかがえる。118は刀子である。峰側に茎が付くもので、刃部の先端は欠損している。鍛造で身は薄く粗製品である。

**S E 2** (第22図-33～35、第26図-95・図版12-①、②、図版15-②)

珠洲、円形板が出土している。33は珠洲の甕である。口縁部が方頭であり、くの字状の短い頸部を呈するものである。肩は張らず、体部外面には叩目が密に為されている。珠洲IV～V期にあたる。34も甕である。口縁端部は方頭であり、くの字の短い頸部をもつ。体部はあまり肩が張らず、上半は直線的で、下半は底部に向かって緩やかにすぼまる形状をもつ。外面には叩目、内面の当て具痕はナデ消されている。珠洲IV～V期にあたる。35は壺である。口縁端部は、やや丸みを持ったもので、頸部は緩やかに外反して伸びる。肩部はなで肩タイプである。珠洲IV～V期にあたる。95は円形板であり、材はヒノキである。側面は磨耗のため、木釘等の結合を意識した痕跡は見らない。面にはナナメ上下方向の加工痕が見られる。年輪年代では1446年を示している。

**S E 3** (第27図-96、97・図版15-①、図版16-①)

部材、折敷等の木製品が出土している。96は部材と考えられる加工木である。側面は上下方向にケズリを入れ、器面を整えている。正面はナナメ方向の加工痕が見られる。教机等の脚となる部材と考えられる。97は折敷である。材はヒノキの白木材を用い、一枚板で隅をあまりカットしない平折敷と呼ばれるものである。目釘痕などから、元々は棟を伴っていたと考えられる。裏面にはタテ方向の加工痕が残り、「十一」の銘が刻まれている。年輪年代では1268年を示している。

**S E 4** (第22図-36、第27図-98・図版12-②)

珠洲、曲物が出土している。36は珠洲の擂鉢である。口縁端部は三角頭で、やや内傾気味で内面には1単位6目あるいは12目の卸目が付される。時期は珠洲IV期に比定出来る。98は曲物である。底板、側板とともに、約半分が欠損している。底板は約半分が欠損しているが、楕円形を呈していたと推測される。上面には上下方向に削られた加工痕が残る。側面も欠損のため詳細は判然としないが、基本的には一重巻であり、上タガと下タガによって結合されていたと推定出来る。底板は年輪年代によって1357年を示している。

**S E 5** (第22図-37、38・図版12-②)

珠洲が出土している。37は甕である。口縁部が方頭であり、くの字状の短い頸部を呈する。時期は珠洲IV～V期にあたる。38は甕ないし、壺T類の底部である。時期は不明である。

#### S E 6 (第22図-39~42・図版12-②)

磁器、珠洲が出土している。39は白磁の小碗である。底部は無釉であり、口縁部は外反して少し開く。森田分類のD群（森田 1982）に位置づけられ、15世紀代に比定される。40、41は珠洲の甕ないし、壺T類の底部である。時期は不明である。42は擂鉢で、いわゆる片口鉢と呼ばれるものである。口縁端部が鋭い長三角頭を呈し、内側の端面には櫛目波状文を巡らせていている。体部内面には、1単位6~7目の卸目を密に刻んでいる。見込みは使用のため磨耗が著しい。珠洲V期に比定される。

#### S E 7 (第27図-99・図版15-③)

円形板等が出土している。99は円形板で曲物等の底板に使われていたと考えられるが、目釘等の痕跡が見られないため、詳細は不明である。年輪年代では15世紀後半が示されている。

#### S D 5 (第23図-43、44、45・図版13-①)

中世土師器皿、磁器、珠洲が出土している。43はロクロ成形のRG類にあたる。底部と体部の境に強いナデを施し、口縁端部を摘み先細りさせるものである。時期は15世紀後半~16世紀前半と考えられる。44は白磁碗の口縁部である。45は珠洲の擂鉢である。口縁端部が三角頭で先端がやや丸みを帯びるものである。珠洲V期に比定される。

#### S D 7 (第23図-46、47・図版13-①)

46は灰釉碗で底部のみが残存する。高台は貼り付け高台で無釉である。時期は中世後半と考えられる。47は珠洲の甕底部である。設置面付近まで、叩目を施している。時期は不明である。

#### 穴(ピット)出土遺物 (第23図-49~56・図版13-②)

穴からは、縄文土器、土師器、土錐、柱根などが出土している。49~53は中世土師器皿である。49はP18より出土したもので、ロクロ成形のRE類にあたる。体部が丸みを帯びて短く立ち上がり、見込み部分がやや盛り上がるものである。時期は13世紀後半~14世紀前半と考えられる。50はP1122から出土したものでロクロ成形のRG類にあたる。底部と体部との境に強いナデを施し、口縁端部を摘み先細りさせるものである。時期は15世紀後半~16世紀前半である。また、口縁部には、煤の付着が見られ、灯明皿として使用されたと考えられる。51はP1124から出土したもので、NG類にあたる。底部より、垂直気味に短く立ち上がり、底部付近の器壁が厚くなっている。時期は13世紀後半から14世紀前半と考えられる。52はP95より出土したもので、NG類にあたる。底部より、垂直気味に立ち上がるものである。時期は13世紀後半~14世紀前半と考えられる。53はP132より出土したもので、NJ類にあたる。体部に一段ナデを施し、口縁部が、やや外反して開くものである。年代は15世紀後半から16世紀前半と考えられる。54はP203から出土した縄文土器で、縄文を一段付した後、1条の沈線を施す。後期の深鉢の破片と考えられる。55はP265から出土した土錐で、貫通孔があけられた管状土錐である。刺網に用いられたものと考えられる。56はP1297から出土した柱根である。上部は欠損が著しい。下部にはホゾ穴が穿たれており、横木を入れて基礎にしたと考えられる。

#### 遺構外の遺物 (第24図-57~74、第28図-104・図版14-①)

57~61は中世土師器皿である。57はロクロ成形のRG類にあたる。底部と体部の境に強いナデを施し、口縁端部を摘み先細りさせるものである。時期は15世紀後半~16世紀前半である。また、P1122出土の50と同じく、口縁部には煤の付着が見られ、灯明皿として使用されたと考えられる。58もロクロ成形のRG類である。底部と体部の境に強いナデを施し、口縁端部を摘み先細りさせるものである。57に比べるとやや法量が大きいものである。時期は15世紀後半~16世紀前半である。59~61はNJ類にあたる。口縁端部に若干の違いが見られるが、体部に一段ナデを施し、口縁部が、やや外反して開くものである。年代は15世紀後半~16世紀前半と考えられる。62は瀬戸の卸皿である。底部は糸引き痕が残り、見込みには3~5mmの間隔で格子状に卸目が付けられている。口縁部が残存していないため、時期は不明である。63は陶器碗である。畳付部分の釉薬が焼成によって飛散しているが全面施釉のものである。外面に

は緑色の釉薬、内面は透明釉を施す。時期は近世と考えられる。64は釉薬が剥離しているため判断し難いが磁器碗である。高台は削り出しで成形し、見込みが厚いものである。時期は不明である。65～67は青磁碗である。65、66は口縁端部が外反し、端部はやや丸みを帯びる。時期は13世紀後半～14世紀前半と考えられる。67は雷文帯の一部と考えられる文様が見られるため、14世紀後半～15世紀前半と考えられる。68～71は珠洲の甕である。68は小型の甕で、口縁端部は円頭で短く屈曲するものである。69は口縁端部が円頭で、頸部が屈曲せずに立ち上がるるものである。70は、口縁部が方頭であり、くの字状の短い頸部を呈するものである。70は口縁端部は円頭であり、肩があまり張らないものである。71～74は珠洲の擂鉢である。71は底部のみが残存し、12条1単位の御目が付される。72は片口の部分のみが残存する。73は口縁端部が三角頭で先端がやや丸みを帯びるものである。74は口縁端部が三角頭でやや内傾気味のものである。時期は68、74が珠洲IV期、70、73がIV～V期、69がV～VI期で、71、72は時期不明である。104は砥石で、凝灰岩系の製品である。薄い板状のもので、中砥あるいは、仕上砥として使われていたと考えられる。

世紀	実年代	珠洲 (吉岡編年)	中世土師器Ⅲ (梅原胡摩堂分類)							徳成Ⅱ遺跡 (8地区) 遺構
			R E類	R F類	R G類	N C類	N D類	N G類	N J類	
12世紀	1100									
	1150	I	1							
			2							
13世紀	1200	II	1							13世紀後半～14世紀前半 S X 10・S X 25・S E 3
	1250	III								
			2							
14世紀	1300	IV	1							14世紀後半～15世紀前半 S E 1・S E 2・S E 4 S E 5・S E 6
	1350		2							
			3							
15世紀	1400	V								15世紀後半～16世紀前半 S X 1・S X 2・S X 5 S X 13・S E 7
	1450	VI								
		VII								
16世紀	1500									16世紀後半以降 S X 4
	1550									

表1 徳成Ⅱ遺跡 (8地区) 遺構年代

## V まとめ

今回の調査では、掘立柱建物6棟、竪穴状土坑15基、土坑61基、井戸7基、溝10条、ピット977基と1000を超える遺構を検出し、遺物はコンテナ55箱に達した。遺構、遺物ともに、その主たる時期は中世であり、13世紀後半～14世紀前半と、15世紀後半～16世紀前半の2時期に集中している。

今回の調査では、中世集落の一端を明らかにすることが出来た。徳成Ⅱ遺跡は、中世に円宗寺領として成立した石黒庄のうち、仁和寺菩提院に分割伝領された山田郷の範囲に位置している。山田郷内の遺跡としては、宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡、梅原胡摩堂遺跡、梅原安丸遺跡なども所在している。山田郷の成立時期は、石黒庄が立莊される承暦2年（1078）から仁和寺文書での初見である正治2（1200）～建仁3年（1203）の間と推測される。徳成Ⅱ遺跡の調査では、12世紀後半～13世紀前半の土器が出土しており、山田郷の成立時期からそれほど離れていない時期に集落が営まれたものと考えられる。

徳成Ⅱ遺跡の中世集落について隣接する平成16年度調査の7地区の成果もふまえて考察すると、4時期に分けることができる。

1期は、13世紀後半以前の時期である。今回の調査では当該時期の遺構を確認出来なかつたが7地区では、若干見られる。7地区、8地区あわせて10棟検出された掘立柱建物などがこの時期に営まれたものと考えられる。

2期は、13世紀後半～14世紀前半の時期である。7地区は明確なものはないが、8地区の遺構では、S X 10・S X 25・S E 3などが挙げられる。倉庫的な機能をもつ竪穴状土坑が登場しており、小規模ながらも年貢収納の施設などを有する集落であったと考えられる。

3期は、14世紀後半～15世紀前半の時期である。8地区の井戸などが該当する。遺構、遺物とともに明確なものが少ない時期である。また、周辺の遺跡でもこの時期のものは少ないようである。この14世紀後半は、いわゆる南北朝の時期であり、石黒庄を構成する十郷も各郷で南朝側、北朝側に別れて争っており、こうした混乱の影響で集落の維持がなされていなかったものと考えられる。

4期は、15世紀後半～16世紀前半の時期である。7地区では、この時期の遺物は見られるが、明確な遺構はない。8地区では、S X 1・2・5・13といった竪穴状土坑や井戸を検出しており、区画溝と考えられる溝も概ね、この時期にあたると考えられる。倉庫や作業場的な機能をもつ竪穴状土坑は、郷内の拠点の一つとして機能を備えていたと考えられる。徳成Ⅱ遺跡は、山田川に近接し、対岸には井口城、北には梅原胡摩堂遺跡があり、また、文献史料で見られる井口や山田の三斎市にも近く、この4期が徳成Ⅱ遺跡の中世集落の栄えた時期であったと考えられる。

16世紀後半以降は、城端善徳寺や梅原胡摩堂遺跡の寺内町化が進む時期であり、集落は、一般集落に変容していくと考えられる。

今回の調査では、断片的であるが徳成Ⅱ遺跡の中世集落の変遷を見ることが出来た。今後の周辺あるいは、南砺市の大半に広がっていた中世石黒庄の状況が今後の調査の進展により解明され、この遺跡の位置づけがより明確なものとなることを期待したい。

## 参考文献

- 福光町史編纂委員会 1971 『福光町史』上巻
- 福井県教育委員会 1979 『特別史跡一乗谷 朝倉氏遺跡発掘調査報告 I』
- 森田勉 1982 「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』2
- 井口村教育委員会 1990 『井口城跡発掘調査概要』
- 富山県埋蔵文化財センター 1991 『富山県富山市南中田D遺跡発掘調査報告書』
- 福光町教育委員会 1991 『富山県福光町 梅原安丸遺跡群 I』
- 福光町・医王山文化調査委員会 1993 『医王山文化調査報告書 医王は語る』
- 北陸中世土器研究会 1993 『中世北陸の家・屋敷・暮らししぶり』
- 高瀬重雄監修 1994 『富山県の地名』(日本歴史地名体系16) 平凡社
- 財団法人 富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 1994 『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告 (遺構編)』
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 中世土器研究会 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 福光町教育委員会 1995 『梅原落戸遺跡群 II』
- 井口村史編纂委員会 1995 『井口村史』上・下
- 北陸中世土器研究会 1995 『中世北陸の木製容器』
- 財団法人 富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 1996 『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告 (遺物編)』
- 財団法人 富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 1996 『梅原加賀坊遺跡・久戸遺跡・梅原安丸遺跡・田尻遺跡発掘調査報告 (遺構編)』
- 北陸中世土器研究会 1996 『飾る・遊ぶ・祈るの木製用具』
- 福光町教育委員会 1996 『富山県福光町 梅原胡摩堂遺跡群 III』
- 福光町教育委員会 1996 『富山県福光町 梅原落戸遺跡群 III』
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1996 『草戸千軒遺跡発掘調査報告 V』
- 福光町教育委員会 1997 『富山県福光町 梅原加賀坊遺跡 I 梅原胡摩堂遺跡群 I 梅原落戸遺跡群 IV 梅原安丸遺跡群 III』
- 北陸中世土器研究会 1997 『中・近世の北陸』桂書房
- 四柳嘉章 1997 「北陸中~近世の漆器の編年」『北陸の漆器考古学 (第1分冊)』北陸中世土器研究会
- 北陸中世考古学研究会 1998 『北陸中世の金属器』
- 福光町教育委員会 1999 『梅原胡摩堂遺跡 III 梅原出村遺跡群 III』
- 東北中世考古学会 2001 『掘立と竪穴』
- 北陸中世考古学研究会 2001 『中世北陸の井戸』
- 福光町教育委員会 2001 『富山県福光町徳成 II 遺跡 I』
- 福光町教育委員会 2001 『富山県福光町梅原胡摩堂遺跡 II』
- 福光町教育委員会 2002 『富山県福光町徳成 I 徳成 II 遺跡 II』
- 福光町教育委員会 2003 『県営ほ場整備事業 (担い手育成型) に係る埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告書 -北山田南部地区-』
- 福光町教育委員会 2003 『富山県福光町徳成 II 遺跡 III』
- 森隆 2003 「富山県の中世土器 (資料編)」『富山考古学研究』6
- 北陸中世考古学研究会 2004 『掘立柱建物から礎石建物へ』
- 南砺市教育委員会 2005 『富山県南砺市徳成 II 遺跡』

# V 自然科学分析

## 徳成Ⅱ遺跡出土の銭貨についての分析

竹内勝信・藤田慎一（株式会社中部日本鉱業研究所）

### はじめに

銭貨の分析は、古銭収集家や考古学者によって、古くから法量計測や肉眼観察、拓本などを中心に実施してきた。一方、近年では、蛍光X線分析や鉛同位体比分析などの最新の理化学的な分析から、鋳造場所を推定する研究なども行われている。

今回の分析は、堅穴状土坑S X 2より出土した銭貨12枚を対象に、従来の法量計測、肉眼観察、拓本、写真撮影に加え、非破壊分析として走査型電子顕微鏡とX線マイクロアナライザーによる元素分析を実施した。この方法は、斎藤らによる皇朝十二銭の分析（日本銀行金融研究所 1997）にも使用された方法で、非破壊分析として有効であることが報告されている。しかし、今回の分析は、試験的に実施したものであり、十分な精度が得られなかつた点はご容赦願いたい。

### 成分分析

銭貨の成分分析は、金沢大学の五十嵐心一助教授および渡辺暁央氏の協力を得て、SEM：走査型電子顕微鏡（日立S2250-N）とEDS：エネルギー分散型X線分析装置（堀場EMA X-5770W）による表面の点分析とした。凹凸が少なく比較的綺麗な裏側を分析対象として金蒸着を行った後、電子顕微鏡にセットして表面の観察を行い、代表的な3点に対して電子線を照射して微小部分の点分析を行った。分析条件は、測定時間60秒、加速電圧20kVである。

EDSによる点分析結果は、表1に示す通りであり、銭貨の表面にはAl（アルミニウム）、Si（ケイ素）、Fe（鉄）、Cu（銅）、Sn（錫）、Pb（鉛）が存在することが判る。一般に銅銭は、Cu、Sn、Pbを主要成分として、FeやAs（砒素）、アンチモンなどが含まれているが、AlやSiはほとんど含まれていない。AlやSiおよびFeは土の主要成分であることから、銭貨の表面に付着した土鉛の成分を検出したものと考えられる。この結果は、微小部分を対象とした点分析では、分析部分の汚れや鉛を事前に十分取り除く必要があることを示している。

また、同じ銭貨であっても、表1に示す3点の分析値には大きなばらつきがあり、特にSnやPbのばらつきが大きいことが判る。SnやPbは、Cuと比較して融点が低いため、冷え固まる過程で偏って析出する現象＝偏析が生じることが知られている。各点の分析値が一定しないのは、分析した部分に偏析したSnやPb粒子が存在するためと考えられる。この結果は、銭貨の点分析を行う場合は、3点では不十分であり、5～10点程度に増やしてデータを統計的に処理する必要があることを示している。

12枚の銭貨の主要成分は、表1より、平均値でCu=11.7～89.73%、Sn=0.27～33.77%、Pb=5.46～62.27%の範囲にある。約10倍の129枚もの分析を行った志海苔古銭でも、Cu=49.4～100%、Sn=1.6～15.3%、Pb=5.9～46.7%の範囲にあることから、上記の2つの問題が影響して、今回の分析結果が非常にばらついていると考えられる。これらの問題を承知した上で、表2および図1に示す佐々木の分類（佐々木2002）に従って、各銭貨を分類してみる。

第1グループは、Sn=5～10%、Pb=10～30%程度と主要元素が適切な割合で配合されているもので、No.9の銭貨が属する。佐々木の分類Iに相当し、公鑄銭と考えられる。志海苔古銭の良質貨幣は、Pb=20～28%、Sn=6.5～10.5%程度の範囲内と報告されており、この範囲ともほぼ一致していることが判る。第2グループは、Sn<5%、Pb=10～30%程度とPbは適切でもSnが少ないもので、No.3が属する。佐々木の分類I'またはIIに相当し、私鑄銭または模鑄銭と考えられる。第3グループは、Sn<5%、Pb<10%程度とSnもPbも少ないもので、No.11,12が属する。佐々木の分類ICuまたはIIIに相当し、私鑄銭または模鑄銭と考えられる。第4グループは、Sn<

5%、Pb >30%程度とSnが少なくPbが多いもので、No 4, 5, 7, 8が属する。佐々木の分類IPbまたはIIに相当し、私鑄銭または模鑄銭と考えられる。第5グループは、Sn >20%、Pb >30%程度とSnもPbも多いもので、No 6, 10が属する。第6グループは、Sn >20%、Pb <10%程度とSnが多くPbが少ないので、No 1, 2の錢貨が属する。第5および第6グループは、佐々木の分類には存在せず、一般の2倍以上のSnが偏析の影響によるものか否か注目され、さらに詳細な分析および検討が必要である。その他の特長として、No 8は、Pb = 62.27%と鉛が非常に多く、銅銭ではなく鉛銭と言っても良いほどである。また、No 5は、Fe = 9.31%と鉄分が多く、鏢銭的な外観と関連性があると思われる。

以上の結果より、EDSを用いた錢貨の非破壊分析は、ばらつきは大きいが、破壊分析による佐々木の分類と比較的良く一致している。今後、分析箇所のクリーニングや分析点数を増やすことではばらつきが解消できれば、錢貨の成分分析および分類に非常に有効な方法になると思われる。 (竹内勝信)

### 総括

今回の分析については、先行する研究に対する予備調査や、分析に関する認識不足もあり、充分なデータを得ることが出来なかった。今後の分析に対する課題としたい。また、佐々木氏が分類する模鑄・私鑄・公鑄の概念についても詳細に考えていく必要がある。

肉眼観察や法量計測からは、法量のバラつきや星形孔といわれる加工が判明した程度であり、古銭収集家や錢幣学のなかで称される加治木銭、叶手元祐、島銭に分類されるものは無かった。法量のバラつきは、とくに重量で見られ、最も重いもので3.765g、最も軽いもので2.237g、12枚の平均は3.155gである。このばらつきについては、埋納銭等のデータからも見られるものであり、鋳造過程や流通期間によって左右されるものと考えられる。星形孔については、No 5の銭に見られるもので、穿（中央の穴）と郭（中央の穴の周りの盛り上がった部分）が45°ずれ、星形に見えるものである。東京都葛飾区の上千葉出土銭では、14071点中669点が星形孔と確認され、（葛飾区郷土と天文の博物館2002）星形孔は一定量存在していたことがわかる。

今回出土した錢貨については、分析や研究に対する認識不足のため充分なデータを得ることが出来なかつたが、分析から模鑄銭と推測される銭が存在していたことが分かった。ただ、肉眼観察による明らかな模鑄、私鑄では無いため、今後のデータの蓄積や、研究に対する認識を高めて研究を進めていきたい。 (藤田慎一)

## 参考文献

- 市立函館博物館 1973 『函館志海苔古銭 北海道中世備蓄古銭の報告書』
- 日本銀行金融研究所編 1997 「日本の貨幣・金融史を考える 古代の貨幣および中世から近世への移行に伴う貨幣の変容を中心としての模様」(金融研究会報告要旨)  
『金融研究』16-1
- 国立歴史民俗博物館編 1997 『お金の玉手箱 錢貨の列島2000年史』
- 齋藤努・高橋照彦・西川裕一 1998 「中世～近世初期の模鋳銭に関する理化学的研究」『金融研究』17-3
- 葛飾区郷土と天文の博物館 2000 『埋められた渡来銭 中世の出土銭をさぐる』
- 齋藤努・高橋照彦・西川裕一 2000 「近世銭貨に関する理化学的研究－寛永通宝と長崎貿易銭の鉛同位体比分析－」  
『IMES DISCUSSION PAPER』 No2000-J-1 (日本銀行金融研究所)
- 西本右子・佐々木稔 「公鋳銭・模鋳銭の科学分析」『ぶんせき』2002-10
- 永井久美男 2002 『中世出土銭の分類図版』(高志書院)
- 西本右子・佐々木稔 「国内模鋳銭・無文銭の組成からみた中世後期の金属原材料の生産」  
『平成15年度企画発表資料』(社)資源・素材学会 日本鉱業史研究会
- 西本右子・佐々木稔 2004 「無文銭の科学分析」『出土銭貨研究会 第11回大会資料』

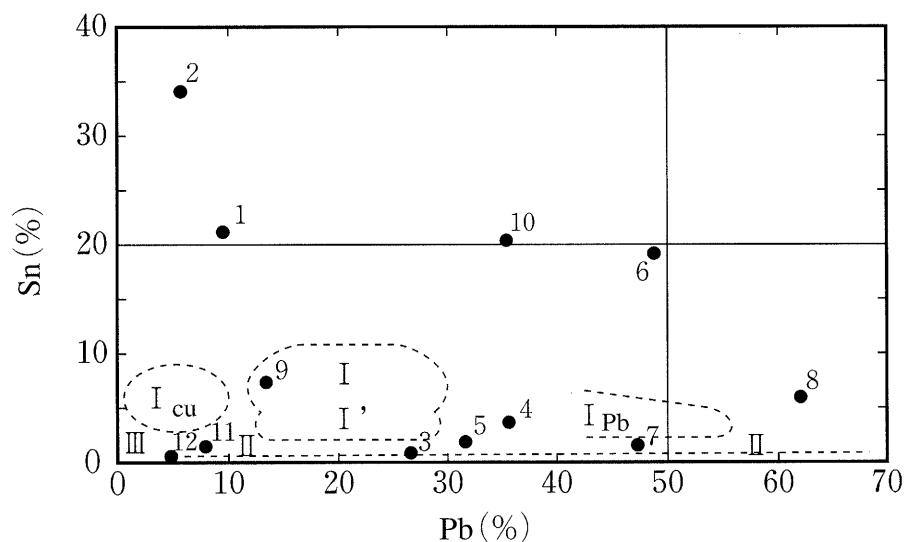


図1 分析結果と佐々木の分類との関係

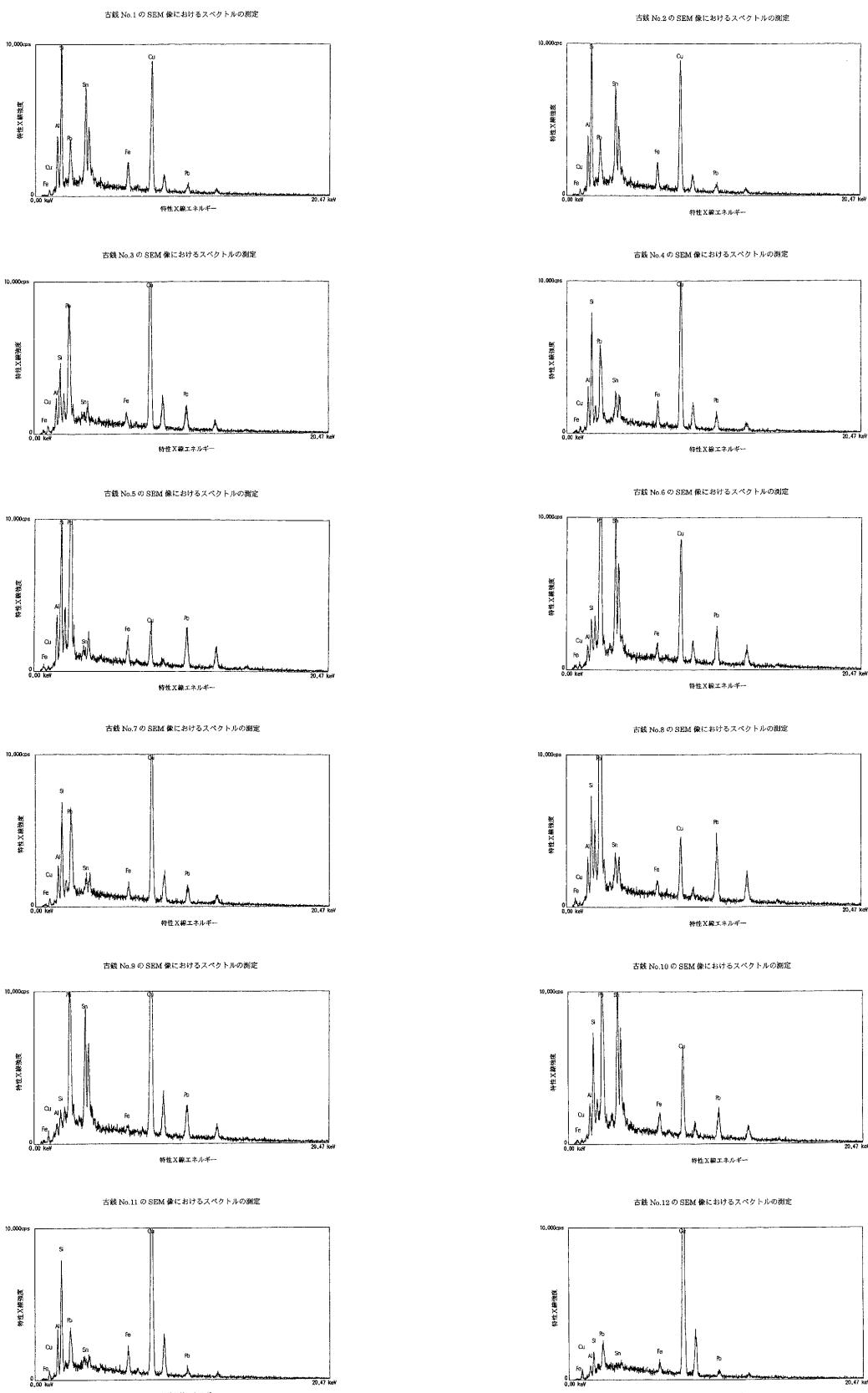


図2 古銭のスペクトル測定



## 出土木製品の年輪年代

光谷拓実（独立行政法人 奈良文化財研究所）

### はじめに

中部日本鉱業研究所が発掘調査した南砺市徳成Ⅱ遺跡からは、井戸内埋土からヒノキの折敷や曲物類が出土した。これらは、その形状が柾目板で、しかも年輪が密に刻まれているもの（おおよそ100層以上の年輪が必要である）であれば、年輪年代法による年代測定が可能である。もし、この年代法によって木製品の年輪年代が確定すれば、遺跡、遺構、遺物の年代を考えるうえで貴重な年代情報を提供することになる。

このたびの調査にあたっては、南砺市教育委員会および中部日本鉱業研究所の承諾を得て、折敷1点、曲物底板3点について、年輪年代法による年代調査を実施した。以下にその概略を報告する。

### 選定した木製品と方法

年輪年代測定用に選定した木製品は、ヒノキ材の折敷1点、曲物底板3点の総数4点である。いずれも保存状態は良く、年輪密度の高い良質のヒノキ材が使われていた。折敷以外の曲物底板3点には、心材に続く辺材が明瞭に残存していたので、これらの年輪年代が確定すれば原木の伐採年代に近い年代を示すことになる。

現地で選定した4点の木製品は、当研究室にて専用の年輪読取器（実体顕微鏡付き、0.01mmまで計測）を使い、年輪幅を計測することとした。コンピュータによる年輪パターンの照合は相関分析手法1）によった。年代を割り出す際に基準となるヒノキの暦年標準パターンは、木曽系ヒノキで作成した約2000年間（37B.C.～1984A.D.）のものを使用することとした。木製品の年輪データと暦年標準パターンを構成する年輪データとの照合においては、相関係数 $r$ を求めた後、 $t$ 検定による検定をおこない、年輪パターン照合が成立したと認めてもよい $t$ 値の基準値（一応の目安として $t \geq 5.0$ ）を検出し、ついで、検出した年代位置でもって相方の年輪パターングラフを重ね合わせ、目視で詳細に検討したのちに、年輪年代の確定をおこなうこととした。

### 結果

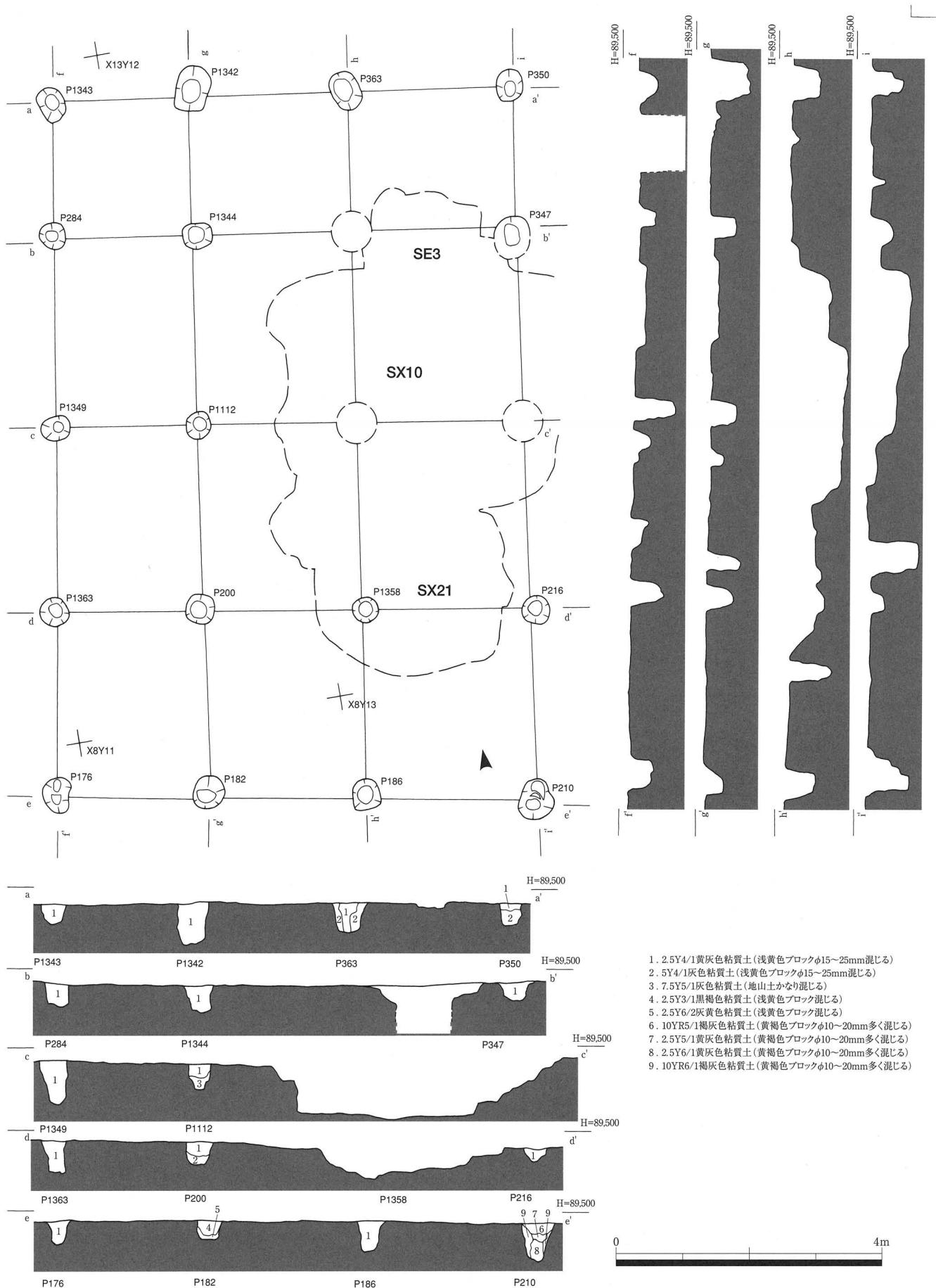
計測年輪数や年輪年代の結果は表1に示したとおりである。これをみると、年輪数はいずれも300層以上もあり、年輪密度の高い良材が使われていたことがわかる。コンピュータによる木製品4点の年輪パターンと暦年標準パターンとの照合は、いずれも高い $t$ 値で成立し、それぞれの年輪年代を求めることができた。折敷の年輪年代1268年は辺材部が完全に削除されているものと判断されるので、原木の伐採年よりかなり古い年代とみてよかろう。一方、3点の曲物底板については、辺材部の残存幅からみて、外皮に近いところまで残っているとみてよかろう。ちなみに、樹齢200～300年以上の木曽系ヒノキの平均辺材幅は約3cmである。このことを考えると、曲物底板3点の年輪年代は伐採年に近い年代を示しているといえよう。

あとは、これらの木製品がどういう経緯をたどって井戸内に投棄されたのかが重要であるが、その詳細は不明である。一般に、出土木製品は「原木伐採→運搬→乾燥→製品加工→使用期間→廃棄」といった道をたどる。こうしたことを考えると、今回得られた年輪年代を発掘現場にどういかしていくのかは、さらに多くの課題があるものの、遺構、遺物の上限年代を明らかにできた点は大きな調査成果といえる。

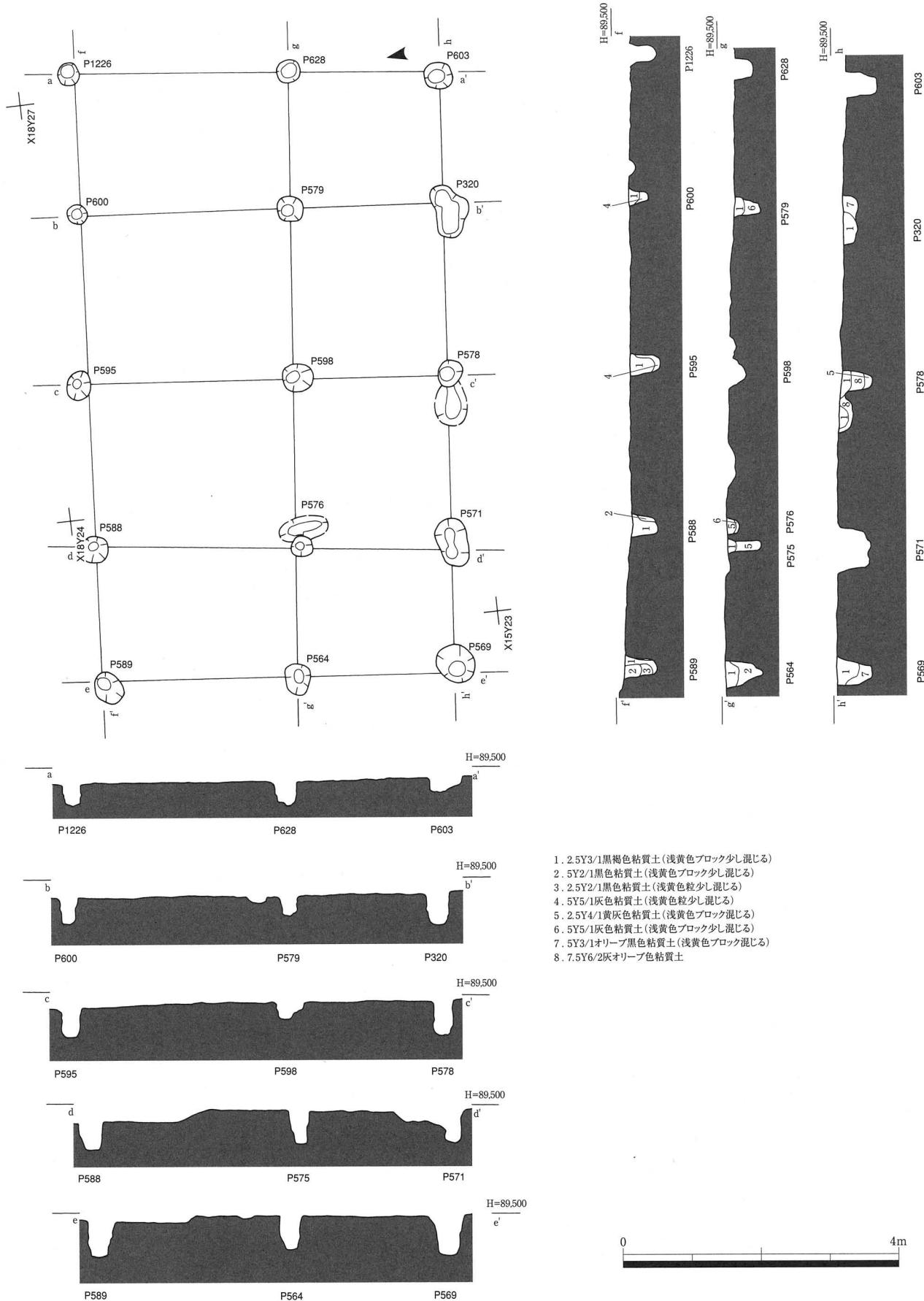
No.	木製品名	遺構名	樹種	年輪数(層)	年輪年代(年)	t値	辺材
1	折敷	SE3	ヒノキ	578	1268	7.7	—
2	曲物底板	SE2	ヒノキ	486	1446	10.3	1.5cm
3	〃	SE4	ヒノキ	323	1357	6.4	3.0cm
4	〃	SE7	ヒノキ	337	1454	6.0	3.0cm

表1 折敷・曲物底板の年輪年代測定結果一覧表

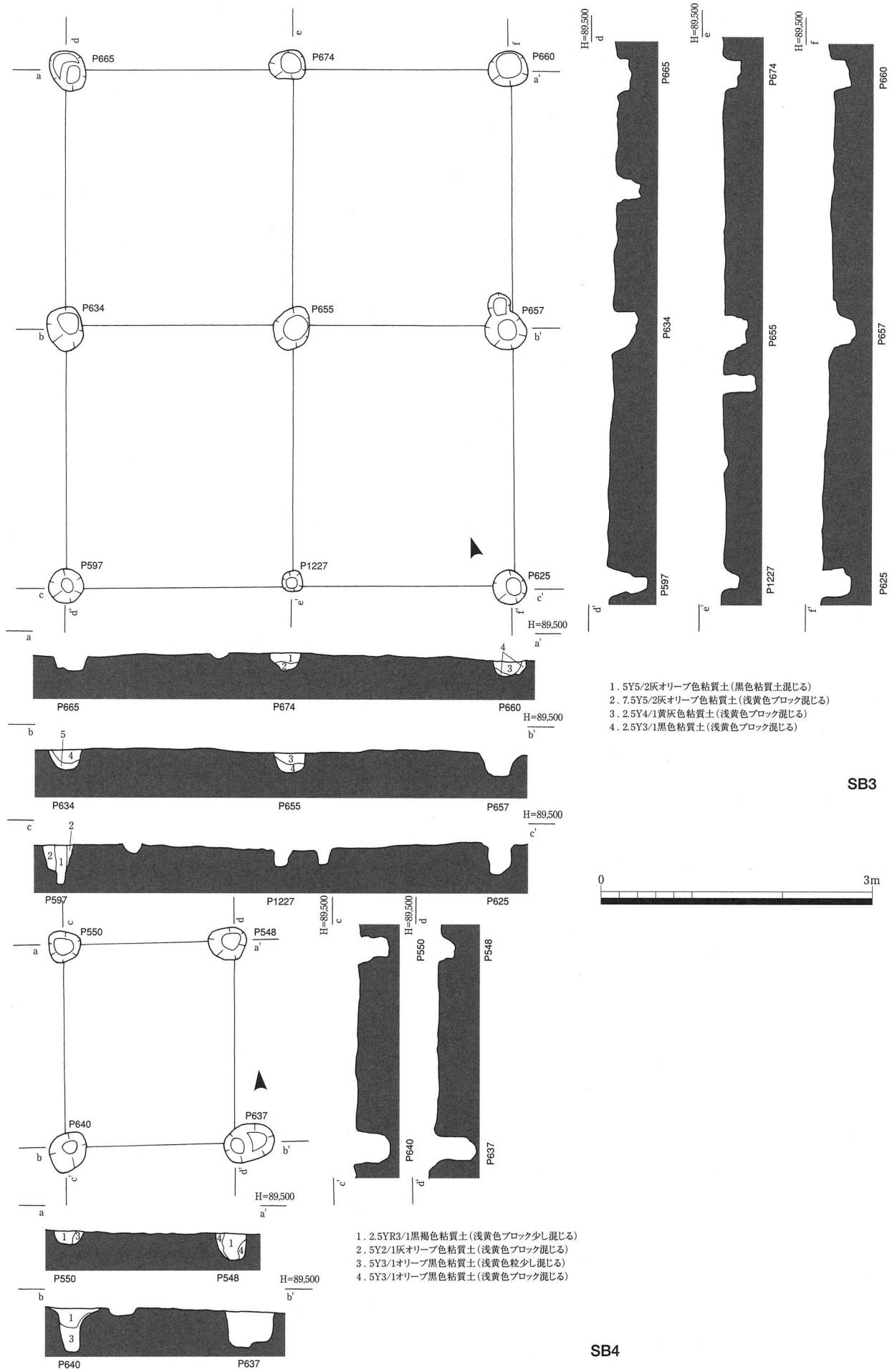




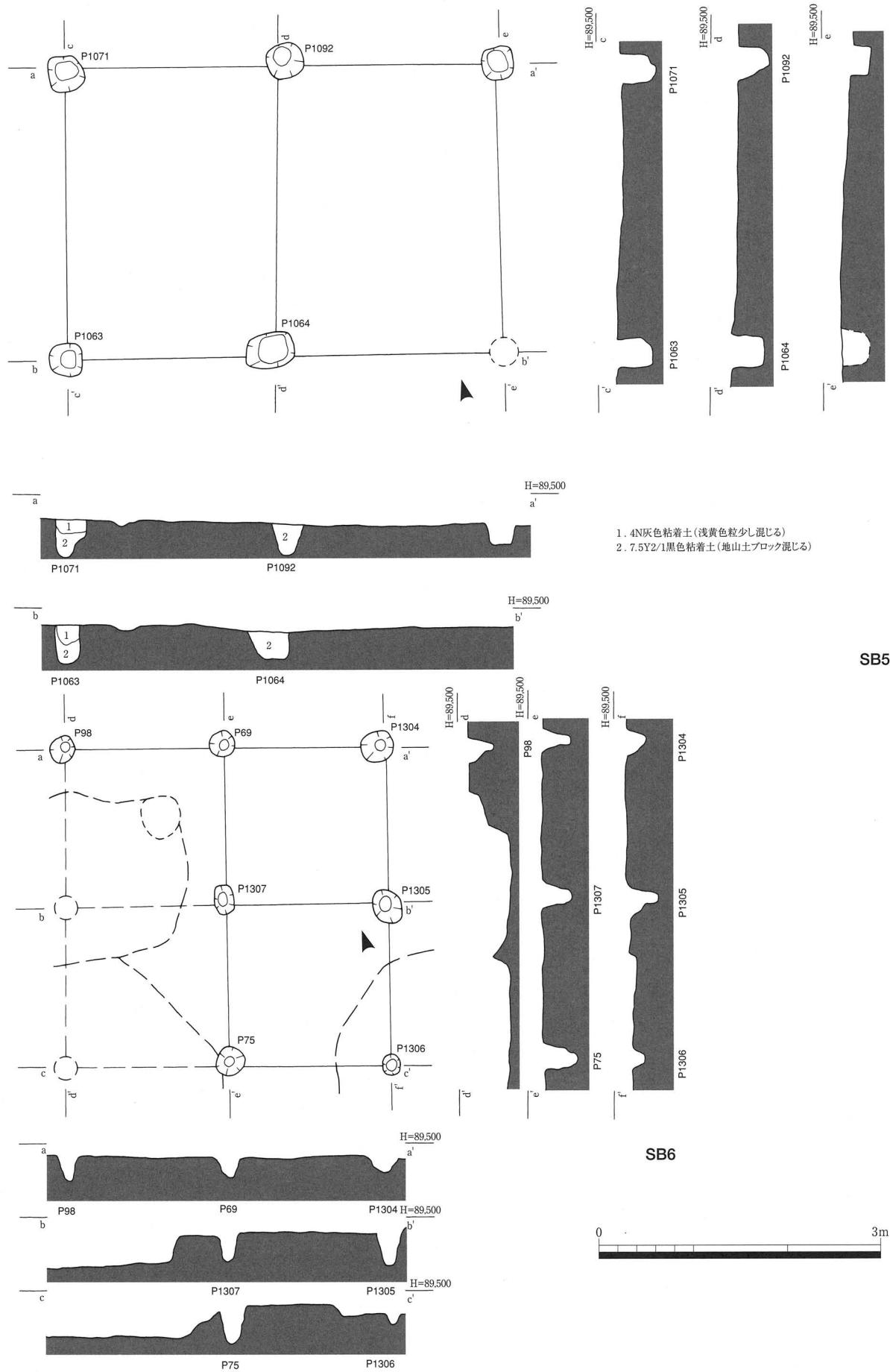
第5図 SB 1 平面図・断面図 (1/80)



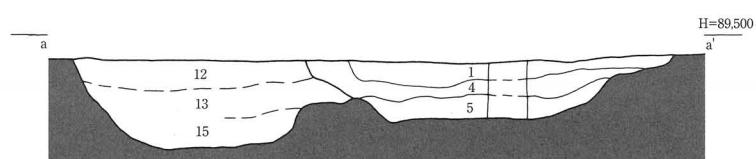
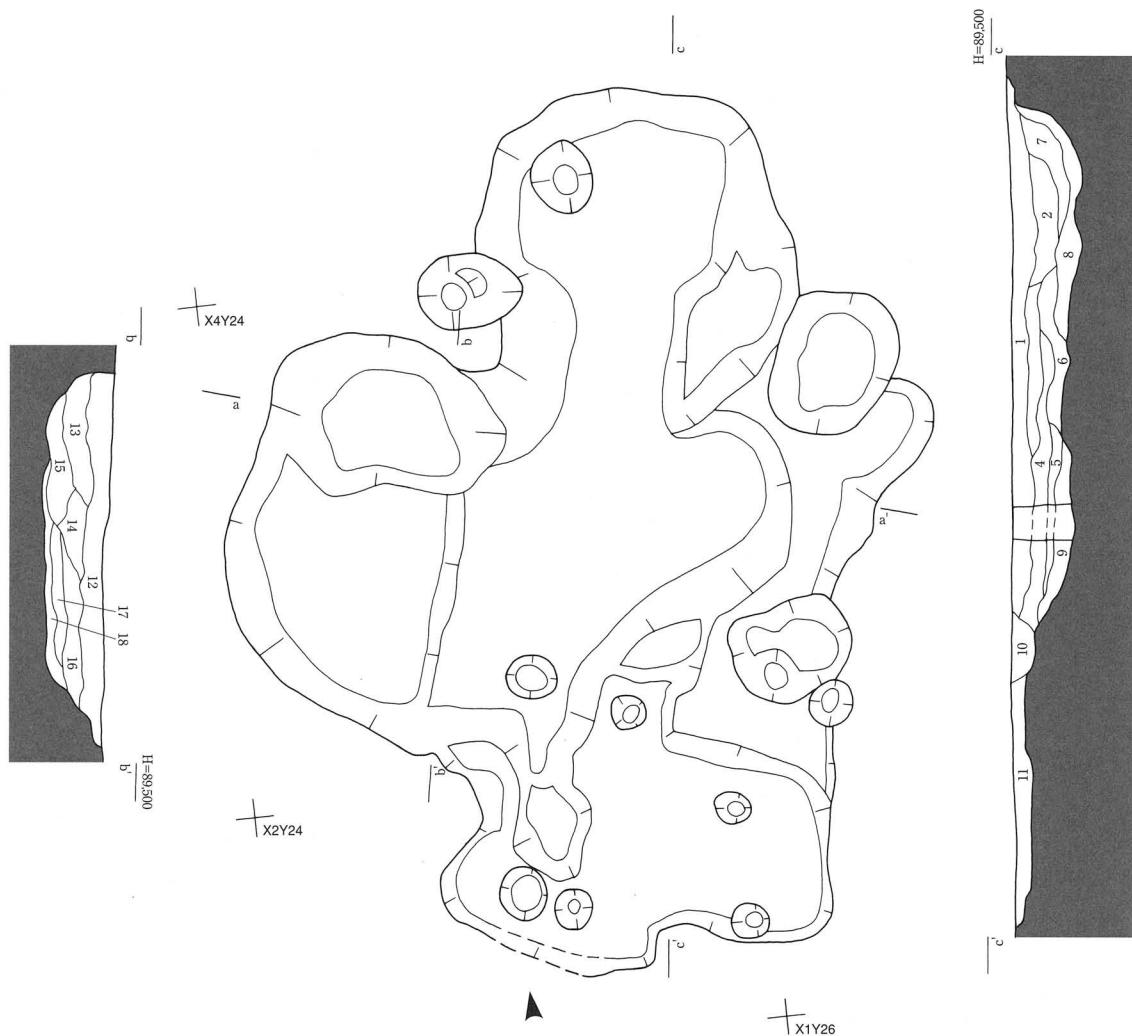
第6図 SB 2平面図・断面図 (1/80)



第7図 SB3・4平面図・断面図 (1/60)



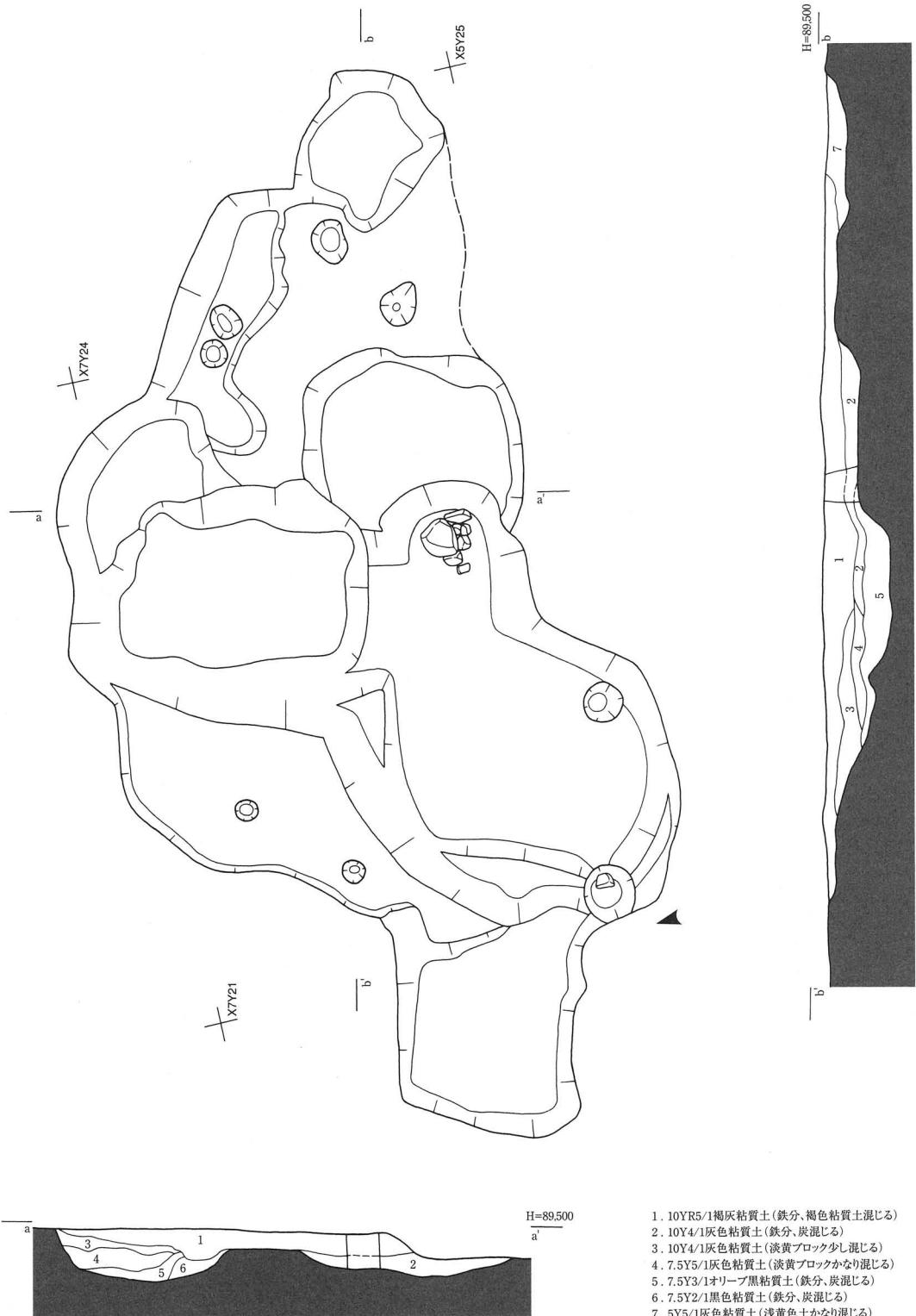
第8図 SB5・6平面図・断面図 (1/60)



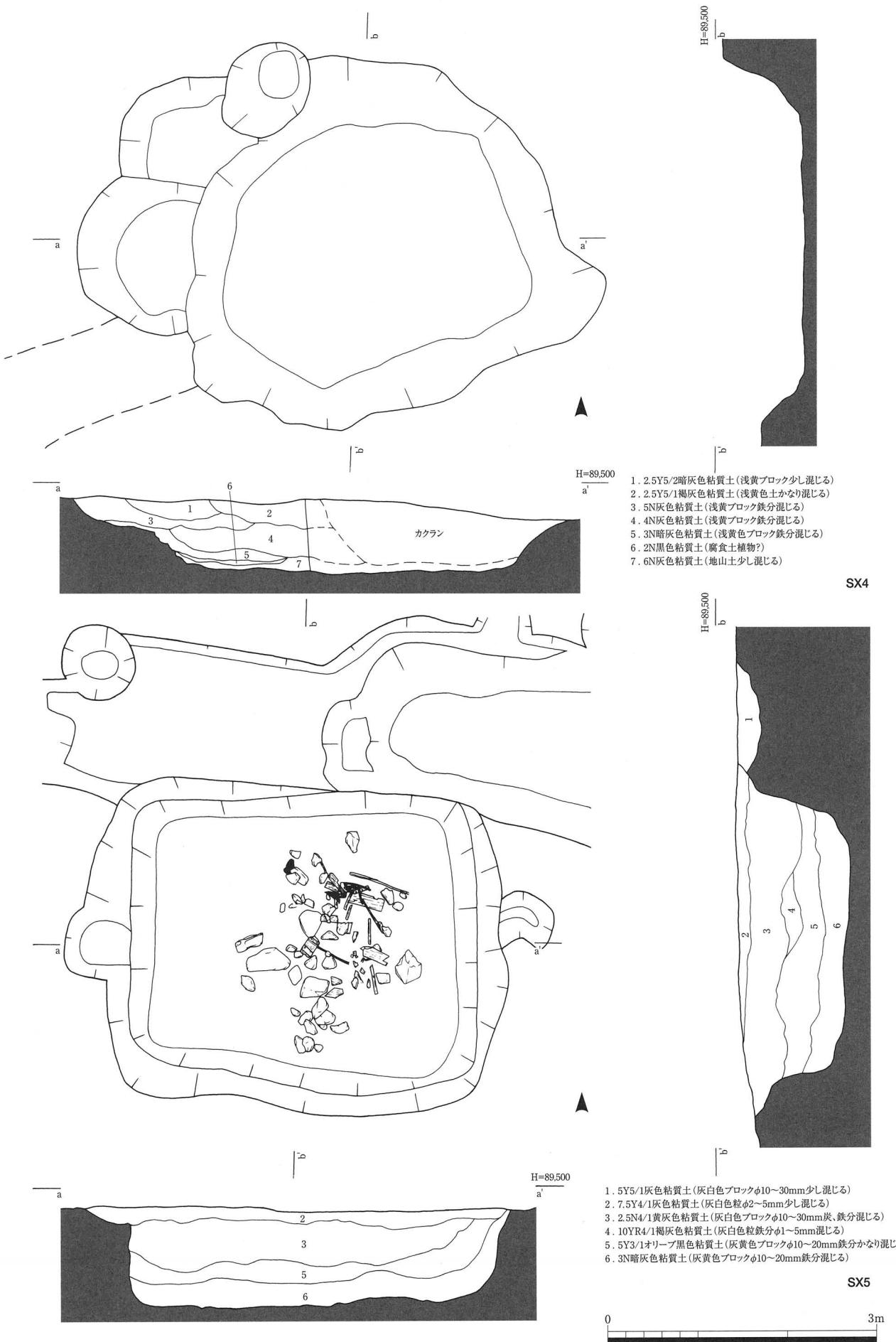
- |  |  |
|--|--|
| 1. 5Y6/1灰色粘質土(灰白色・灰黄色ブロックφ5~10mm炭混じる)    | 10. 10YR5/1褐色粘質土(灰白色・灰黄色粒φ1~5mm炭混じる)   |
| 2. 7.5Y5/1灰色粘質土(灰白色・灰黄色ブロックφ5~10mm炭混じる)  | 11. 10YR4/1褐色粘質土(灰白色・灰黄色粒φ1~5mm炭多く混じる) |
| 3. 5Y5/1灰色粘質土(灰白色・灰黄色ブロックφ5~10mm炭混じる)    | 12. 10YR5/1褐色粘質土(灰白色・灰黄色土混じる)          |
| 4. 2.5Y5/1黄灰色粘質土(灰白色・灰黄色ブロックφ5~10mm炭混じる) | 13. 5N灰色土(浅黄色ブロック混じる)                  |
| 5. 5Y4/1灰色粘質土(灰白色ブロックφ10~20mm鉄分混じる)      | 14. 4N灰色粘質土(浅黄色ブロック混じる)                |
| 6. 5N灰色粘質土(鉄分混じる)                        | 15. 3N灰色粘質土(浅黄色ブロック混じる)                |
| 7. 5N灰色粘質土(灰白色粒φ1~5mm炭混じる)               | 16. 5N灰色土(浅黄色ブロック混じる)                  |
| 8. 5N灰色粘質土(灰白色ブロックφ10~20mm混じる)           | 17. 4N灰色土(鉄分混じる)                       |
| 9. 2.5GYオリーブ灰色粘質土(灰白色ブロックφ10~20mm多く混じる)  | 18. 6N灰色土(地山ブロック混じる)                   |



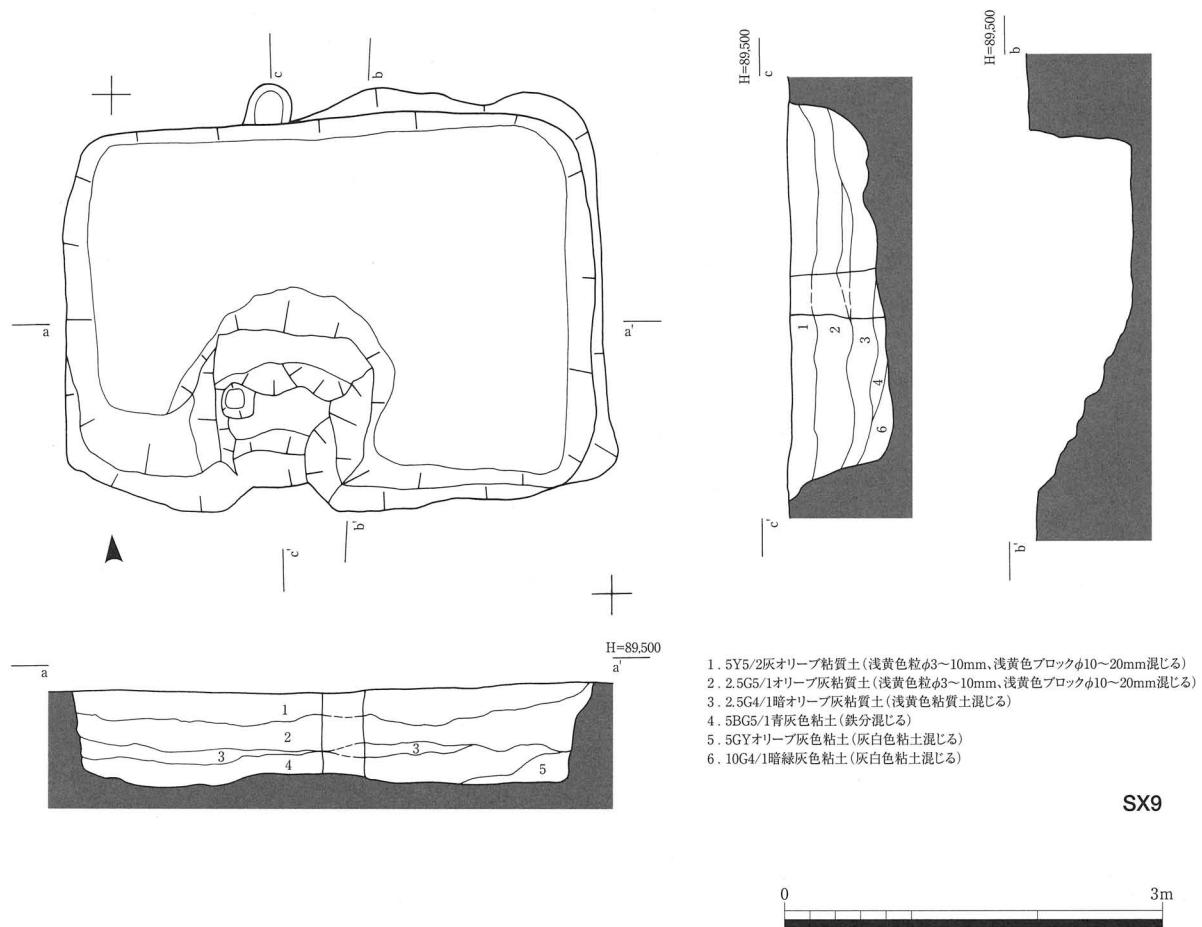
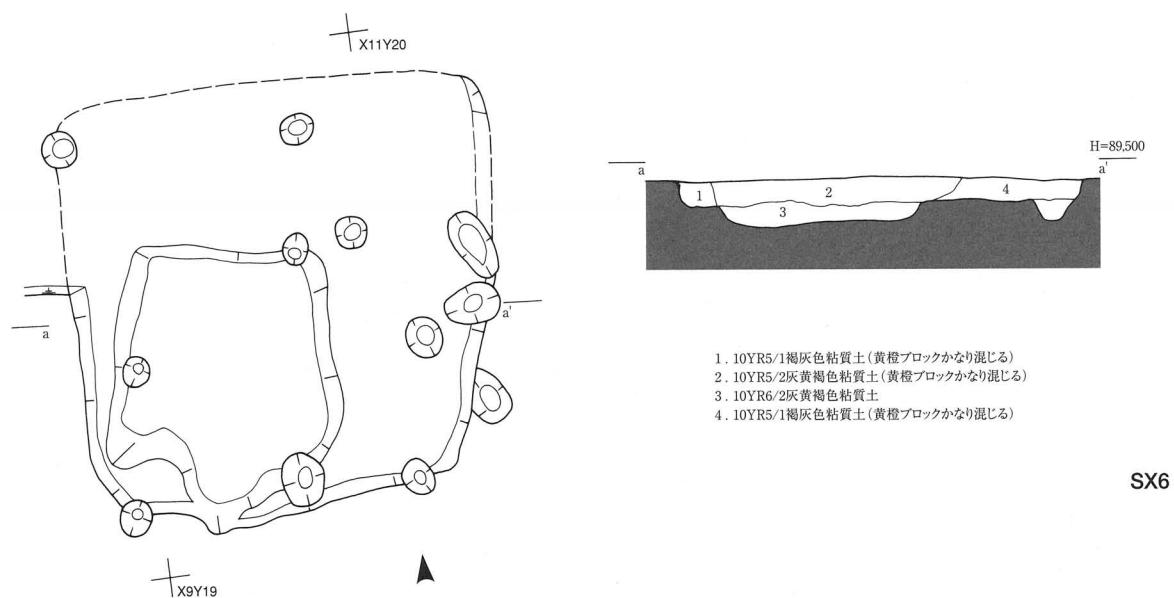
第9図 SX1平面図・断面図 (1/60)



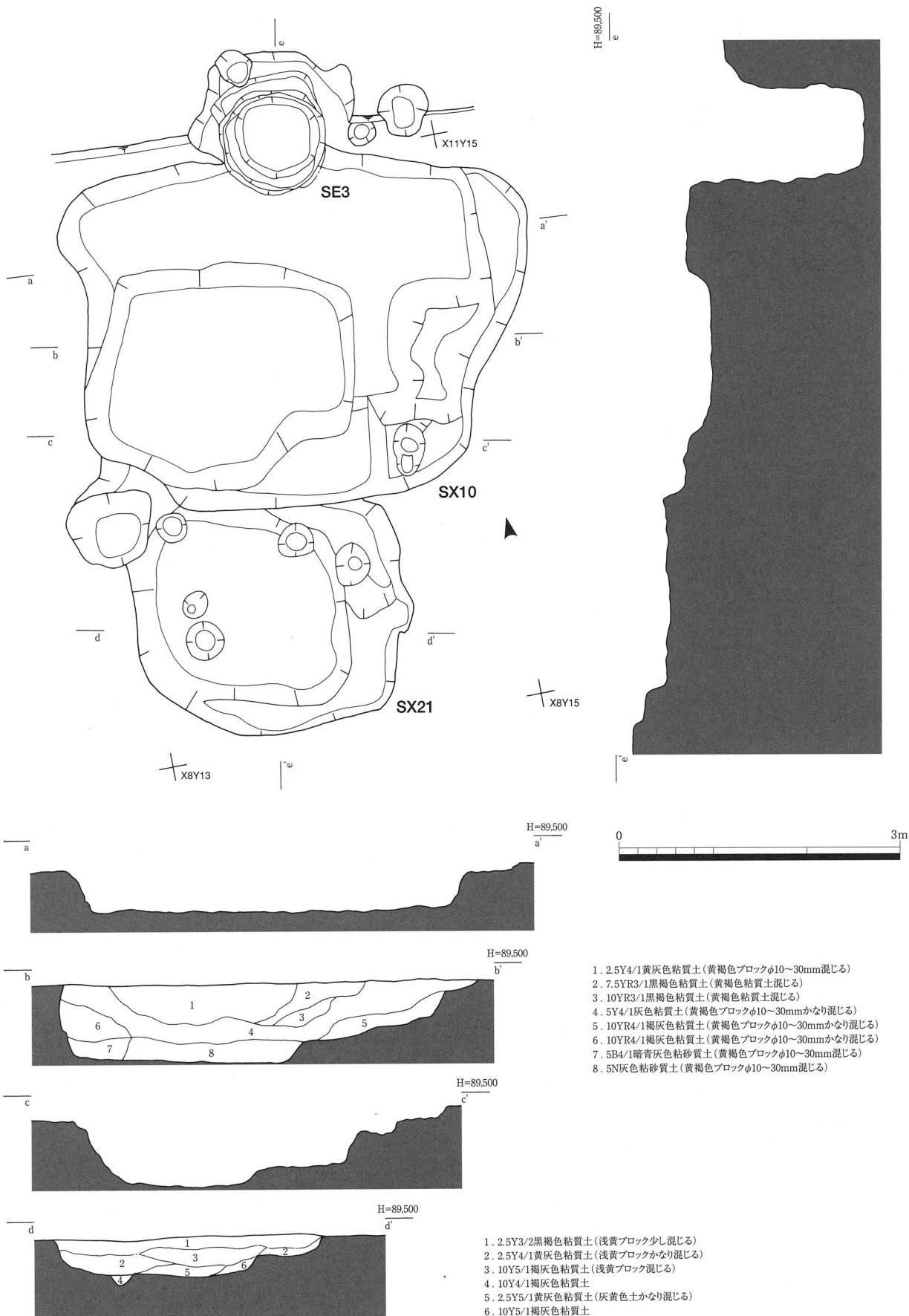
第10図 SX 2 平面図・断面図 (1/60)



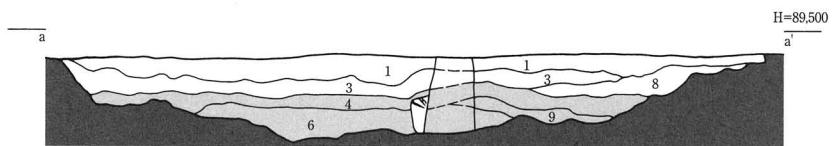
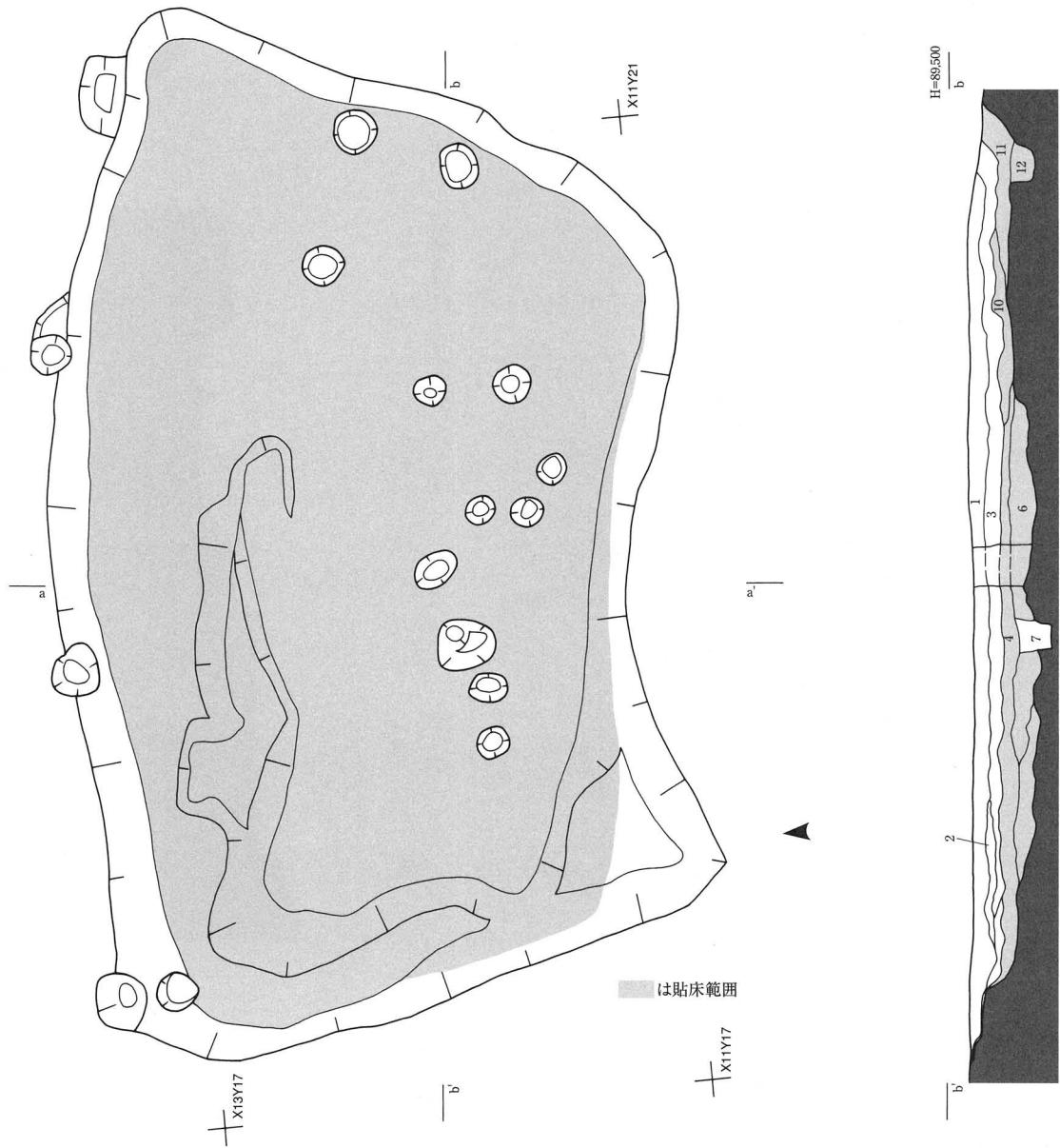
第11図 SX 4・5 平面図・断面図 (1/60)



第12図 SX 6・9 平面図・断面図 (1/60)



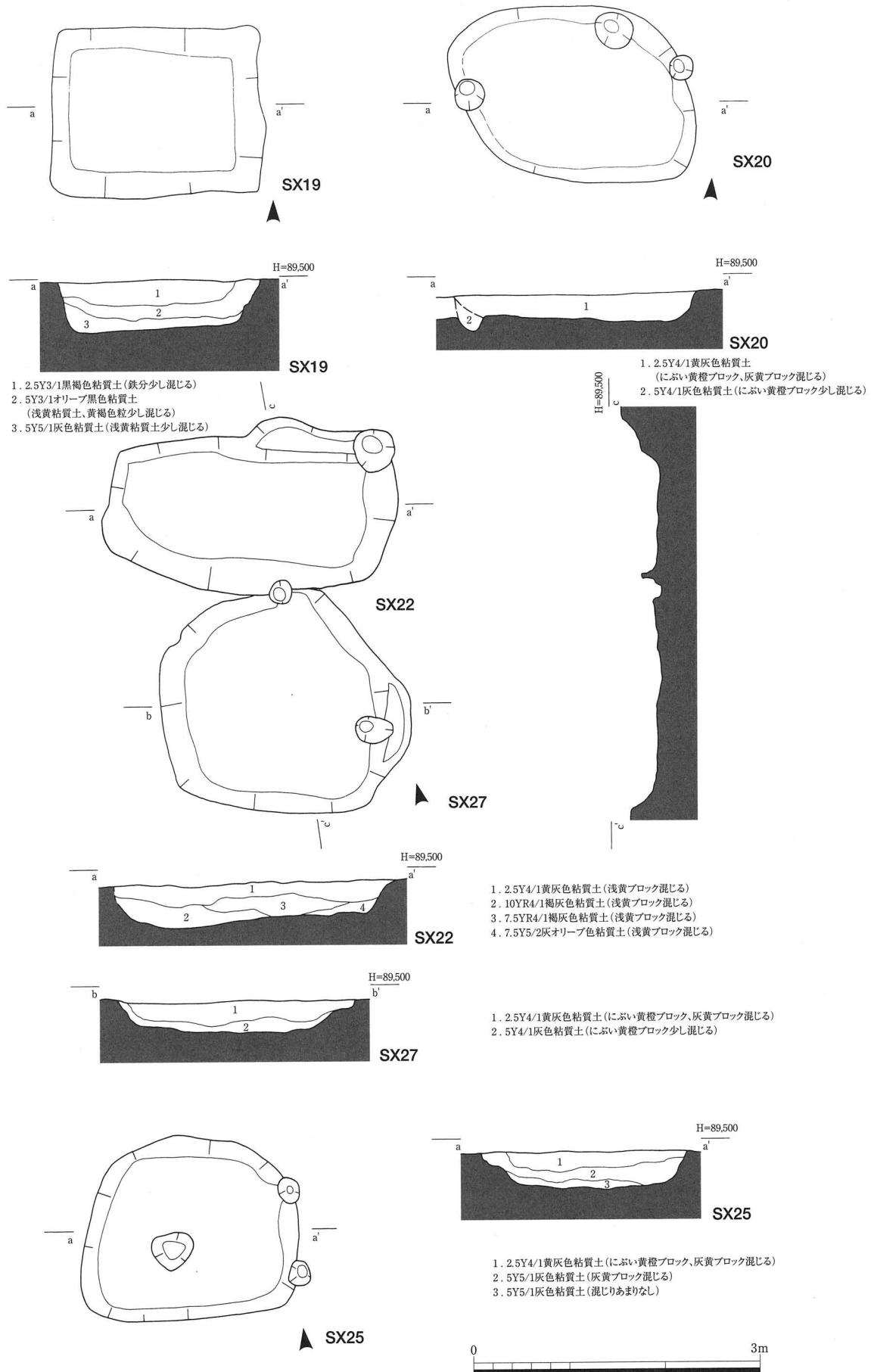
第13図 SX10・21平面図・断面図 (1/60)



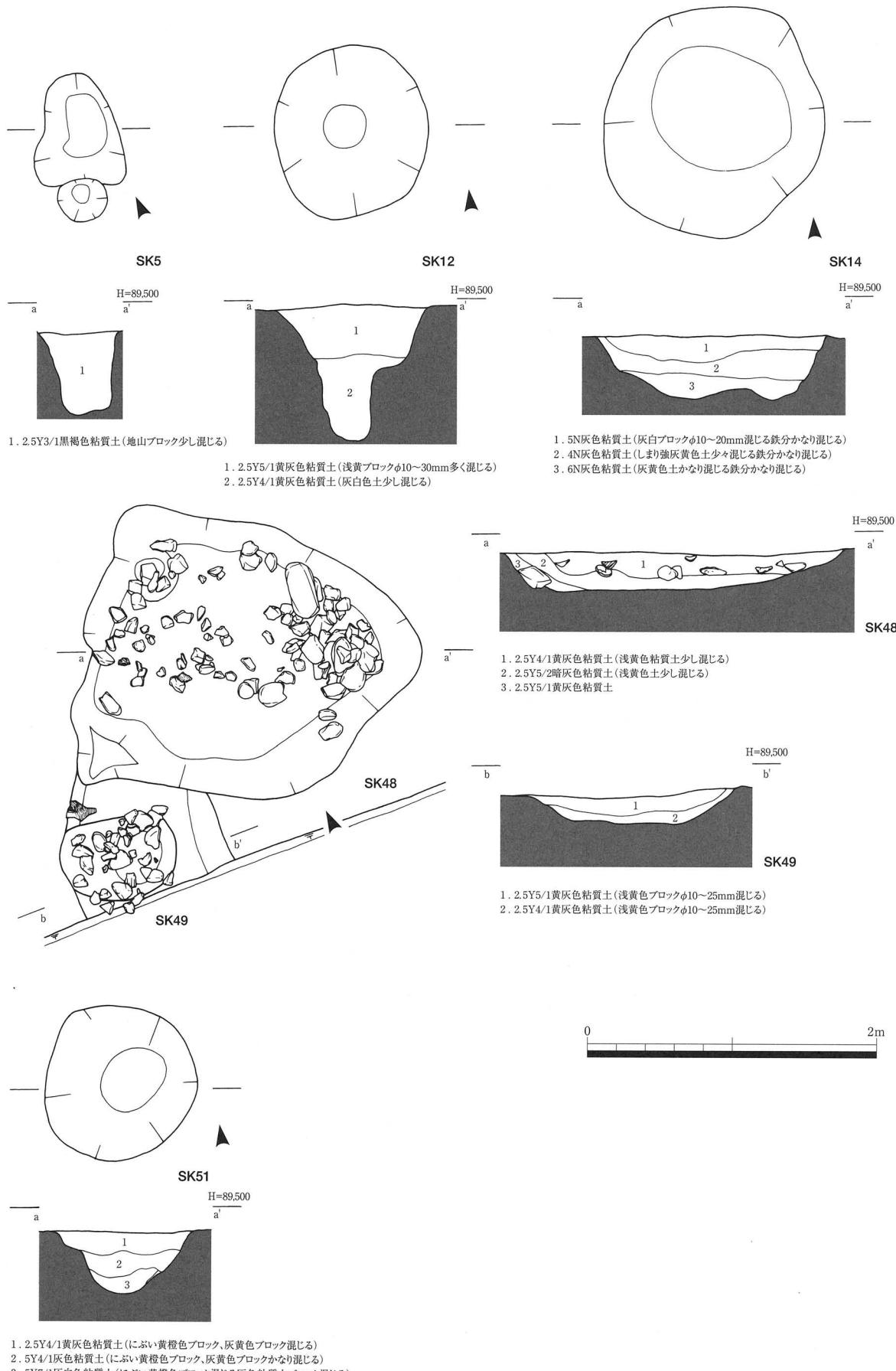
- 1. 10YR5/2灰黄褐色粘質土(炭少々混じる)
- 2. 10YR6/2灰黄褐色粘質土(黒褐色ブロックかなり混じる)
- 3. 2.5Y5/3黄褐色粘質土(浅黄ブロック少し混じる)
- 4. 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土(浅黄ブロック少し混じる)
- 5. 5Y5/2灰オリーブ粘質土(浅黄、黄褐色ブロックかなり混じる)
- 6. 5Y4/2灰オリーブ粘質土(浅黄、黄褐色ブロックかなり混じる)
- 7. 5Y4/1灰色粘質土(黄褐色ブロックかなり混じる)
- 8. 2.5Y4/1灰黄色粘質土(浅黄ブロック<大>黄褐色ブロック混じる)
- 9. 5Y3/1オリーブ黒色粘質土(浅黄ブロック混じる)
- 10. 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土(浅黄粒混じる)
- 11. 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土(浅黄ブロックかなり混じる)
- 12. 5Y4/1灰色粘質土(黄褐色、浅黄ブロック混じる)



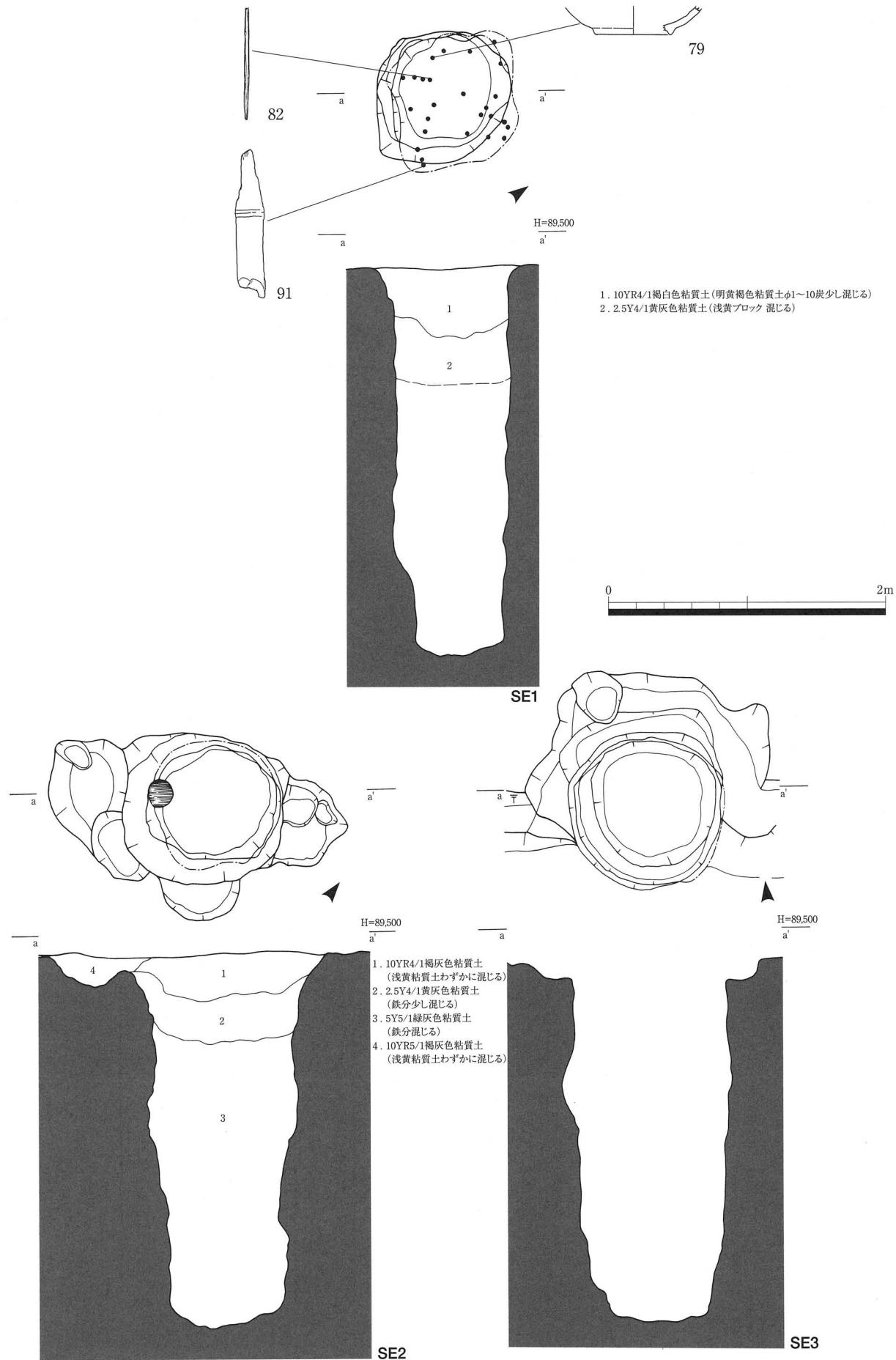
第14図 SX13平面図・断面図 (1/60)



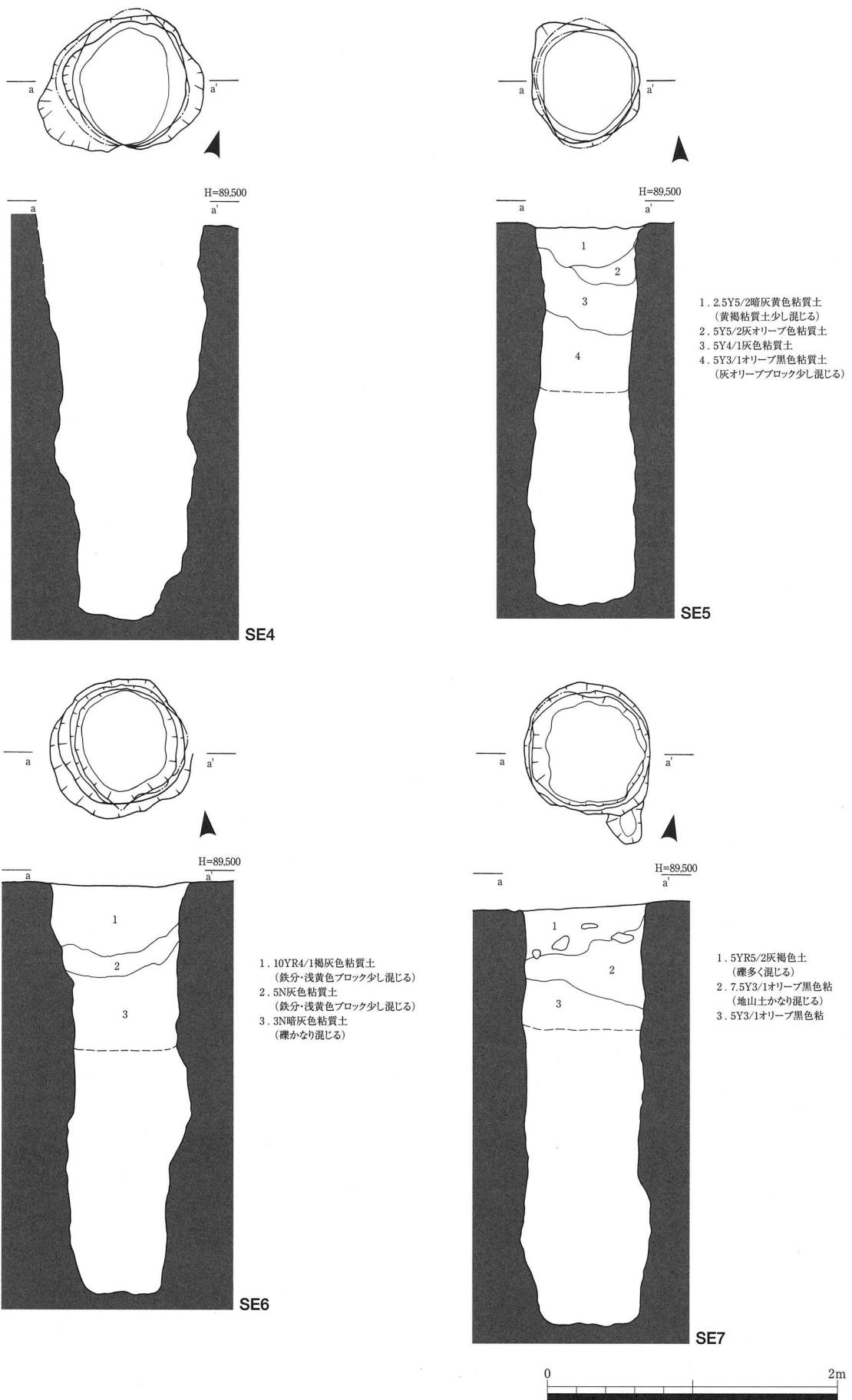
第15図 SX19・20・22・25・27平面図・断面図 (1 / 60)



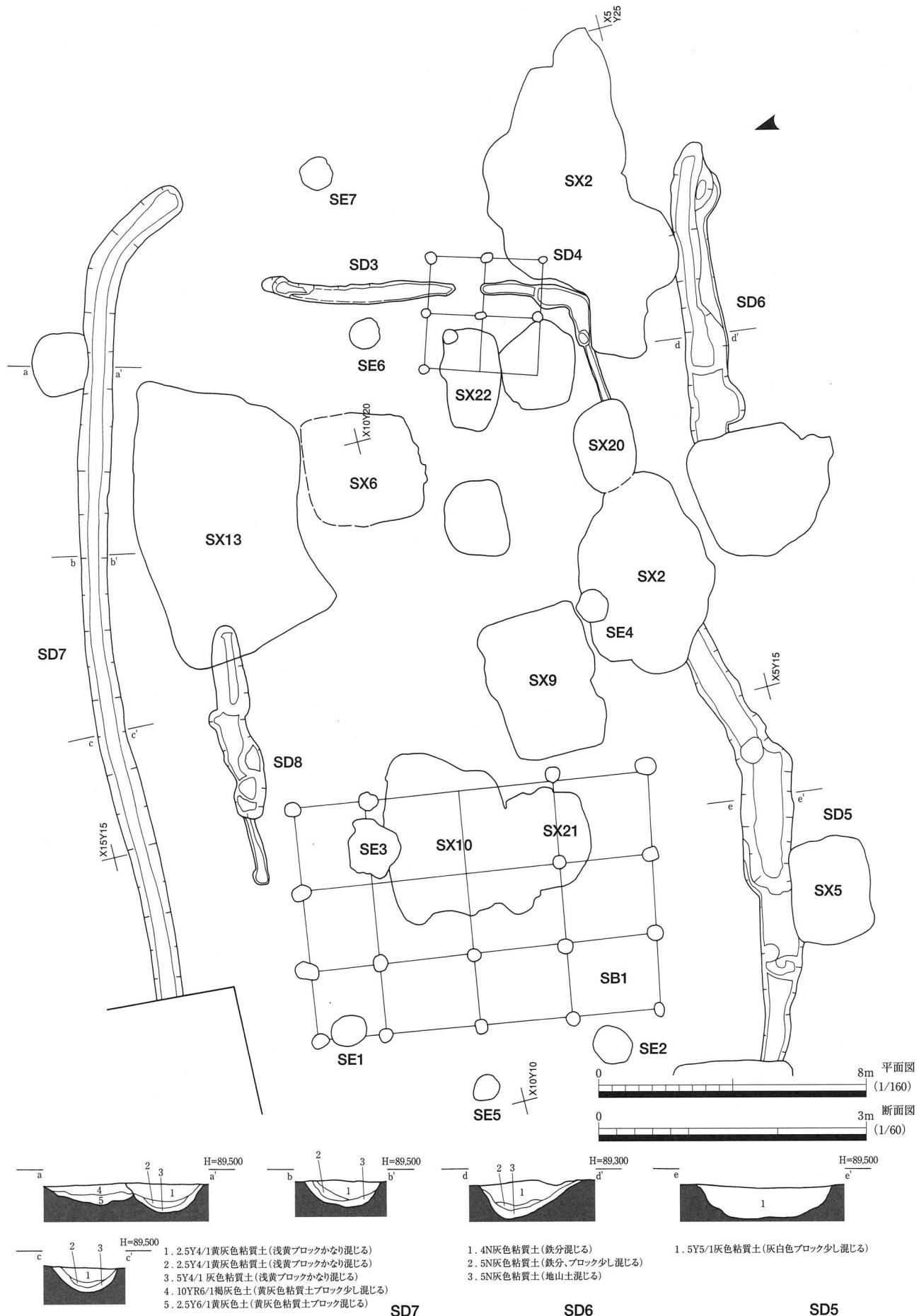
第16図 SK 5・12・14・48・49・51平面図・断面図 (1 / 40)



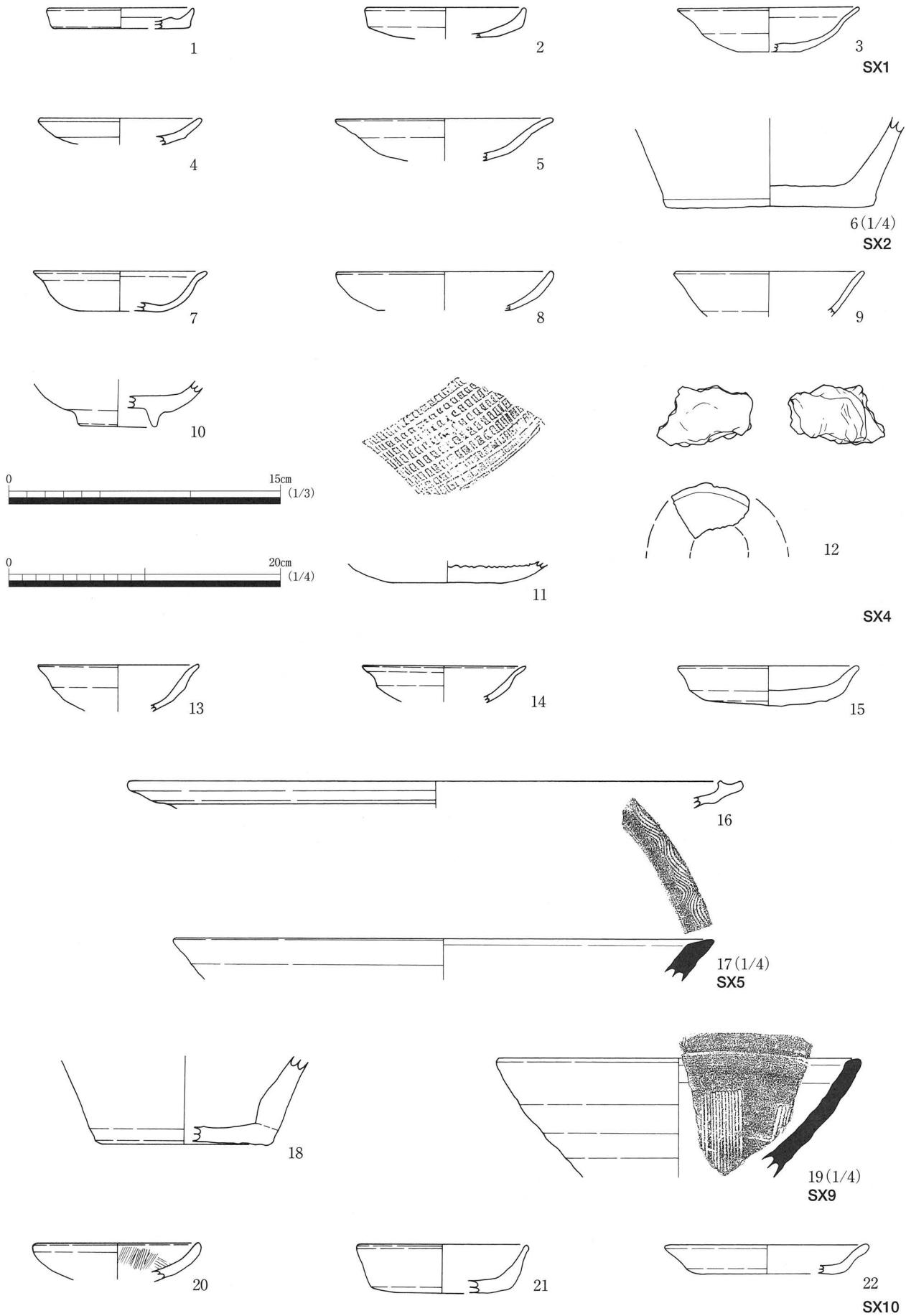
第17図 SE 1・2・3 平面図・断面図 (1/40)



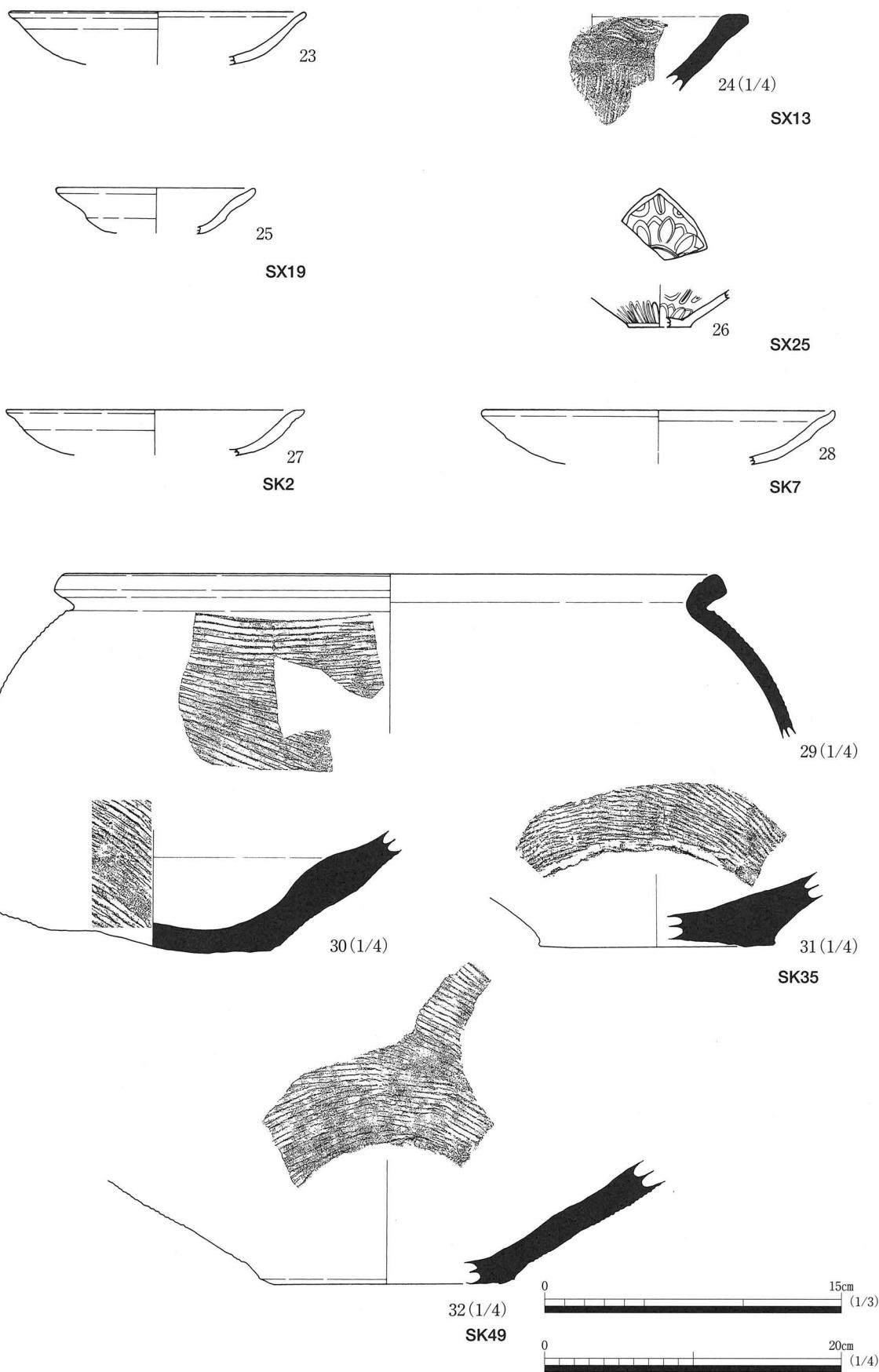
第18図 SE 4・5・6・7 平面図・断面図 (1/40)



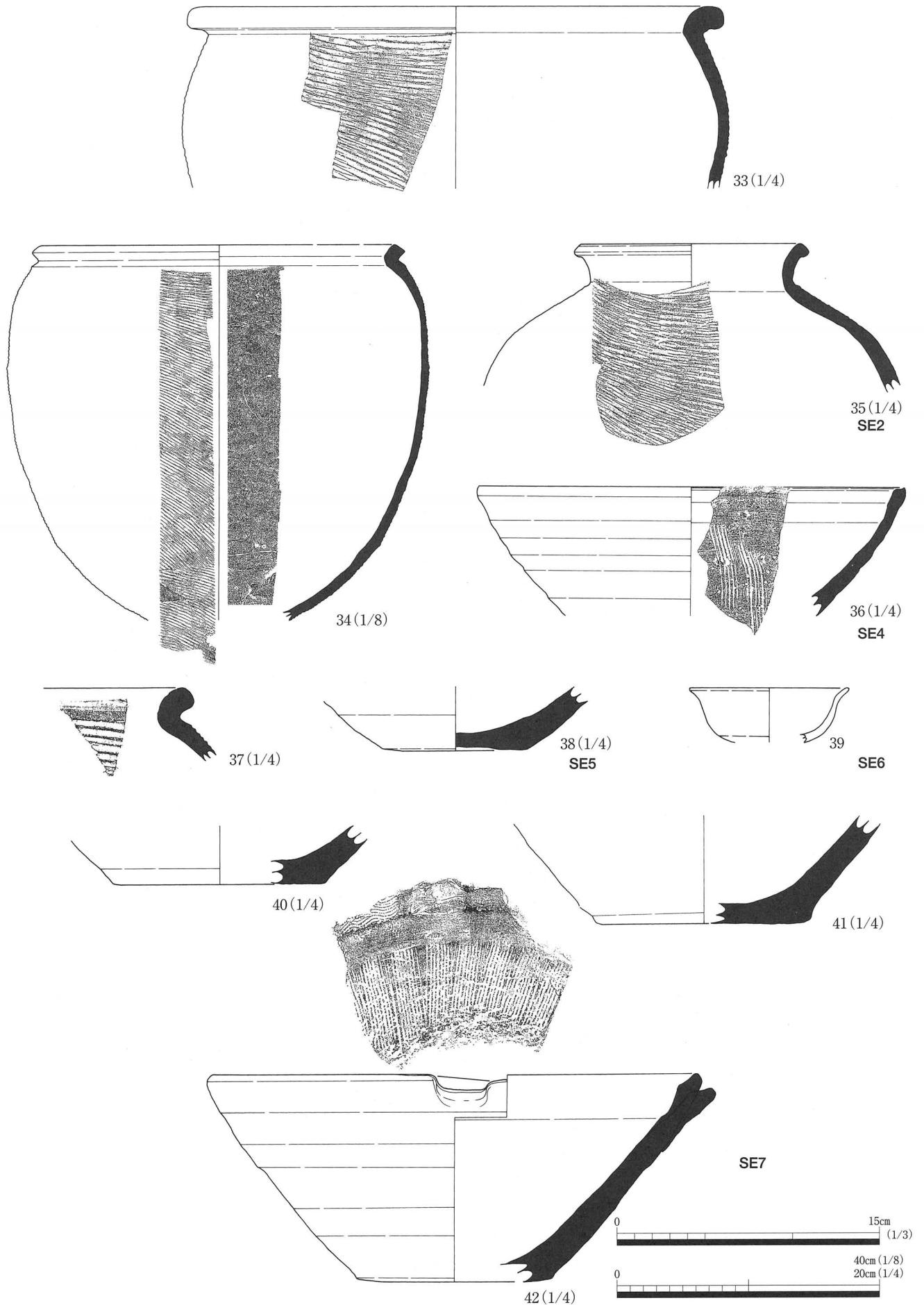
第19図 溝状遺構集中区平面図・断面図



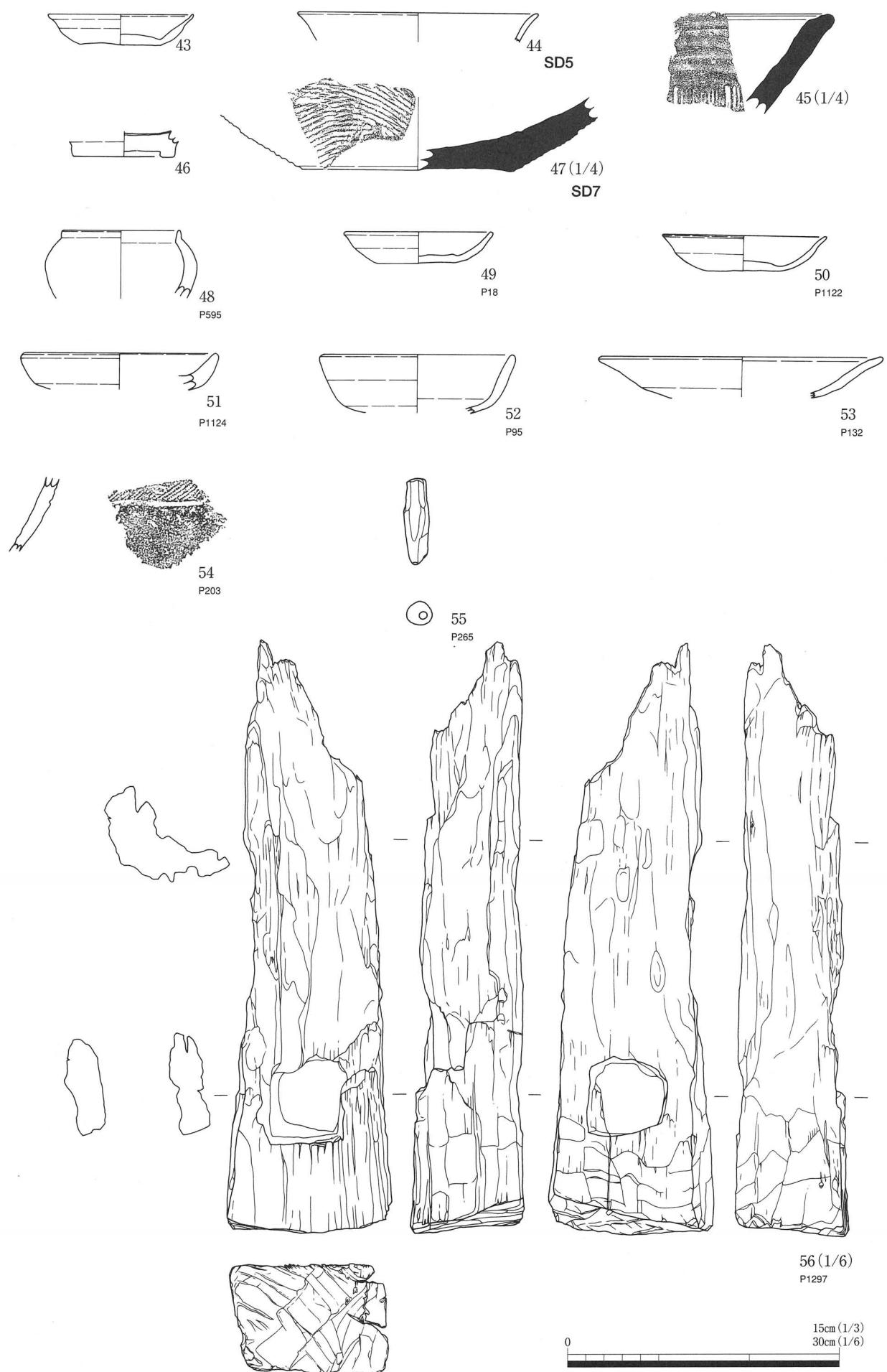
第20図 穫穴状土坑（SX）出土土器・陶磁器



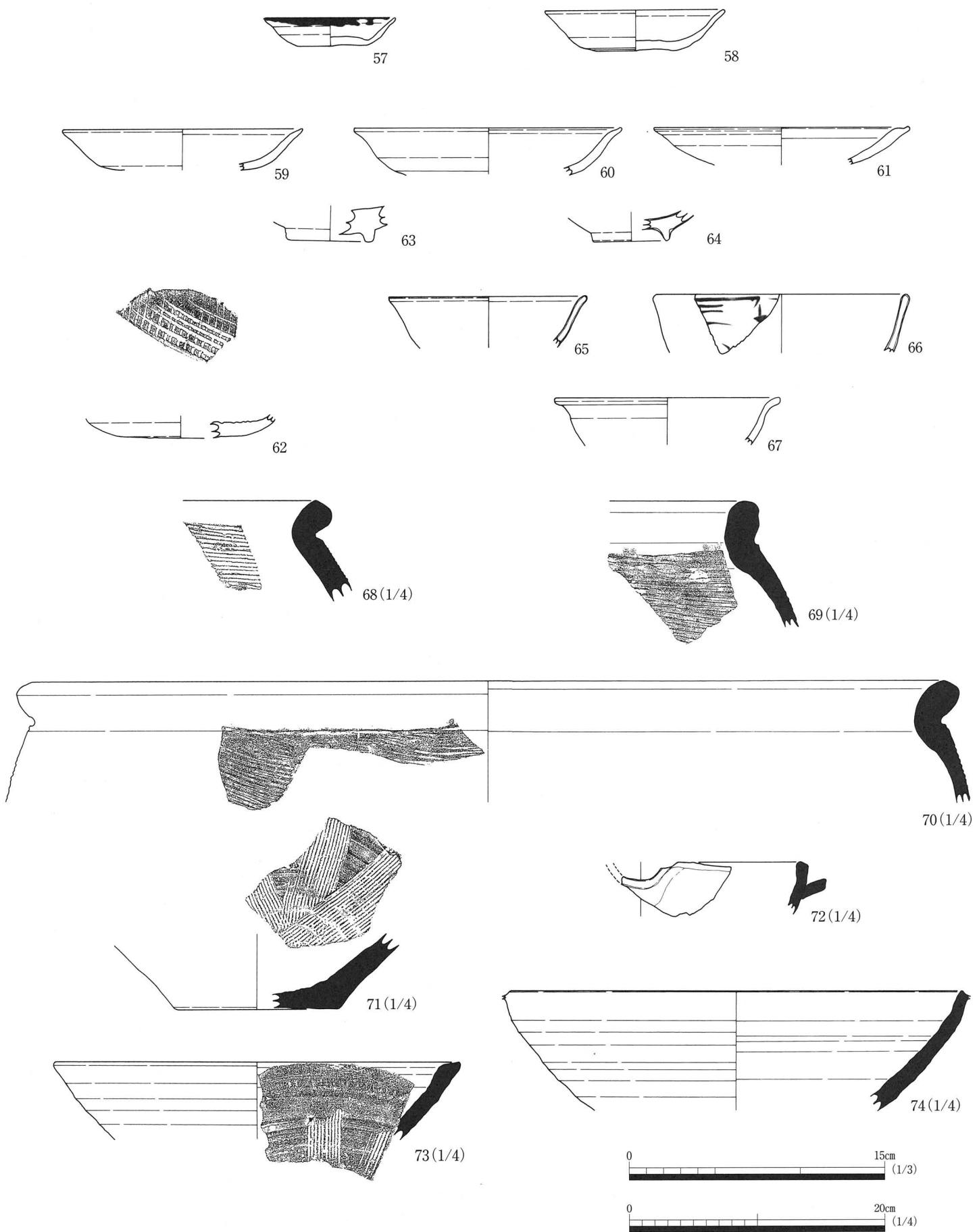
第21図 竪穴状土坑・土坑出土土器・陶磁器



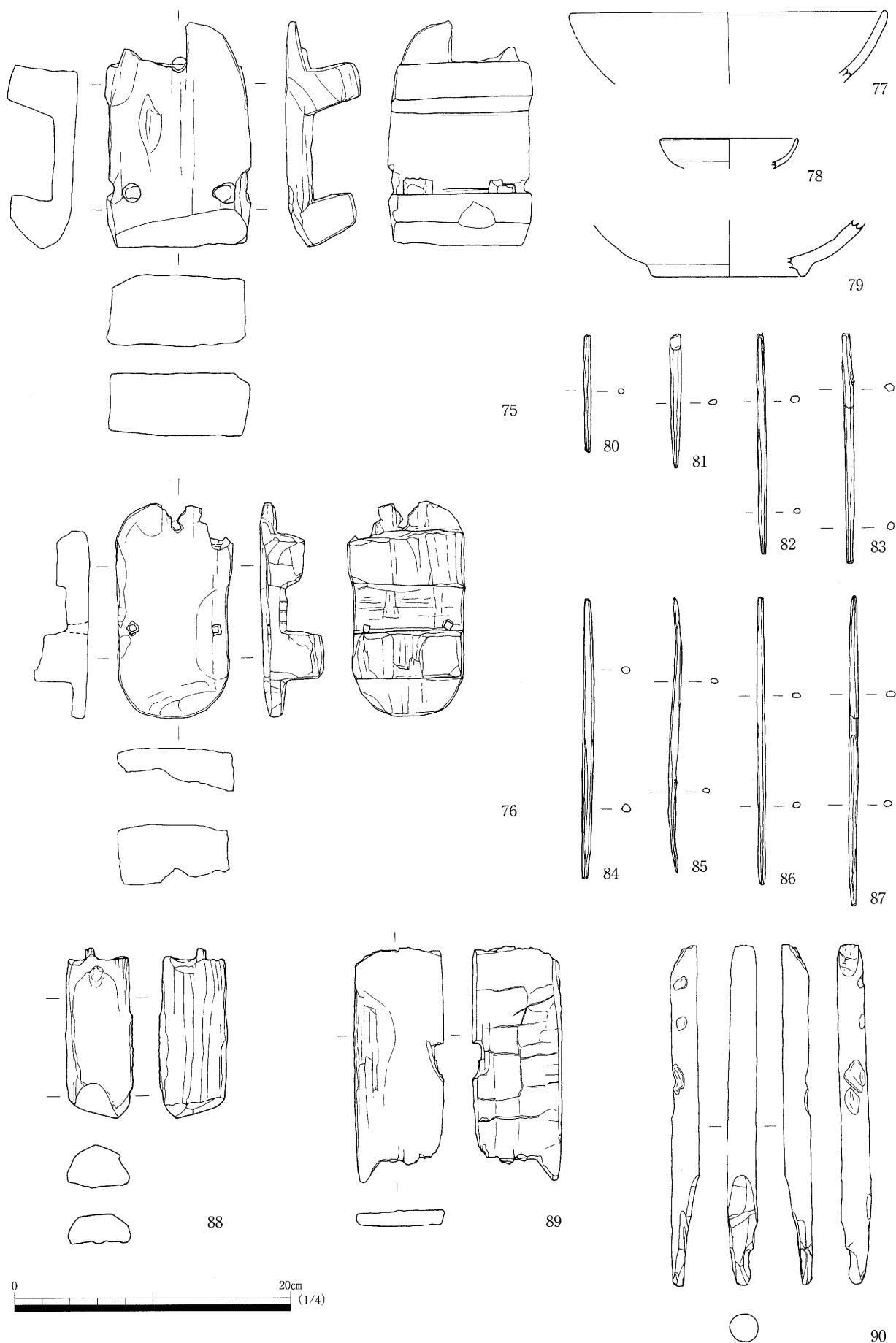
第22図 井戸出土土器・陶磁器



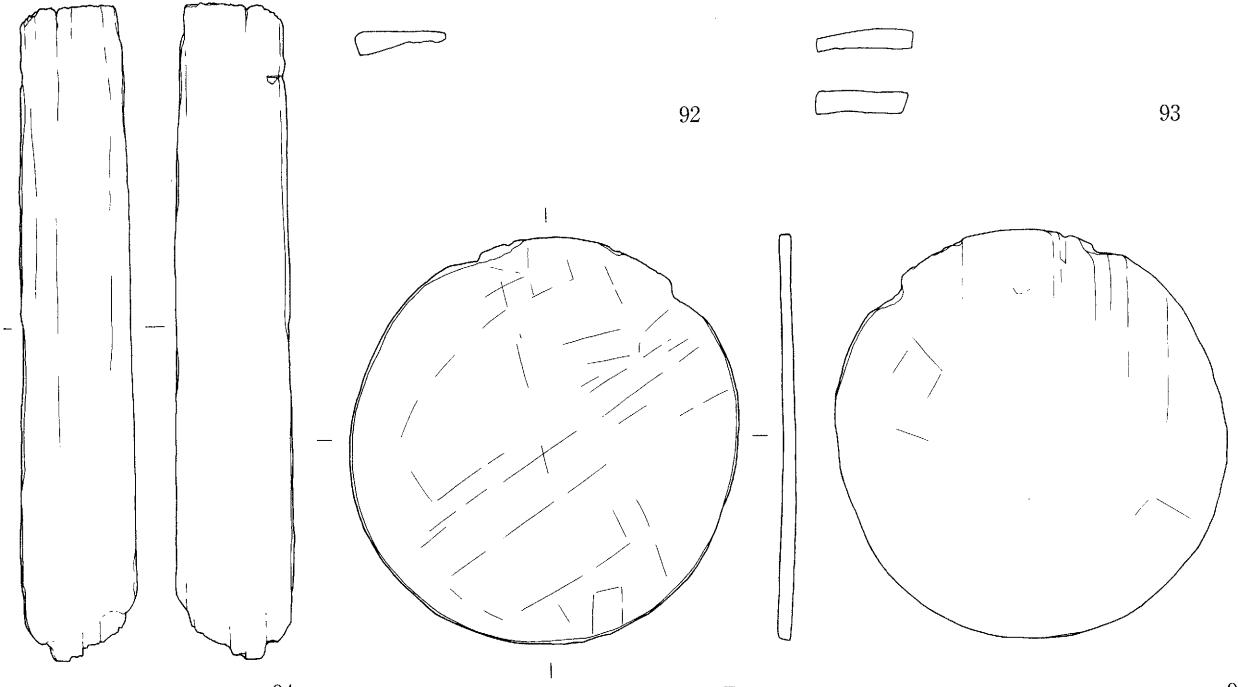
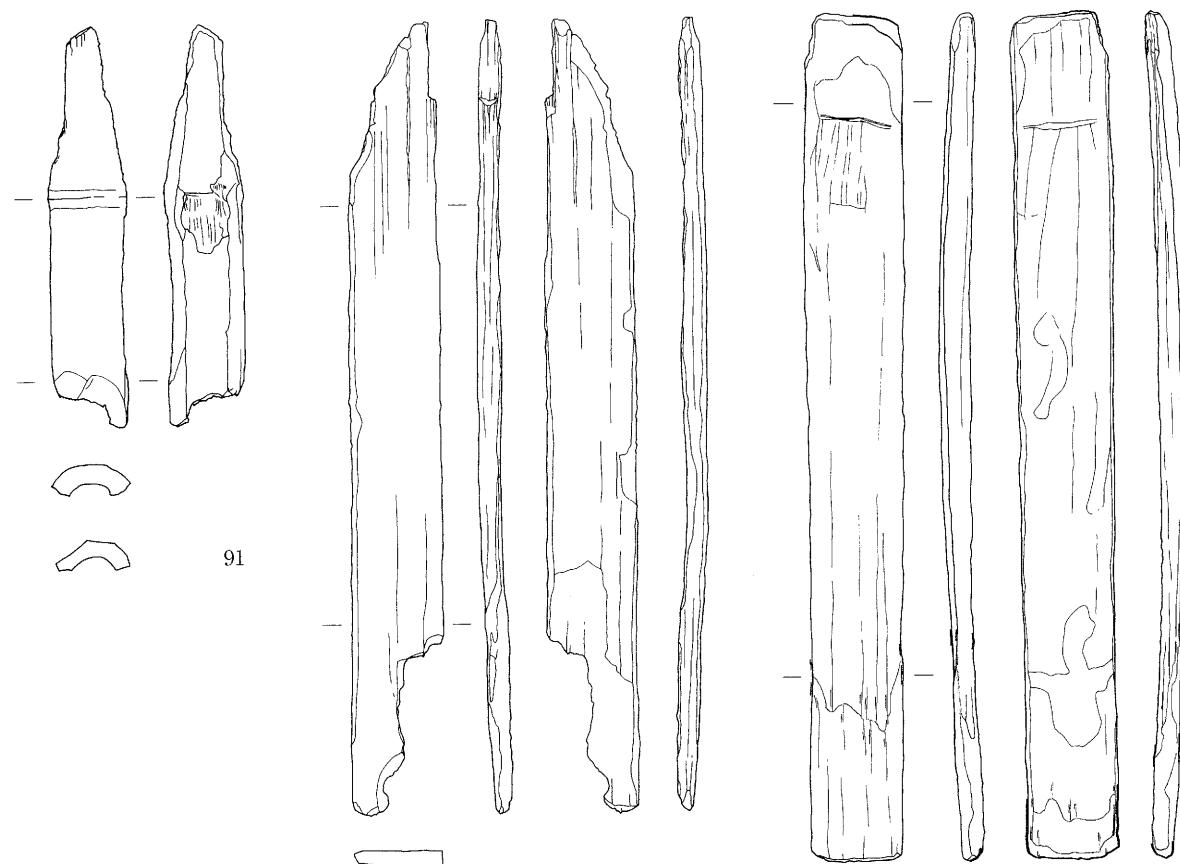
第23図 穴（ピット）出土遺物



第24図 遺構外出土遺物

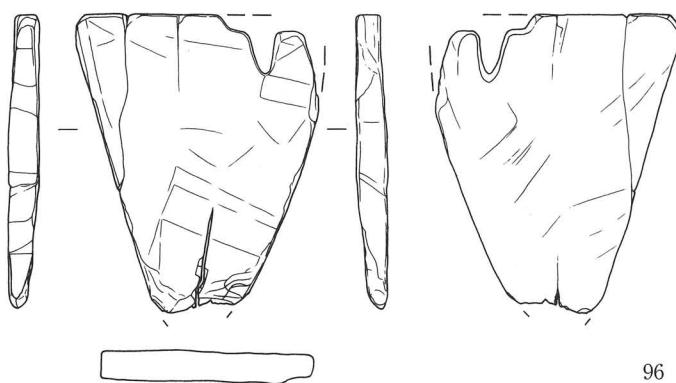


第25図 竪穴状土坑 (SX)・井戸 (SE) 出土木製品

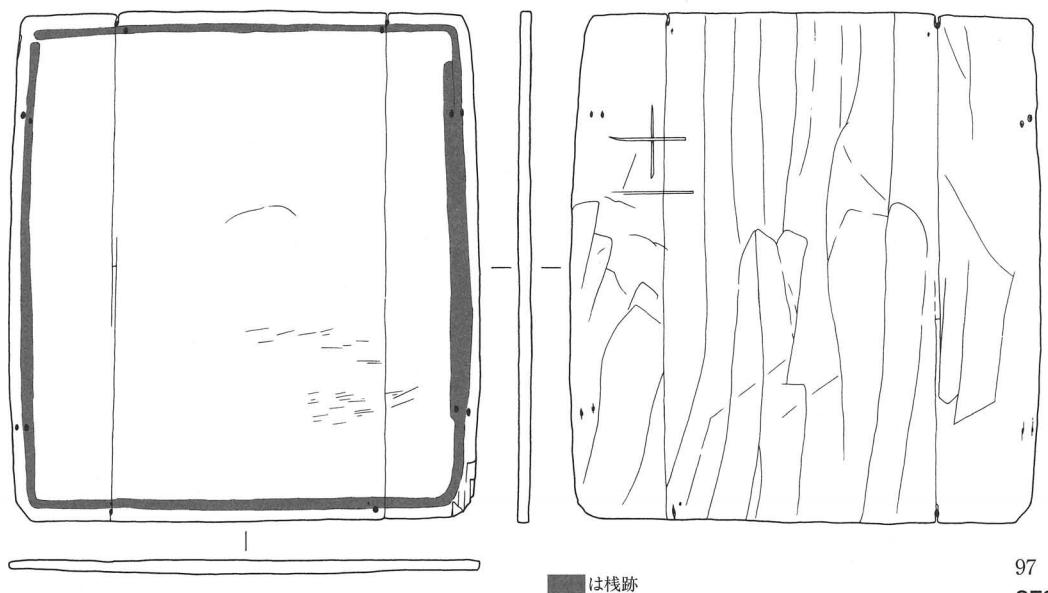


0 20cm (1/4)

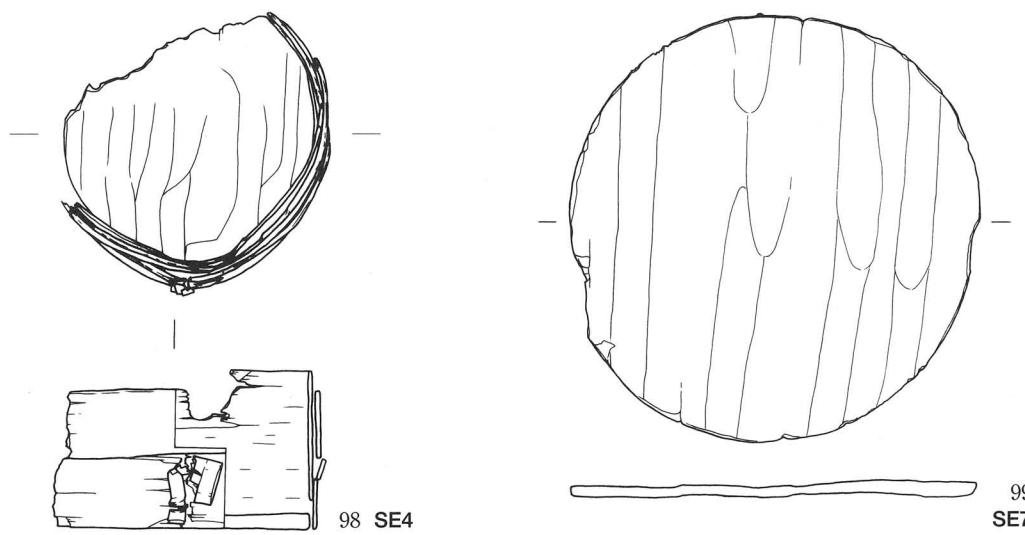
第26図 井戸（SE1・2）出土木製品



96

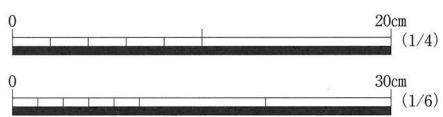


97  
SE3

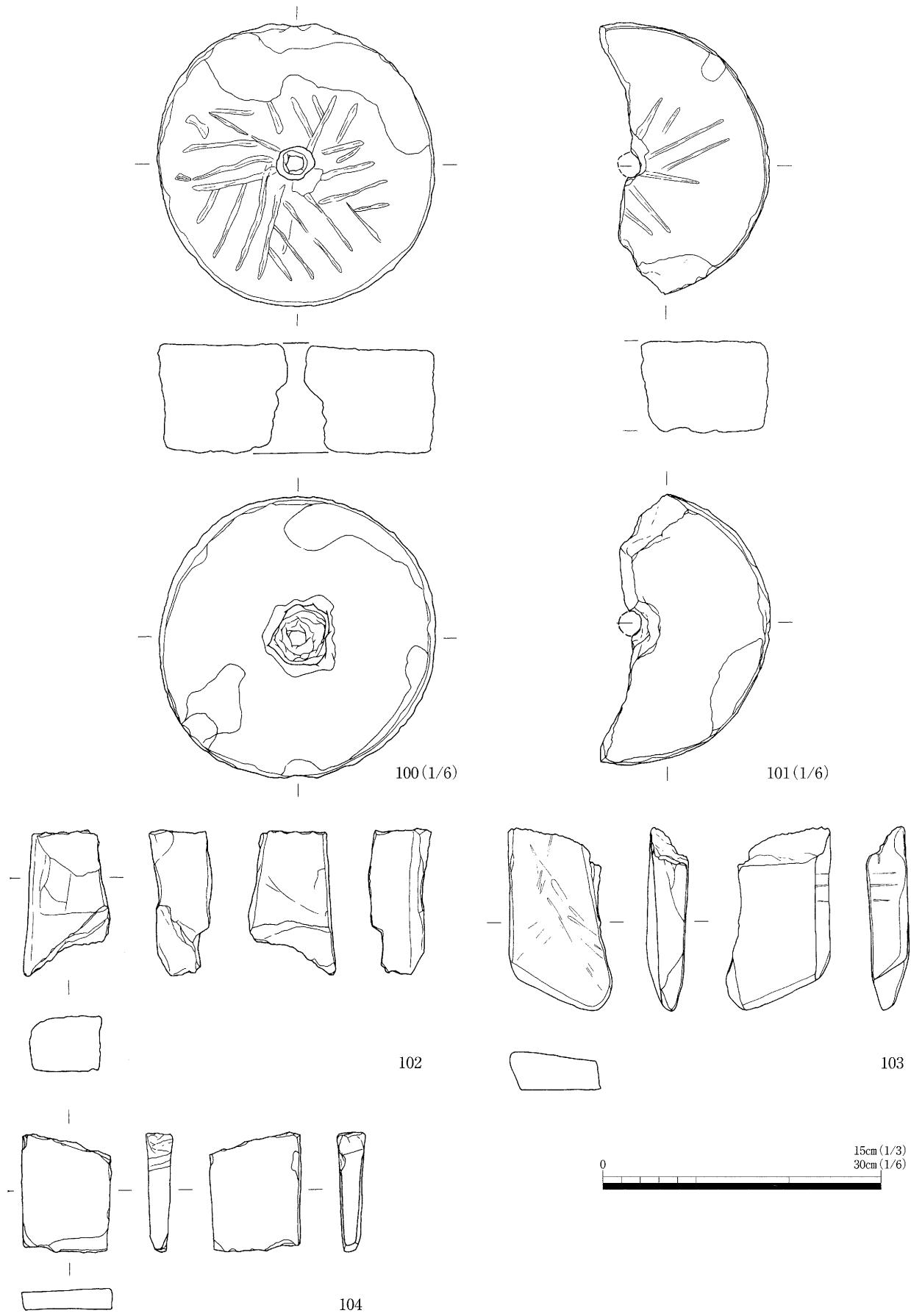


98 SE4

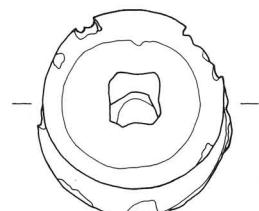
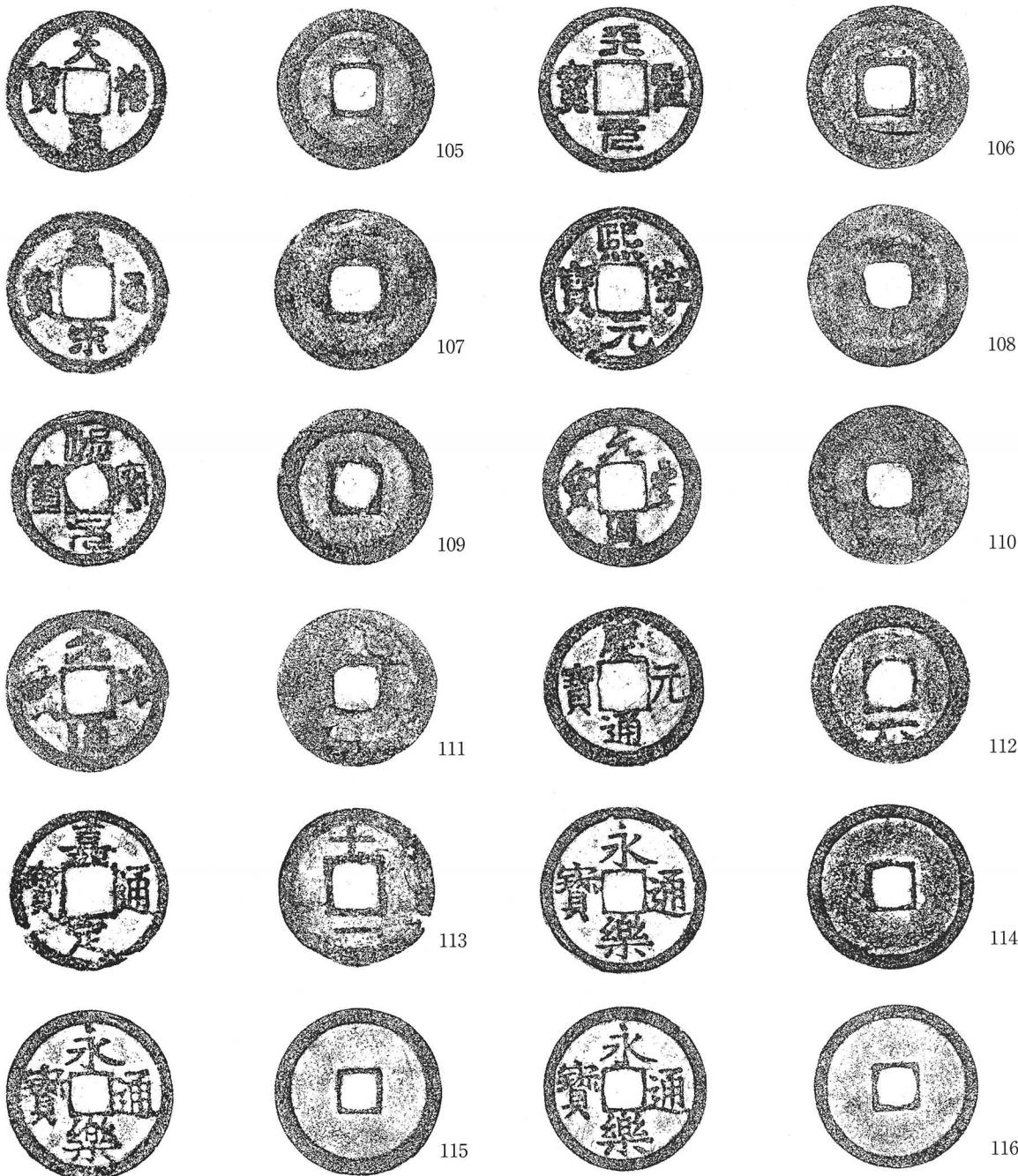
99  
SE7



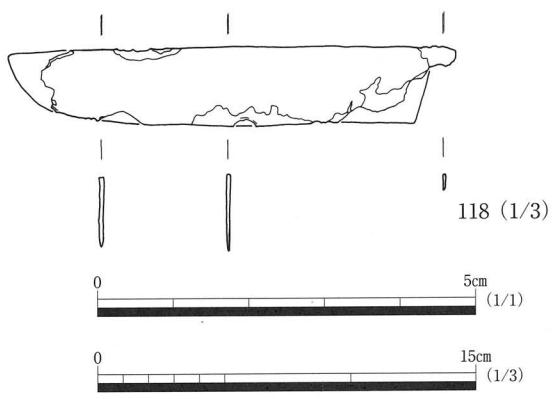
第27図 井戸出土木製品



第28図 出土石製品



117



第29図 出土金属製品（錢貨・鉄製品） ※錢貨は1／1



















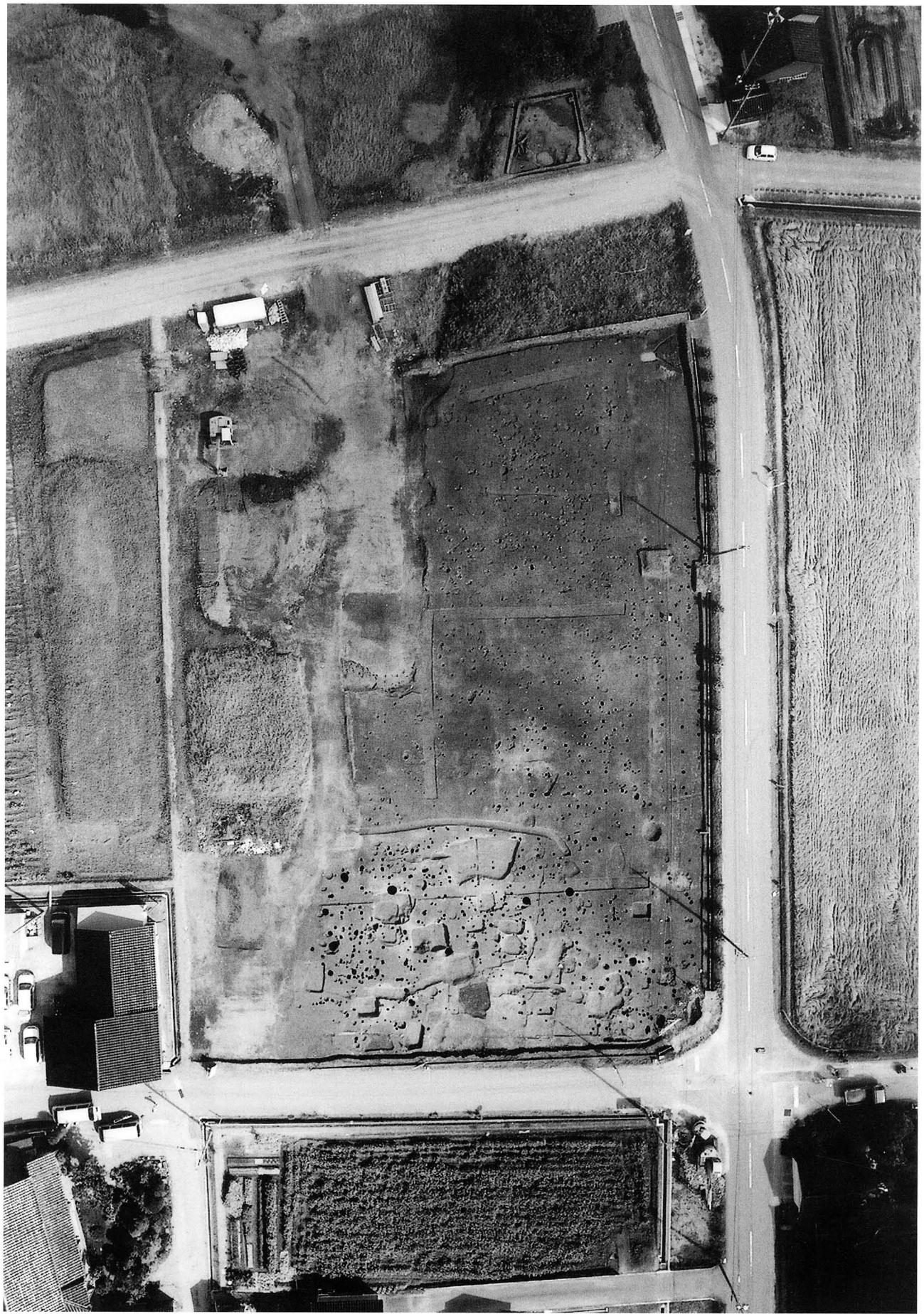








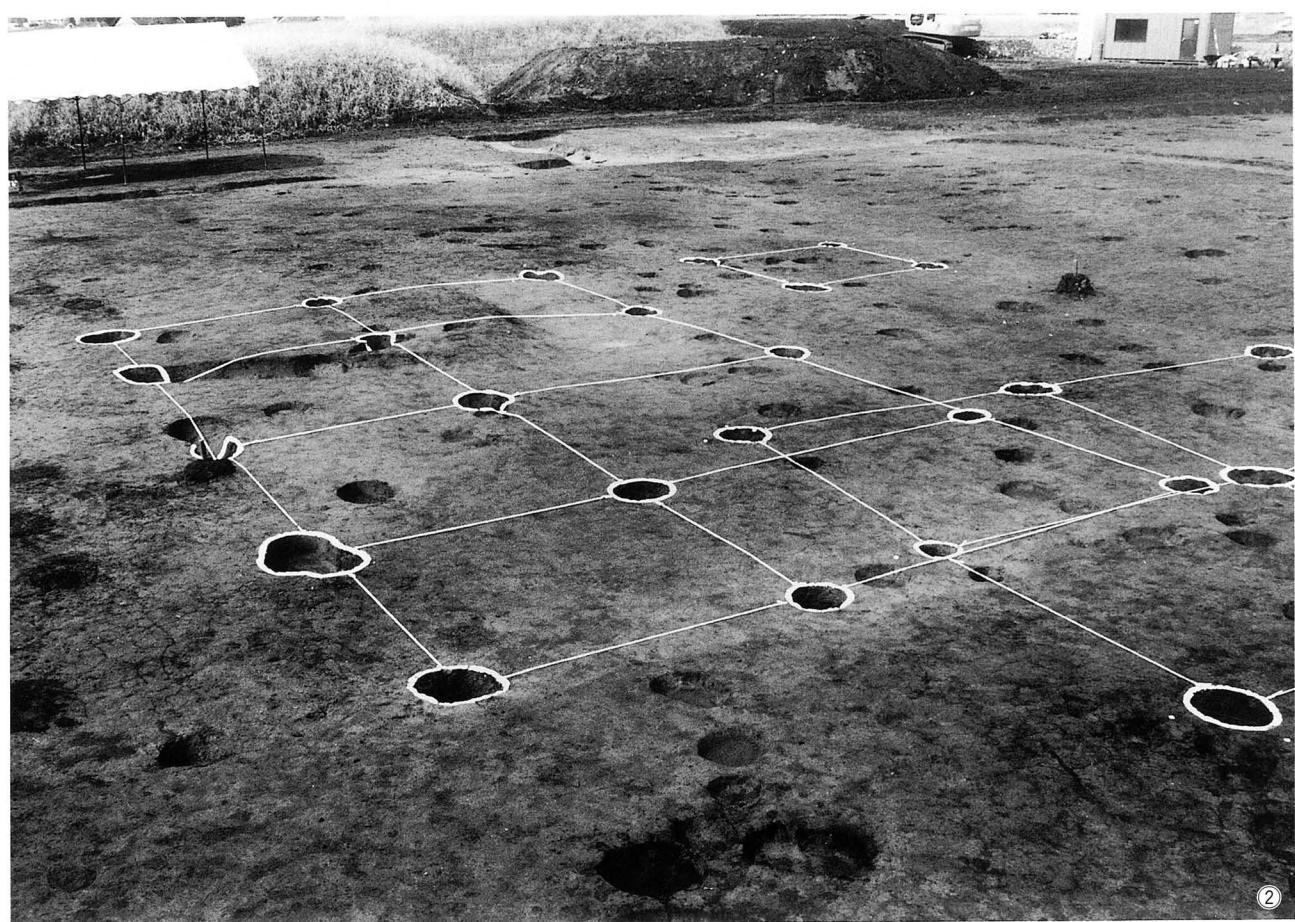




図版1 調査区全景



①



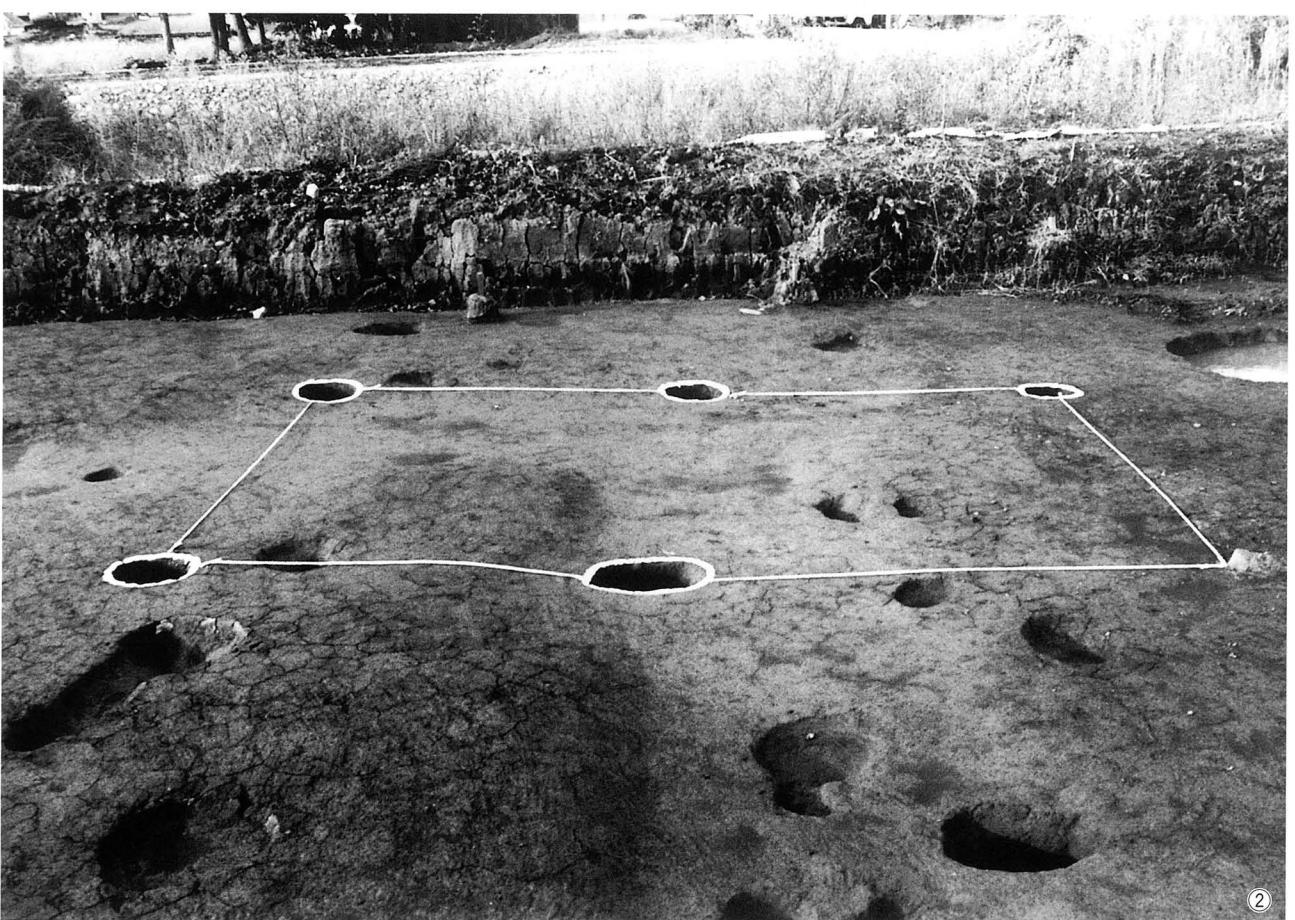
②

図版2 8地区検出遺構(1)

①SB1 (南から) ②SB2 (南東から)



①



②

図版3 8地区検出遺構(2)

①S B 3・4 (南東から) ②S B 5 (南から)



①



②

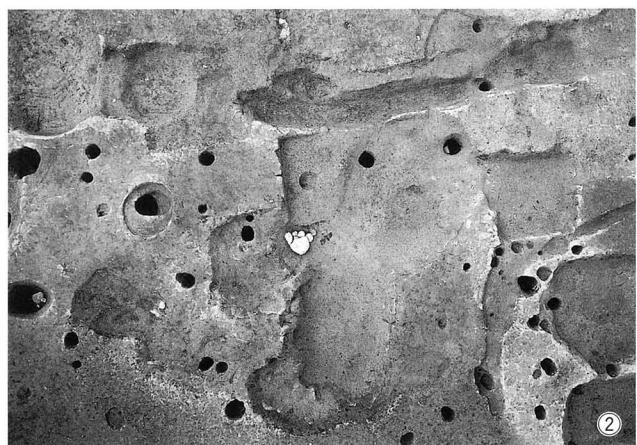
図版4 8地区検出遺構(3)

① S X 5 遺物出土状況（西から） ② S X 9 （北東から）



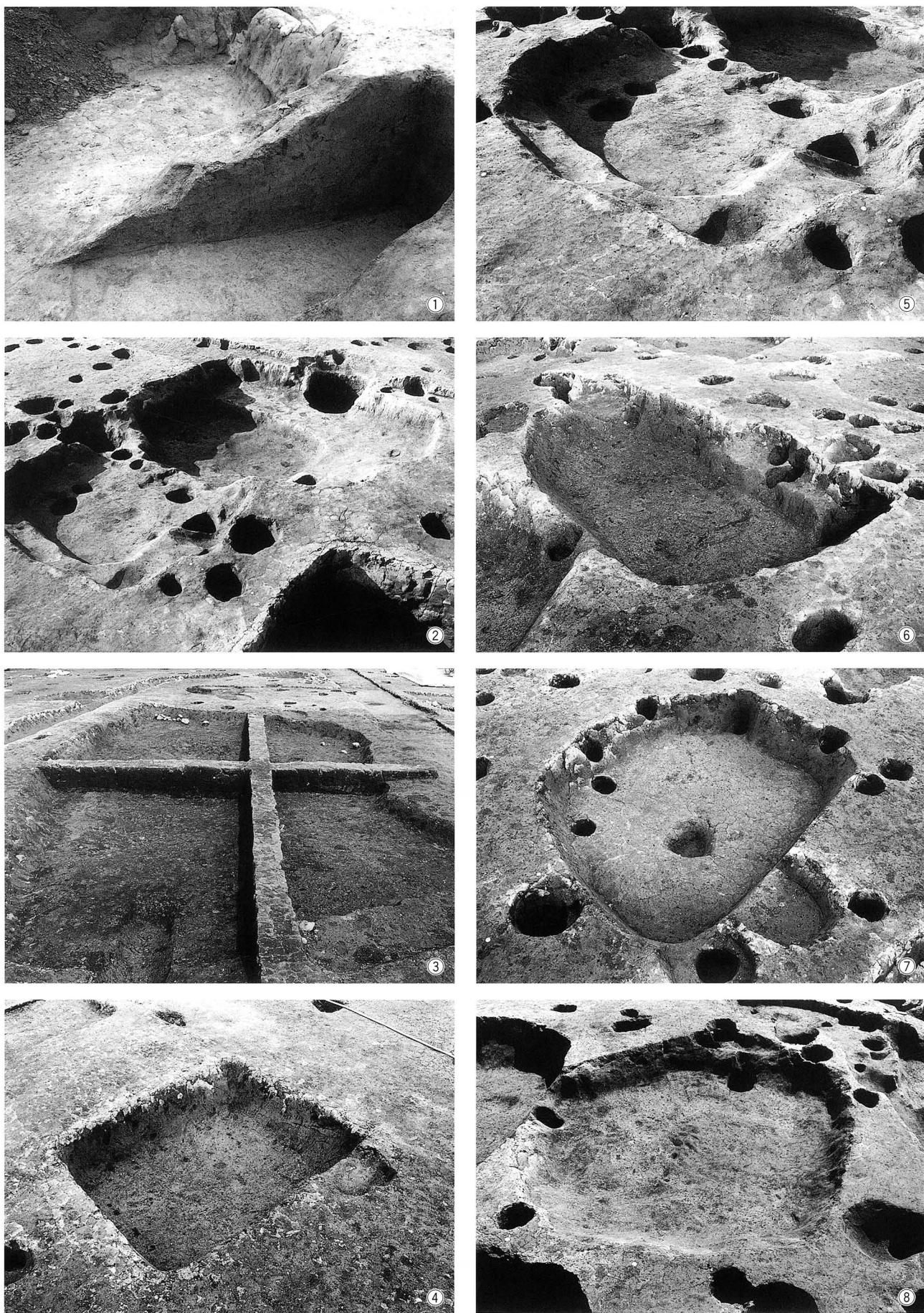
図版5 8地区検出遺構(4)

①S X10・S X21・S E 3 (真上から) ②S X13 (真上から)



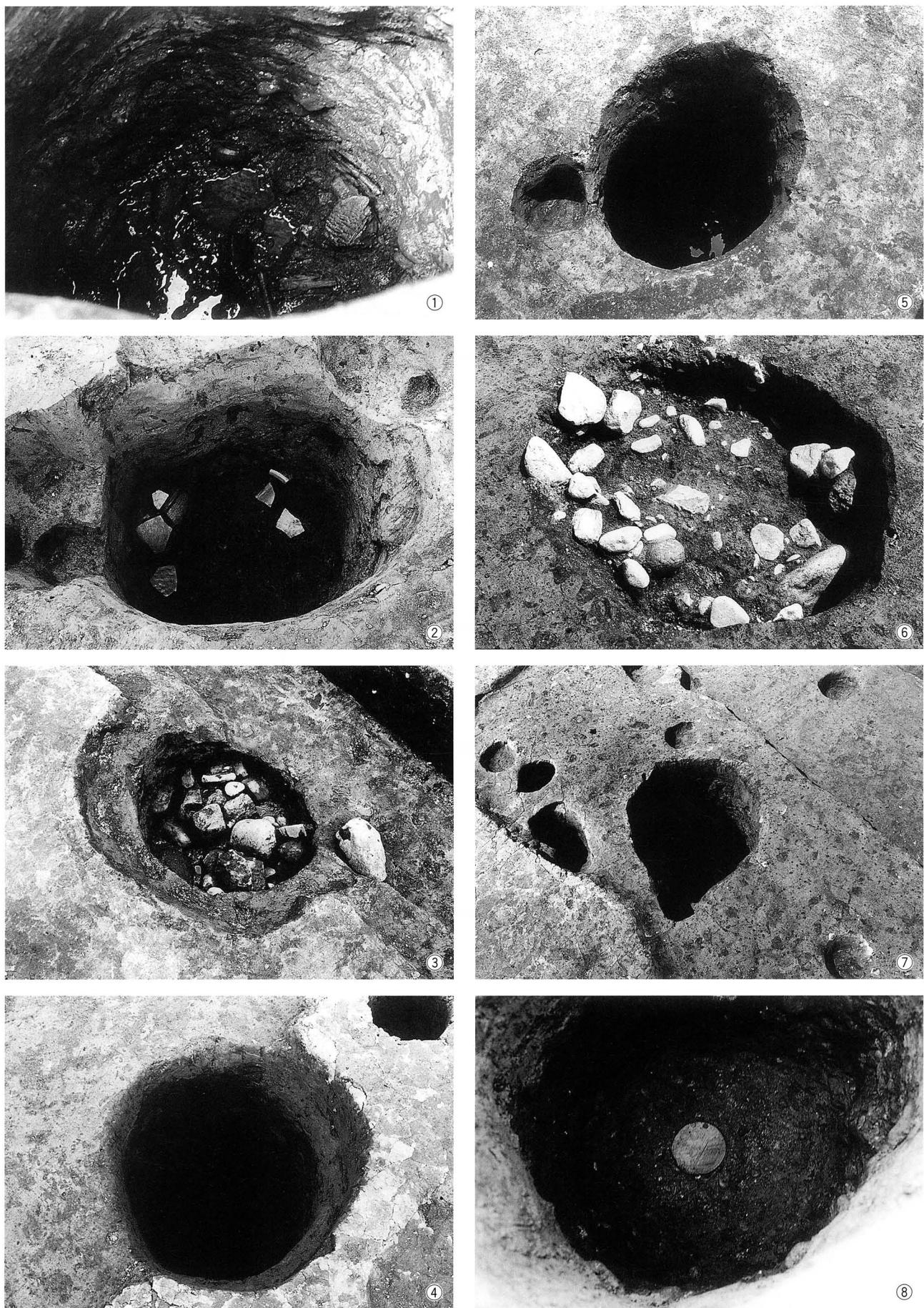
図版 6 8 地区検出遺構(5)

- ① S X 1 (南東から) ② S X 2 (真上から) ③ S X 4 (南東から) ④ S X 5 遺物出土状況  
⑤ S X 5 東西セクション (北から) ⑥ S X 6 東西セクション (南から) ⑦ S X 6 (北西から) ⑧ S X 9 階段状施設 (北から)



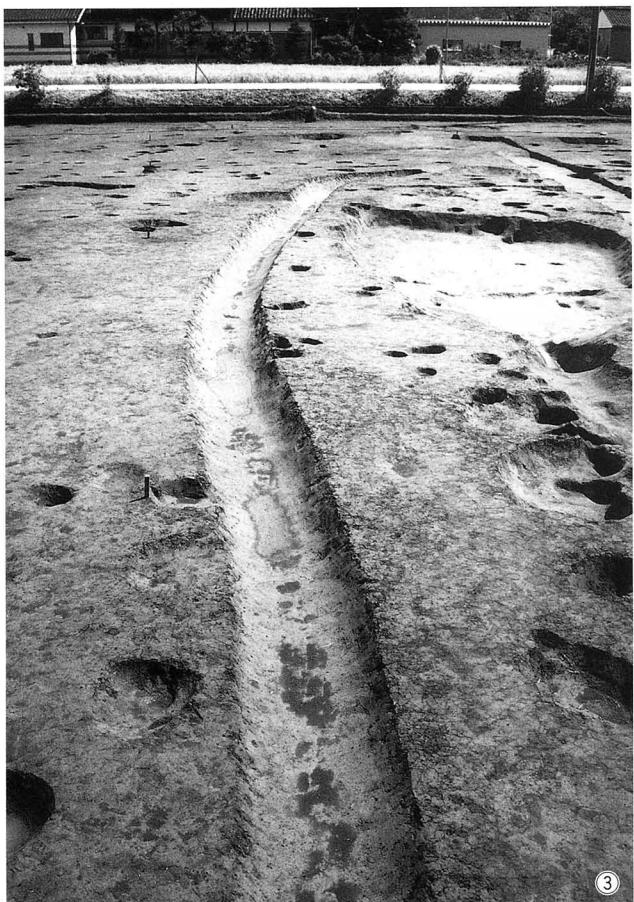
図版7 8地区検出遺構(6)

- |                           |                         |                      |
|---------------------------|-------------------------|----------------------|
| ① S X 9 階段状施設断ち割り状況（北西から） | ② S X 10・21・S E 3（南東から） | ③ S X 13 貼床検出状況（西から） |
| ④ S X 19（南西から）            | ⑤ S X 21（南東から）          | ⑥ S X 22（南西から）       |
| ⑦ S X 25（南西から）            | ⑧ S X 27（北西から）          |                      |



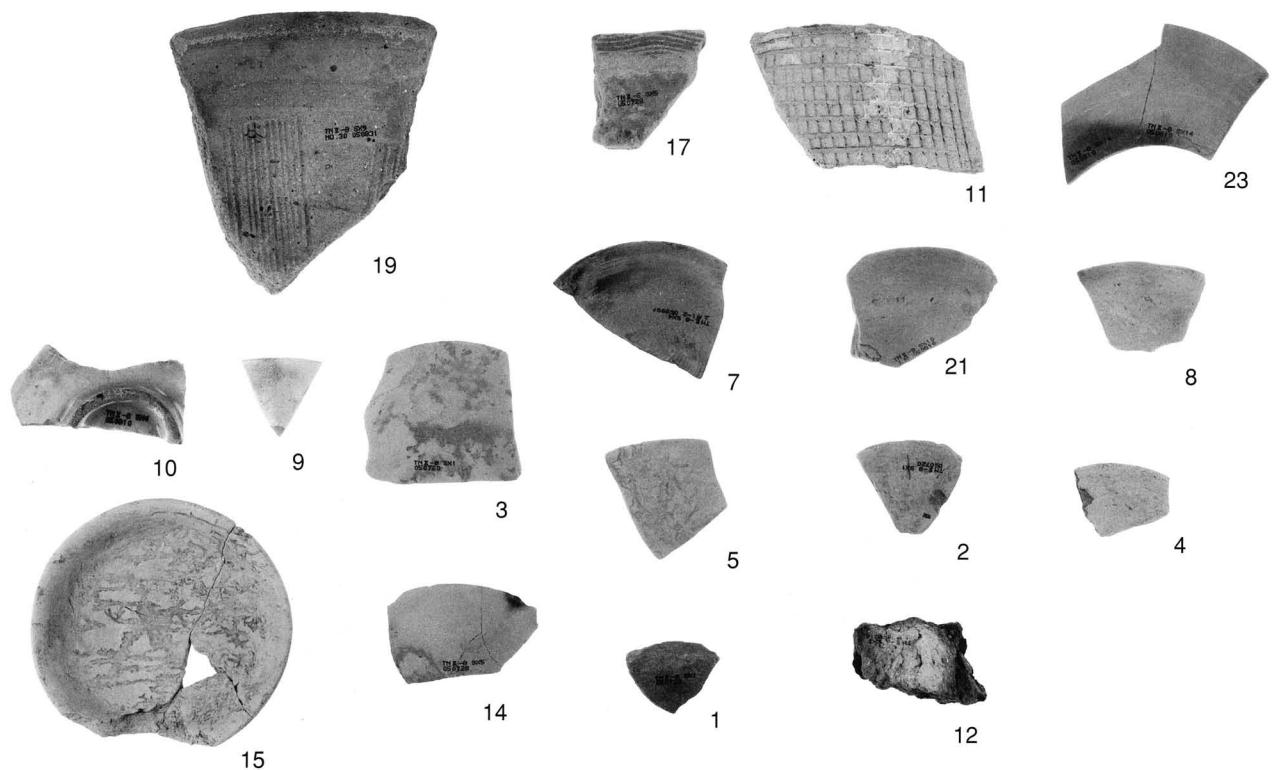
図版8 8地区検出遺構(7)

- ①SE 1出土状況（東から） ②SE 2珠州出土状況（東から） ③SE 3（北西から） ④SE 3（北東から）  
 ⑤SE 5（南から） ⑥SE 6検出状況（南東から） ⑦SE 6（南西から） ⑧SE 7（南から）

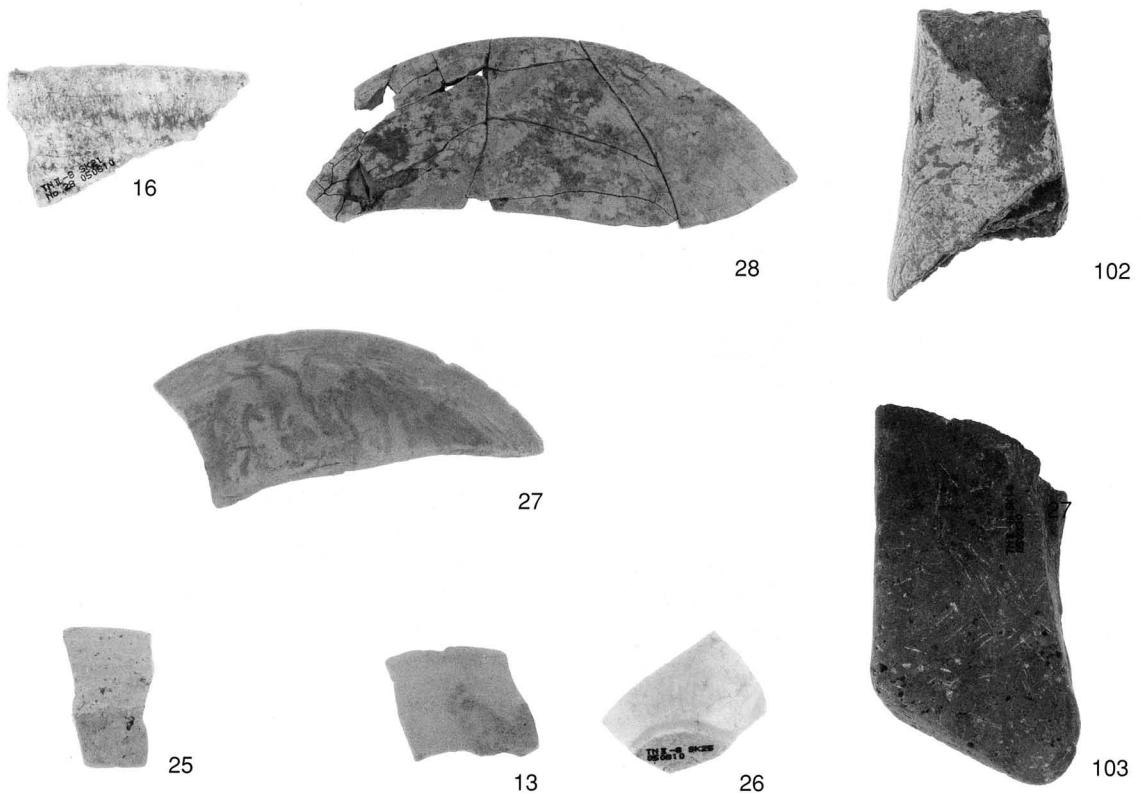


図版9 8地区検出遺構(8)

①SK 48・49（北東から） ②SD 7セクション（西から） ③SD 7（西から） ④調査参加者



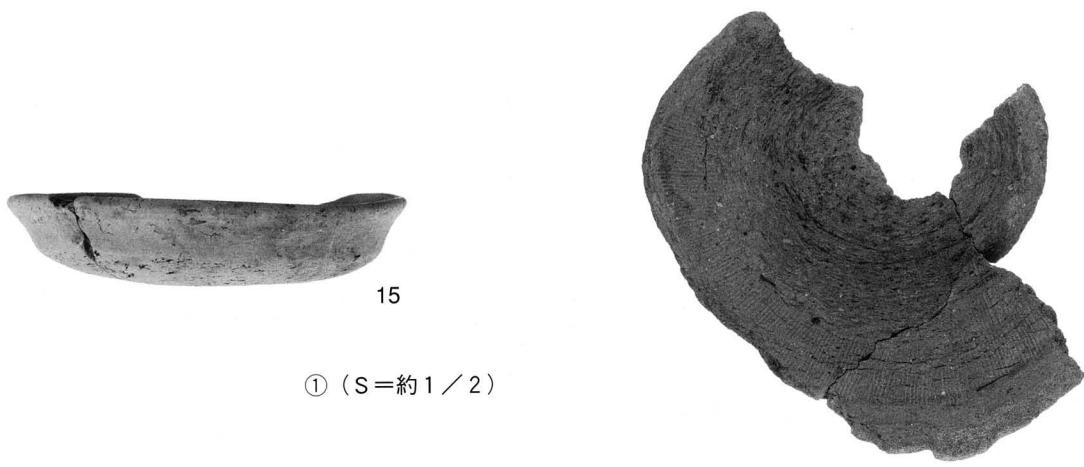
① (S=約1/3)



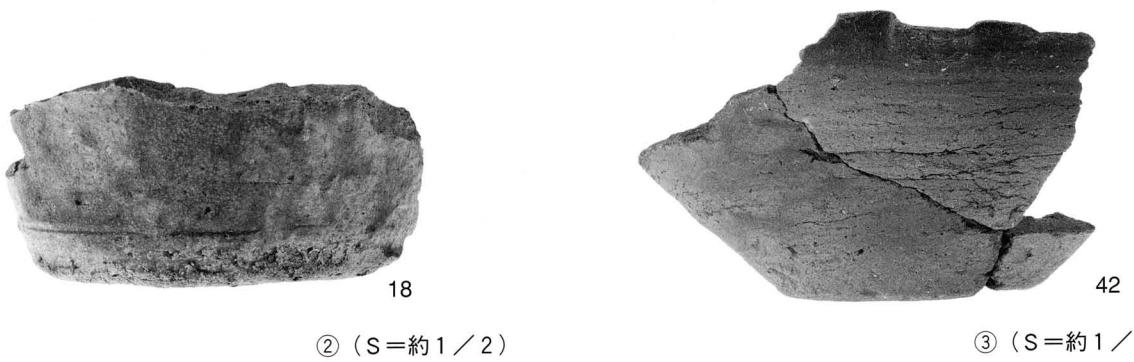
② (S=約1/4)

図版10 8地区出土遺物(1)

①竪穴状土坑出土遺物 ②竪穴状土坑・土坑出土遺物

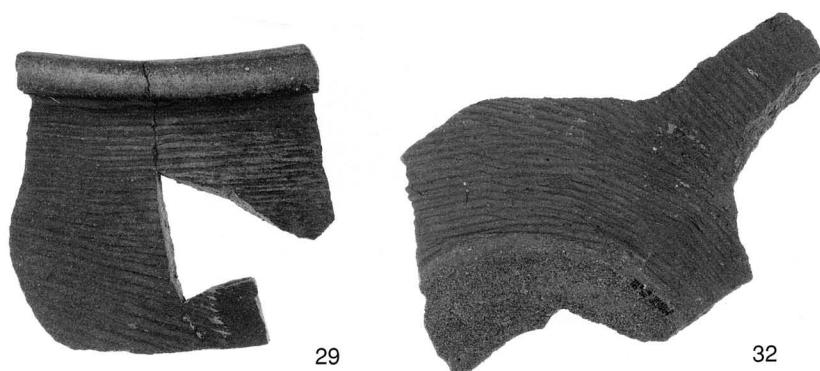


① (S=約1／2)



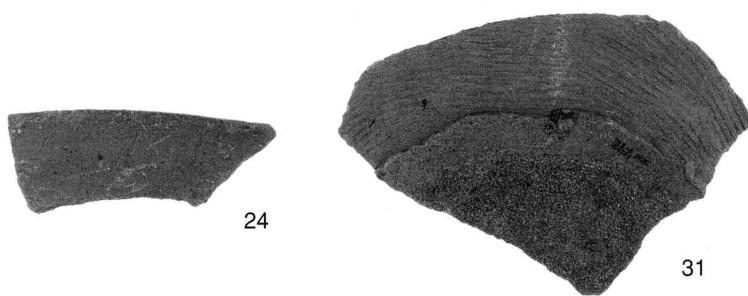
② (S=約1／2)

③ (S=約1／4)



29

32



24

31

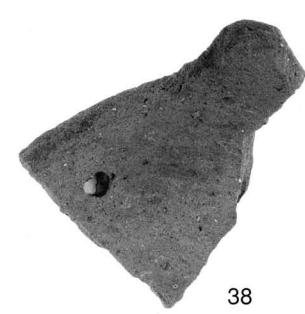
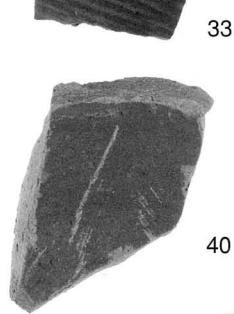
④ (S=約1／4)

#### 図版11 8地区出土遺物(2)

①S X 5 出土遺物 ②S X 9 出土遺物 ③S E 6 出土珠州擂鉢 ④竪穴状土坑・土坑出土遺物（珠州）



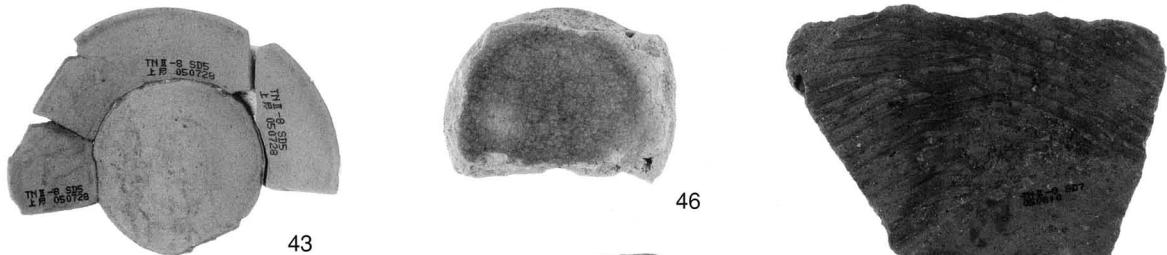
① (S=約1/4)



② (S=約1/3)

図版12 8地区出土遺物(3)

① S E 2出土珠州大甕 ②井戸出土遺物



43

46

47

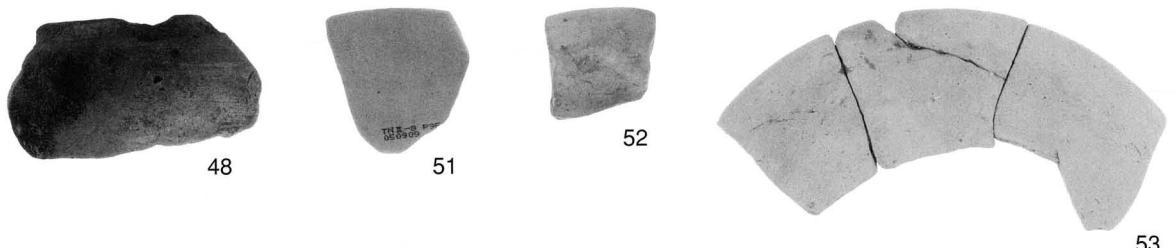


44



45

① (S=約1/2)

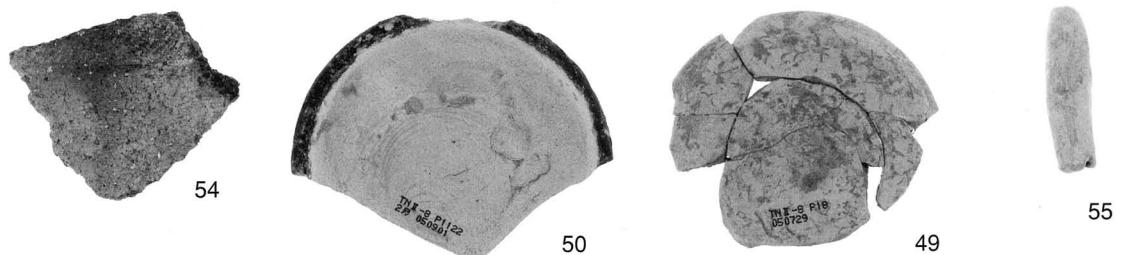


48

51

52

53



54

50

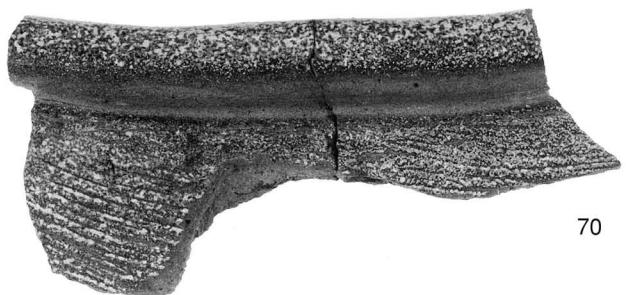
49

55

② (S=約1/2)

図版13 8地区出土遺物(4)

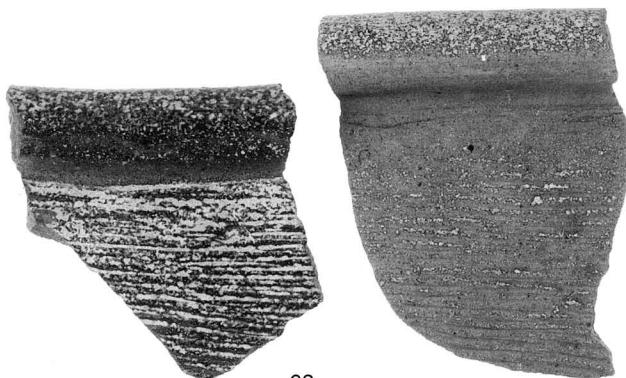
①溝出土遺物 ②穴(ピット)出土遺物



70



72



68

69



65

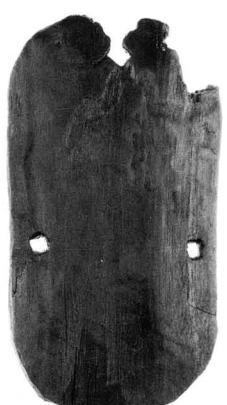


64

①



75



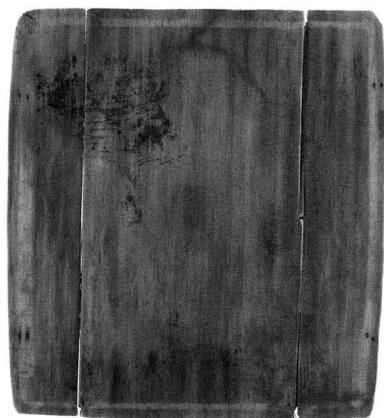
76

② (S=約1/4)

③ (S=約1/3)

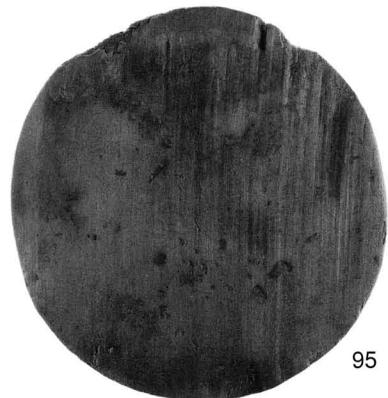
図版14 8地区出土遺物(5)

①遺構外出土遺物 ②S X 4出土下駄 ③S X 5出土下駄



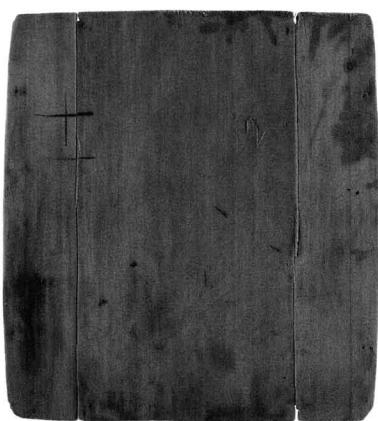
97

①

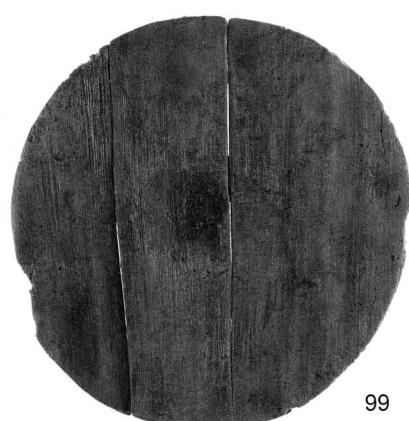


95

②



97



99

③



83

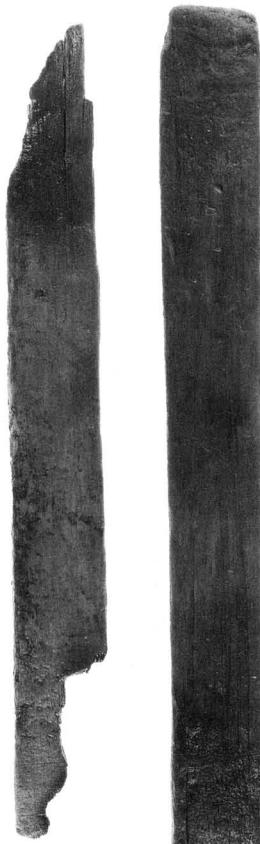
84

85

86

87

82



92

93

④



88

⑤

図版15 8地区出土遺物(6)

①S E 3 出土折敷 ②S E 2 出土円形板 ③S E 7 出土円形板 ④S E 1 出土箸状木製品 ⑤S E 1 出土木製品



96



101

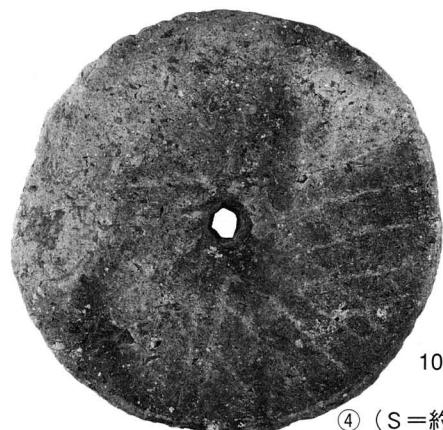
① (S=約1/4)



118



117



100

④ (S=約1/6)



105



106



107



108



109



110



111



112



113



114



115



116

⑤ (S=約4/5)

#### 図版16 8地区出土遺物(7)

① S E 3 出土木製品 ② S K 5 出土石臼 ③ S E 1 出土刀子・S X 10 出土銭貨 ④ S X 10 出土石臼 ⑤ S X 2 出土銭貨

## 報告書抄録

ふりがな	とやまけんなんとし とくなりにいせき							
書名	富山県南砺市 德成Ⅱ遺跡							
副書名	県営ほ場整備事業（担い手育成型）北山田南部地区に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(7)							
シリーズ名	南砺市埋蔵文化財調査報告書12							
編著者名	佐藤聖子 藤田慎一							
編集機関	株式会社中部日本鉱業研究所							
所在地	〒933-0824 富山県高岡市西藤平蔵581 TEL0766-63-8850							
発行機関	南砺市教育委員会							
所在地	〒932-0292 富山県南砺市井波520 TEL0763-23-2014							
発行年月日	西暦2006年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
とくなりに 徳成Ⅱ	富山県 南砺市徳成	市町村 16210	遺跡番号 556	36° 32' 44"	137° 25' 14"	050527 ~050922	2,838m <sup>2</sup>	県営ほ場 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
徳成Ⅱ	集落	中世		掘立柱建物、 竪穴状土坑、土坑、 井戸、溝、ピット		縄文土器、中世土師器 珠洲、木製品、砥石、 包丁、錢貨		

### 富山県南砺市徳成Ⅱ遺跡

県営ほ場整備事業（担い手育成型）北山田南部地区に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(7)

平成18年2月

編集 株式会社中部日本鉱業研究所

発行 南砺市教育委員会

印刷 (株)富山フォーム印刷

